

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	蔡 熙鏡
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 286 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ニヴフ語東サハリン方言の参照文法

Name	Chae, Heekyung
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 286
Date	March 12, 2020
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A reference grammar of Nivkh: The East-Sakhalin dialect

ニヴフ語東サハリン方言の参照文法

東京外国語大学大学院
総合国際学研究所博士後期課程
蔡 熙鏡

目次

略号一覧	vi
第1章 導入	- 1 -
1.0. 本稿の目的及び構成	- 1 -
1.1. 居住地域および人口	- 3 -
1.2. 系統	- 6 -
1.3. 略史	- 7 -
1.4. 社会言語学的状況	- 8 -
1.4.1. 言語名	- 8 -
1.4.2. 方言	- 8 -
1.5. 文法概説	- 11 -
1.5.1. 音韻論	- 11 -
1.5.2. 形態論	- 12 -
1.5.3. 統語論	- 15 -
1.6. 資料	- 19 -
第2章 音韻論	- 21 -
2.1. 母音	- 21 -
2.2. 子音	- 24 -
2.2.1. 破裂音	- 24 -
2.2.2. 摩擦音	- 25 -
2.2.3. 鼻音	- 26 -
2.3. 音素配列論	- 27 -
2.3.1. 語中音消失	- 27 -
2.3.2. 音節構造	- 28 -
2.3.2.1. 語頭の子音クラスター	- 29 -
2.3.2.2. 語中の子音クラスター	- 30 -
2.3.2.3. 形態素末の子音クラスター	- 33 -
2.3.2.4. 音素配列的な制限	- 36 -
2.3.2.4.1. 子音クラスターにおける制限	- 36 -
2.3.2.4.2. 軟口蓋音・口蓋垂音と母音の分布	- 37 -
2.3.3. 母音調和の痕跡	- 38 -

2.3.4.	側面音.....	- 39 -
2.3.5.	接近音.....	- 39 -
2.4.	音交替.....	- 40 -
2.4.1.	有声化.....	- 40 -
2.4.2.	母音の挿入.....	- 42 -
2.4.3.	語末無気破裂音の内破音化.....	- 43 -
2.4.4.	/h/ の脱落.....	- 44 -
2.4.5.	頭子音交替.....	- 45 -
2.4.5.1.	音韻的な環境.....	- 45 -
2.4.5.1.1.	摩擦音化.....	- 45 -
2.4.5.1.2.	破裂音化.....	- 46 -
2.4.5.2.	形態統語的な条件.....	- 47 -
2.5.	強勢.....	- 52 -
第3章	形態論.....	- 53 -
3.1.	名詞.....	- 53 -
3.1.1.	複数標示.....	- 53 -
3.1.1.1.	名詞／代名詞に後接する場合.....	- 54 -
3.1.1.2.	動詞に後接する場合.....	- 56 -
3.1.2.	格標示.....	- 57 -
3.1.2.1.	具格 = <i>kir</i> ~ = <i>γir</i>	- 59 -
3.1.2.2.	比較格 = <i>ak</i>	- 60 -
3.1.2.3.	被使役者格 = <i>aχ</i>	- 61 -
3.1.2.4.	場所格 = <i>ux</i>	- 62 -
3.1.2.5.	与格 = <i>toχ</i> ~ = <i>roχ</i> ~ = <i>rχ</i>	- 63 -
3.1.2.6.	到達格 = <i>toβo</i> ~ = <i>roβo</i>	- 64 -
3.1.3.	名詞派生.....	- 64 -
3.1.3.1.	- <i>r^h</i>	- 65 -
3.1.3.2.	- <i>k</i>	- 66 -
3.1.3.3.	- <i>f</i>	- 67 -
3.1.3.4.	- <i>t</i> ~ - <i>nt</i>	- 68 -
3.2.	代名詞.....	- 69 -
3.2.1.	人称代名詞.....	- 69 -

3.2.2.	再帰代名詞.....	- 71 -
3.2.3.	指示代名詞.....	- 73 -
3.2.4.	疑問代名詞.....	- 76 -
3.2.5.	その他.....	- 76 -
3.3.	動詞.....	- 78 -
3.3.1.	屈折形態論.....	- 78 -
3.3.1.1.	定形動詞.....	- 78 -
3.3.1.2.	非定形動詞.....	- 80 -
3.3.2.	派生形態論.....	- 82 -
3.3.2.1.	使役.....	- 82 -
3.3.2.1.1.	先行研究.....	- 83 -
3.3.2.1.2.	研究方法とその結果および考察.....	- 85 -
3.3.2.2.	テンス.....	- 91 -
3.3.2.3.	アスペクト.....	- 92 -
3.3.2.3.1.	接尾辞を用いる方法.....	- 93 -
3.3.2.3.2.	補助動詞を用いる方法.....	- 97 -
3.3.2.3.3.	重複による方法.....	- 98 -
3.3.3.	動詞複合体.....	- 99 -
3.3.3.1.	複合体.....	- 100 -
3.3.3.2.	ニヴフ語東サハリン方言の動詞複合体を形成する形式.....	- 102 -
3.3.3.2.1.	グループAの承接順序と機能.....	- 103 -
3.3.3.2.2.	グループBの承接順序と機能.....	- 105 -
3.4.	副詞.....	- 107 -
3.4.1.	非派生副詞.....	- 107 -
3.4.2.	派生副詞.....	- 107 -
3.5.	数量詞.....	- 110 -
第4章	統語論.....	- 114 -
4.1.	名詞句.....	- 114 -
4.1.1.	指示詞・数量詞・疑問詞＋名詞.....	- 114 -
4.1.2.	所有構造.....	- 116 -
4.1.3.	等位構造.....	- 117 -
4.1.3.1.	順接 (conjunction).....	- 117 -

4.1.3.1.1.	<i>=kin ~ =yin</i>	- 118 -
4.1.3.1.2.	<i>hara</i>	- 119 -
4.1.3.1.3.	その他のタイプ.....	- 120 -
4.1.3.2.	離接 (disjunction).....	- 120 -
4.2.	動詞の自他 —複他動詞を中心に—.....	- 122 -
4.2.1.	格標示 (flagging).....	- 123 -
4.2.2.	動詞における目的語標示 (indexing).....	- 127 -
4.2.3.	まとめ.....	- 129 -
4.3.	等位節.....	- 131 -
4.3.1.	副動詞による等位接続.....	- 131 -
4.3.2.	接続語による等位接続.....	- 132 -
4.3.3.	同一指示削除.....	- 133 -
4.3.4.	使役文における等位節.....	- 134 -
4.4.	連体節.....	- 135 -
4.4.1.	内の関係の連体節.....	- 135 -
4.4.2.	外の関係の連体節.....	- 139 -
4.5.	補文節.....	- 141 -
4.5.1.	<i>-t ~ -nt</i> 名詞化による補文節.....	- 143 -
4.5.2.	副動詞+「言う」タイプ.....	- 145 -
4.6.	副詞節.....	- 146 -
4.6.1.	人称標示副動詞.....	- 146 -
4.6.2.	時.....	- 147 -
4.6.3.	理由.....	- 149 -
4.6.4.	目的.....	- 149 -
4.6.5.	条件.....	- 150 -
4.6.6.	譲歩.....	- 151 -
4.7.	疑問.....	- 152 -
4.7.1.	極性疑問.....	- 152 -
4.7.2.	内容疑問.....	- 154 -
4.7.3.	<i>=/u ~ =/o</i>	- 155 -
4.8.	比較.....	- 158 -
4.8.1.	程度に差があるものの比較.....	- 158 -

4.8.1.1.	比較級の表現	- 158 -
4.8.1.2.	最上級の表現	- 159 -
4.8.2.	同程度のものの比較	- 160 -
4.8.2.1.	動詞 <i>voci-</i>	- 160 -
4.8.2.2.	<i>-inəftoχ</i>	- 161 -
第5章	結論	- 163 -
付録1	テキスト	- 166 -
	あるニヴフの家族話	- 166 -
	狩人の話	- 175 -
付録2	語彙集（ニヴフ語—日本語）	- 179 -
参考文献	- 201 -
謝辞	- 206 -

略号一覧

-	形態素境界	IND: indicative : 直說法
=	接語境界	INS: instrumental : 具格
#	複合語境界	INT: intentional : 意志／意図
~	重複の後部要素	INTERR: interrogative : 疑問法
≠	補助動詞境界	INTJ: interjection : 間投詞
+	統語的複合体境界	IPFV: imperfective : 不完了
ADVLZ: adverbializer	: 副詞化	LOC: locative : 場所格
AFFIRM: affirmative	: 断定	MOD: modality : モダリティ
ASC: associative	: 随伴者	NEG: negative : 否定
AUG: augmentative	: 指大	NMLZ: nominalization : 名詞化
CAUS: causative	: 使役	NP: noun phrase : 名詞句
CAUSEE: causee	: 被使役者格	PERM: permanent : 恒常性
COMP: comparative	: 比較格	PFV: perfective : 完了
CONJ: conjunctive	: 接続	PL: plural : 複数
CONT: continuative	: 継続	PN: proper noun : 固有名詞
CVB: converb	: 副動詞	POL: polite : 丁寧
DAT: dative	: 与格	PTCP: participle : 連体形
DIM: diminutive	: 指小	Q: question : 疑問
DU: dual	: 双数	RECP: reciprocal : 相互
E: epenthesis	: 音挿入	REFL: reflexive : 再帰
EXCL: exclusive	: 除外形	REP: reportative : 報告
FOC: focus	: 焦点	SG: singular : 単数
FUT: future	: 未来	TERM: terminative : 到達格
HBT: habitual	: 習慣	TR: transitiviser : 他動詞化
HS: hearsay	: 伝聞	VP: verb phrase : 動詞句
IMP: imperative	: 命令法	USIT: usitative : 慣習
INCL: inclusive	: 包括形	

第1章 導入

1.0. 本稿の目的及び構成

ニヴフ語はロシアの極東地方に位置するサハリン島とアムール川下流域に住むニヴフという少数民族の言葉である。ニヴフ語は大きくアムール方言グループとサハリン方言グループに分けられるが(1.4.2. 節を参照)、従来のニヴフ語に関する研究の多くはアムール方言グループに属する方言を対象としており (Panfilov (1962, 1965), Nedjalkov and Otaina (2013) など)、サハリン方言グループを対象とした研究は比較的遅れていると言わざるを得ない。本稿はサハリン方言グループに属する方言のうち、東サハリン方言を対象とする。

ニヴフ語を話せる話者の数はほんのわずかで、しかもその話者は高齢者のみである。東サハリン方言はその少数の話者のさらに一部である。このような状況の中で、東サハリン方言の文法を記述しておくことは喫緊の課題であると考えられる。

本稿は、全5章からなっている。第1章では、本稿の内容を理解するうえで必要であると思われる背景知識を提供する。具体的には、ニヴフの人たちの居住地域や人口、言語の系統、社会言語学的状況、東サハリン方言の文法概説などを述べる。

第2章では、音韻論について記述する。まず、子音と母音音素の目録を提示し、それぞれの異音について述べる。その後、音素配列論について記述していくが、ニヴフ語の音節構造を複雑にしている語中音消失 (vowel syncope) の問題を先に取り上げる。また、母音調和の名残と考えられる現象を第2音節の母音の現れ方とともに提示する。2.4. 節では、東サハリン方言の音交替現象について述べるが、従来の研究で指摘されていなかった内破音化の現象を記述する。さらに、東サハリン方言の強勢について、Krejnovič (1979: 298-299) は、複合語においてはその内部構造によって違うパターンを示すと述べていたが、筆者の現地調査のデータでは、一貫して第1音節に強勢が落ちるといった違った結果が得られている。

第3章では、形態論について述べる。3.1. 節では名詞の数に関して、文の主語以外の要素に付く複数標識が主語の複数性を表すことがある点を新たに指摘した。3.3. 節では、使役接尾辞 *-ku* による使役構文において、従属節と主節とでは、有情物の被使役者がとる格に大きな偏りがあることを指摘し、使役構文が表す意味の広さについて述べる。さらに、東サハリン方言の動詞複合体について、複合体を構成する接尾辞・接語・補助動詞の承接順序と機能についても記述を行い、形態・統語的観点から先行研究の扱いとは異なった見方を提示する。

第4章では、統語論についてみていく。この章における複他動詞や連体節、疑問文などの文法的諸問題を記述するに際しては、近年の類型論的な知見や、通言語的な概念を踏まえ、近隣の言語との対照も視野に入れつつ、ニヴフ語の特徴を明らかにしていくことを目指した。特に、アムール方言において、comitative として先行研究が扱っていた形式については、東サハリン方言では、「A=asc B」「A=asc B=asc」構造においては、A+B が主語となり、「A B=asc」構造においては、A のみが主語の扱いを受けることを、副動詞の人称と数による一致から判断できるという事実も新たに指摘した。

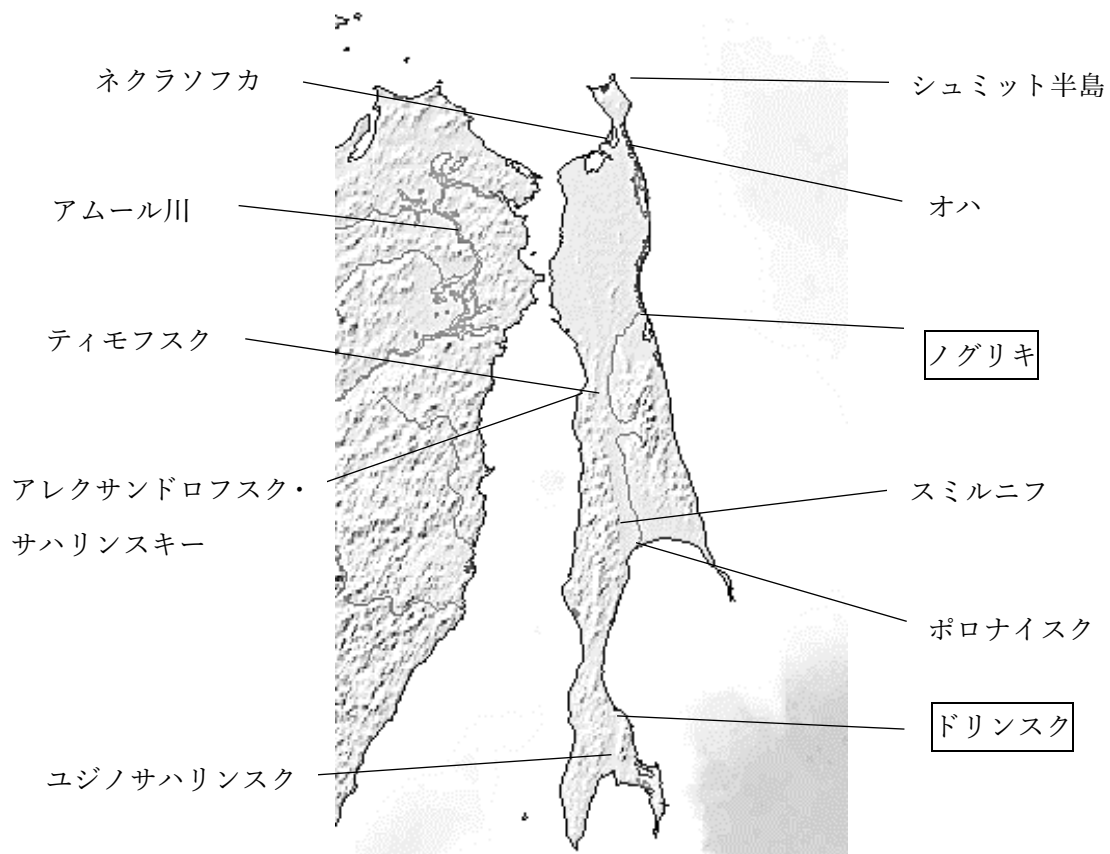
第5章では、結論として本研究のまとめと今後の課題について述べる。付録1では筆者が現地調査で収集したデータの中から、2つのテキスト資料をあげる。付録2ではニヴフ語－日本語の語彙集をあげる。

1.1. 居住地および人口

ニヴフの人々は、主にロシアのハバロフスク地域 (アムール川下流域)、サハリン島で暮らしている。



地図 1: サハリン島の位置



地図2: サハリン島 (囲み線の地名については、1.6. 節で問題にする)

ロシアの国勢調査のデータ (2010 年¹) によると、ニヅフ民族の人口および男女比などは次の通りである。

全人口	都市部	農村部		
4,652 人	男性	1,026 人	男性	1,041 人
	女性	1,348 人	女性	1,237 人
	合計	2,374 人	合計	2,278 人

¹ http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogi1612.htm (最終閲覧日 2019 年 4 月 14 日)。

同データによると、ニヴフの人たちは、ハバロフスク地域に 2,149 人が、サハリン地域に 2,290 人が居住しているという。

山田 (2013: 11) は、サハリンエナジー社が出しているデータを基に、サハリン島に居住している少数民族の居住域と人数をあげている。それによると、2010 年 1 月 1 日現在、オハ地区に 1,312 人、ノグリキ地区に 842 人、ティモフスク地区に 268 人、アレクサンドロフスク・サハリンスキー地区に 79 人、スミルニフ地区に 5 人、ポロナイスク地区に 176 人が居住していることになっている (合計 2,682 人)。これらの 7 か所以外の地域にも少数が居住する可能性があることも付け加えられている。上記の 2010 年国勢調査のデータに比べると 392 人多くっており、ニヴフ民族の正確な人口を把握するのはそう簡単ではないように思われる。

話者数に関しては、ロシアの国勢調査 (2010 年) データで、ニヴフ語が話せると答えたのは 198 人 (4.25%) であったという数値が見られる。ただし、本当に流暢な話者であるかどうかについては、疑わしいところがある。さらに、調査の当時でも話者のほとんどが高齢者であったことを考えると 2019 年現在の話者数はさらに減っていることが予想される。

1.2. 系統

ニヴフ語の系統関係は、まだ明らかになっていない。古シベリア諸語 (Paleosiberian languages) に分類されることがあるが、これは系統関係による分類ではない²。

満州語・ツングース諸語・朝鮮語とのあいだでの相互影響について論じている研究 (Krejnovič 1955) や朝鮮語との文法的な類似点をあげている研究 (Kim 1979)、類型論的な観点からニヴフ語とその近隣諸言語の異同について対照している研究 (風間 2009)、ニヴフ語の類型論的特徴や日本語との類型論的な類似を指摘している研究 (アウステルリッツ 1990) など、地理的に隣接している諸言語との関連性や言語接触を意識したたくさんの研究がある。近年ではチュクチ・カムチャツカ語族 (Chukchi–Kamchatkan languages) との関連性 (Fortescue 2011) を指摘する研究、アルギック語族 (Algic languages) やワカシュ語族 (Wakashan languages) とのつながりを想定する研究 (Nikolaev 2015a, 2015b) なども見られる。

このように、ニヴフ語の系統に関しては様々な議論が行われてきているが、まだ定説はないのが現状である。

² Jakobson (1942) は、古シベリア諸語を東古シベリア諸語 (Eastern Paleosiberian languages) と西古シベリア諸語 (Western Paleosiberian languages) に分けており、ニヴフ語は東古シベリア諸語に含めている。

1.3. 略史

高橋 (1942: 3-5) によれば、ニヴフの人々が歴史の記録にはっきりと登場するのは 17 世紀の清代になってからであり、明代以降になるとニヴフを指す「吉烈迷」「乞烈迷」「乞里迷」「吉里迷」などの記述が見られるという。ロシア人による記録では 16 世紀半ば以降、ニヴフのことを指す名称が見られ、さらに日本人による記録では 18 世紀初頭 (元禄 13 年) にニヴフの地名が現れる (ibid. 6-8)。

19 世紀に入って、1858 年からサハリン島をロシアと日本が支配することになるが、1875 年からはロシアがサハリン島を支配することになる。その後、日露戦争の結果、1905 年からサハリン島の南半分が日本の統治を受けることになる。服部 (1955: 753-754) によれば、1911 年に日本が統治していた北緯 50 度以南のニヴフの人口は 134 人で、1942 年には 102 人 (男 53、女 49) であったという。

第二次大戦後になるとサハリン島は再びロシアの支配下に置かれるが、1950 年代からは強制的な移住政策が始まる。サハリンで北方諸民族が住む村落の集中化、漁業組合やコルホーズの拡張が着手されたとき、アムール川下流域のニヴフ人は、漁業水域の減少のため、各地へ疎開してしまうことになる (中川・佐藤・斎藤 1993: 211)。

1.4. 社会言語学的状況

1.4.1. 言語名

かつては民族他称である「ギリヤーク」(Gilyak)と呼ばれていた。この名称は本来のこの民族のものではなく、ツングース系の諸民族が用いていた kil、gil、killekko などの名称をロシア人が Giljak と呼んだものであると言われている (服部 1955: 753)。この名称が日本や欧米に伝わり、長い間この民族はギリヤークと呼ばれていた。

現在は、民族自称であり、「人間」を意味する「ニヴフ (Nivkh; アムール方言の形。東サハリン方言ではニグヴン、ニヴン)」を用いるのがより一般的になっている。

1.4.2. 方言

従来の研究では、ニヴフ語に 2 つから 4 つまでの方言を認めているものがほとんどである。例えば、Panfilov (1968: 431) は「アムール方言」「東サハリン方言」「北サハリン方言」の 3 つの方言に区別しており、Savel'eva and Taksami (1970: 1) は方言を「アムール方言」と「東サハリン方言」の 2 つに分けている。また、Krejnovič (1979: 296) は「アムール方言」「サハリン方言」「シュミット方言」の 3 つ、Gruzdeva (1998: 7) は「アムール方言」「東サハリン方言」「北サハリン方言 (またはシュミット方言)」「南サハリン方言」の 4 つの方言に分けている。

Gruzdeva (1998) は、アムール方言と東サハリン方言の話者は、お互いの方言を理解することができず、北サハリン方言は両方言の中間ぐらいの位置を占めると言われており、南サハリン方言については他の 3 つの方言、特にアムール方言と比べると、音韻・文法・語彙の面で根本的な違いが認められるとしている。Fortescue (2016) のように、アムール方言、東サハリン方言、南サハリン方言のあいだの理解度が低いことから、それぞれ別の言語とみなした方がいいという主張もある。

Shiraishi (2010: 20-22) は、ニヴフ語の方言をまず 2 つのグループに分け、それぞれのグループに下位方言 (5 つ) を立てている点で他の研究と異なる。

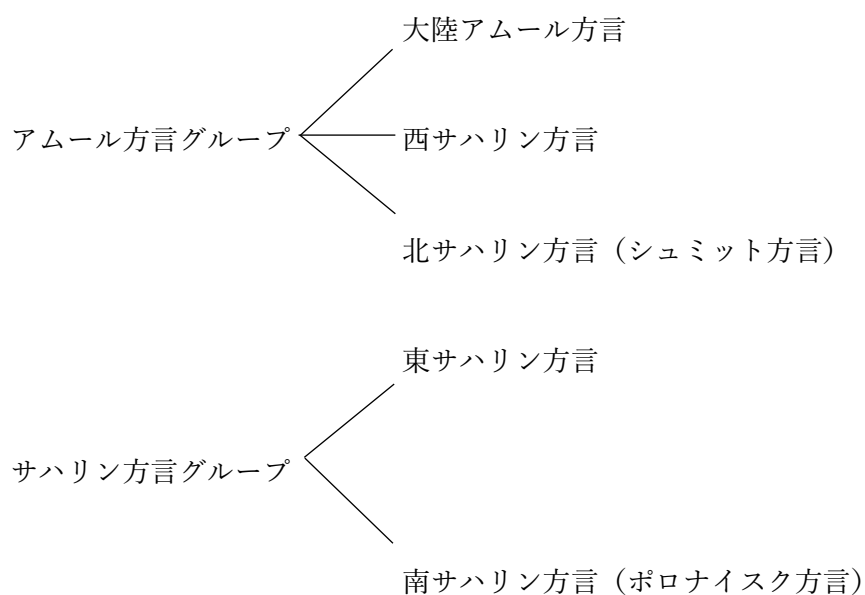


図 1: 方言区分 (Shiraishi 2010)

アムール方言と東サハリン方言では、次に示すような音韻・語彙の面での違い・対応関係が見られる (アムール方言の例は Svel'eva and Taksami 1970 からとったものである)。

	アムール方言	東サハリン方言	
母音 /ə/ と /a/	<i>təf</i>	<i>taf</i>	「家」
子音 /s/ と /r ^h /	<i>als</i>	<i>alr^h</i>	「ガンコウラン」
語末の鼻音	<i>oxla</i>	<i>exlh</i>	「子供」
語頭の /v/ と /w/	<i>vamq</i>	<i>wamq</i>	「手袋」
複数 (PL)	= <i>ku</i> ~ = <i>yu</i>	= <i>kun</i> ~ = <i>yun</i>	
連体形 ³ 接尾辞 (PTCP)	—	- <i>ŋ</i>	

³ 一般に (特にロシア語学の伝統から)、副動詞と形動詞の二つの用語はセットで用いられることが多い。しかし、アルタイ諸言語などに見られる形動詞とは異なり、ニヴフ語の連体形に名詞的用法はなく、ましてや文末述語として用いる用法もない。すなわち、もっぱら連体的に使われるため、「副動詞」を用いる一方で「形動詞」を用いず、あくまで「連体形」と呼ぶことにした。ただしグロスにはより一般的な PTCP を用いることとした。

/v/ と /w/ は、アムール方言では語頭の位置で /v/ に合流してしまい、対立がなくなっているが、語中では対立する (Shiraishi 2010)。

(1) Shiraishi (2010: 35)

ɤav- 「押す」 *ɤaw-* 「飲み込む」

さらに、アムール方言では語末 (形態素末) の鼻音が落ちるという変化が起こっている。この鼻音の脱落は一部の文法的な形態素にも見られ、例えば東サハリン方言においては、連体形接尾辞 *-ŋ* があるのに対し、アムール方言では見られない。

他にも Panfilov (1968: 432) は、語末の /r/ の無声化について、東サハリン方言と北サハリン方言の方がアムール方言より無声化の度合いが著しく高いとしているが、中川・佐藤・斎藤 (1993: 235) の報告では、どの方言話者においても特に語末の位置ではすべて無声音で発音しているといつてよいと述べられている。

1.3 節で触れたように、1950 年代からロシアでは少数民族の移住政策が行われ、ニヴフの人たちは元の居住地域から離れて他の村や都市へ移動せざるを得なかった。中川・佐藤・斎藤 (1993: 233) の調査報告書では、聞き取りを行ったニヴフの人 8 名全員が生まれた土地から離れて暮らしていて、違う方言の話者が同じ村で生活していることもごく普通の状況であるという。それが原因で互いの方言に影響を及ぼし、変化をもたらすことも十分考えられる。

1.5. 文法概説

ここでは、第2章の音韻論、第3章の形態論、第4章の統語論において、個別の問題に深く立ち入って行く前に、その準備として知っておくべきニヴフ語東サハリン方言の根本的な性格をあらかじめいったん整理しておくことにする。ここでの記述内容は全て、先行研究の記述について、筆者が現地調査 (1.6. 節参照) によって確認したものである。

1.5.1. 音韻論

ニヴフ語は6個の母音音素を持ち、/u/ と /o/ は円唇母音である。

i ə [i] *u*
e *o*
a

子音音素は28個あり、閉鎖音が10個 (5箇所の調音点で無声有気音と無声無気音を区別；両唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋、口蓋垂) を占める。

有気破裂音	<i>p^h</i>	<i>t^h</i>	<i>c^h</i>	<i>k^h</i>	<i>q^h</i>
無気破裂音	<i>p</i>	<i>t</i>	<i>c</i>	<i>k</i>	<i>q</i>
有声摩擦音	<i>v</i>	<i>r</i>	<i>z</i>	<i>ʃ</i>	<i>ʒ</i>
無声摩擦音	<i>f</i>	<i>r^h</i>	<i>s</i>	<i>x</i>	<i>χ</i> <i>h</i>
鼻音	<i>m</i>	<i>n</i>	<i>ɲ</i>	<i>ŋ</i>	
側面音			<i>l</i>		
接近音	<i>w</i>		<i>j</i>		

ニヴフ語の音節構造は非常に複雑であり、音節の頭では最大2つ、音節末では最大3つの子音連続が可能で、3子音連続は形態素末 (*eklŋ* 「子供」) と形態素内 (*ŋavr^hki* 「毛」) で起こり得る。

ニヴフ語の特徴の一つに頭子音交替と呼ばれる現象がある。形態統語的に条件づけられる環境において、後続する形態素の頭子音が規則的に変わる現象であるが、頭子音交替が起こる主な形態統語的な環境は次の通りである。

	ホスト	=後接語
前接語=	ホスト	
	重複の前部要素	重複の後部要素
従属部	主要部	

一部の例外的な場合を除き、主語と目的語、主語と述語との間で頭子音交替が起こることはない。頭子音交替は、破裂音が対応する摩擦音に変わる場合と摩擦音が対応する破裂音に変わる場合に大きく分けることができる。一部の例を以下に示すが、頭子音交替に関する詳しい記述は 2.4.5. 節を参照されたい。

taf=toχ house=DAT 「家へ」
mi=roχ inside=DAT 「中へ」

pil-a ramk (< *tamk*) big-PERM hand 「大きい手」
eβlɥ k^hu- (< *xu-*) child kill 「子どもを殺す」

語アクセントは、原則的に第一音節に落ちる。場合によっては、母音が長く発音されることがあるが音韻的な対立をなすものではない。

r^haŋqεβlɥ [r^haŋqεβlɥ] 「女の子」
tolŋa [tólŋa] 「海獣」
hasku- [hásku] 「少ない」
əfk [ə:fk] 「早く」

1.5.2. 形態論

ニヴフ語は、もっぱら接尾辞を用いる膠着語的な主要部標示型の言語として特徴づけることができる。名詞と動詞、その他の語類は形態統語的な基準によって分けることができる。

ニヴフ語の名詞に文法的な性・数のカテゴリーはなく、複数の概念は接語 =*kun* ~ =*yun* を用いて標示する。たとえ複数が標示されていなくても、文脈によって複数として解釈されることもある。さらに、主語が複数の指示対象を指す場合、同じ接語が動詞にも標示されることがあるが、やはり義務的なものではない。

ətək=yun tuk=toχ pʰrə-t(=yun).
 father=PL here=DAT come-IND(=PL)

「お父さんたちがここへ来た」

複数を表す接語 =*kun* は、いわゆる近似複数の意味を表すことができる。例えば、上記の例における「お父さんたち」は全員が誰かのお父さんである必要はなく、「お父さんとその仲間たち」という意味で解釈される。

次に、格標示について見てみると、主格と対格を表す明示的な形式はなく、属格を表す形式もない。これらの文法関係は頭子音交替によって示される。つまり、名詞 (句) と述語との間で頭子音交替が起こっている場合は、その名詞 (句) は目的語として解釈され、頭子音交替が起こっていない場合は、主語として解釈されるわけである。2つの名詞が隣り合っている場合も、主語－目的語の関係と所有者－所有物の関係では、所有者－所有物の関係でのみ頭子音交替が起こるので、文法関係の解釈に混乱が生じることはない。その他の格接語は次の通りである。

具格 (INS)	= <i>kir</i> ~ = <i>yir</i>
比較格 (COMP)	= <i>ak</i>
被使役者格 (CAUSEE)	= <i>aχ</i>
場所格 (LOC)	= <i>ux</i>
与格 (DAT)	= <i>toχ</i> ~ = <i>roχ</i> ~ = <i>rχ</i>
到達格 (TERM)	= <i>toβo</i> ~ = <i>roβo</i>

従来の研究においては、形態的な振る舞いからニヴフ語に形容詞の語類を別に立てることはせず、「性質動詞 (*kachestvennye glagoly*)」として動詞の下位範疇として扱うのが一般的である。本稿では状態動詞と呼ぶことにする。

動詞は、いくつかのムードの形 (直説法、命令法、疑問法) と様々な非定形の形 (連体、副動詞) で屈折する。命令と一部の副動詞 (先行副動詞、継起副動詞、等位副動詞) には、主語の人称と数で一致を示すものがある。以下に、最も頻繁に用いられる動詞の屈折形を示す (動詞 *vi-*「行く」の場合)。

定形動詞

終止形	<i>vi-t / vi-nt</i>	「行く／行った」
命令形	<i>vi-ja</i> [2SG]	「(あなた) 行け」
	<i>vi-ve</i> [2PL]	「(あなたたち) 行け」
	<i>vi-ta</i> [1PL]	「行こう」
疑問形	<i>vi-l</i>	「行くか」

非定形動詞

連体形 *vi-ø / vi-ŋ* 「行く (人)」

副動詞

理由	<i>vi-fke</i>	「行ったから」
条件	<i>vi-kaŋ</i>	「行けば」
譲歩	<i>vi-kaŋnapə</i>	「行っても」
時	<i>vi-ŋa</i>	「行くとき」
	<i>vi-pa</i>	「行くとすぐ」
	<i>vi-vul</i>	「行くとき」
	<i>vi-jvo</i>	「行く途中」
先行	<i>vi-ror / tot / non</i>	「行ってから」
継起	<i>vi-r / t / n</i>	「行って」
等位	<i>vi-ra / ta / na</i>	「行って」

先行・継起・等位副動詞における r 系列の接尾辞 (*-r / -ror / -ra*) は 2/3 人称単数主語、t 系列 (*-t / -tot / -ta*) は 1 人称単数と全人称複数主語に一致する。n 系列 (*-n / -non / -na*) の場合は主語の人称と数という点では t 系列と同じ振る舞いをするが、主節の述語が未来を表す場合のみに用いられる。

一部の他動詞は、単独で用いる場合と直前に目的語を取っている場合では、語形が異なるものがある。本稿では、それぞれ自立形と拘束形と呼ぶことにする。

自立形	拘束形	
<i>ij-</i>	<i>ni-</i>	「食べる」
<i>iy-</i>	<i>xu-</i>	「殺す」
<i>ev-</i>	<i>vo-</i>	「持つ、つかむ」

ニヴフ語にはいくつかの名詞派生接尾辞がある。以下に生産性の高いものを示す。

<i>-t ~ -nt</i>	出来事など (直説法の屈折接尾辞と同形)
<i>-k</i>	行為者など
<i>-f</i>	場所

上記に示した接尾辞によって派生された名詞は、テンス・アスペクトが標示され得ることや結合価を保つという点で共通している。

1.5.3. 統語論

自動詞主語を S(ubject)、他動詞主語 A(gent)、他動詞目的語 P(atient)、複他動詞の2つの目的語を T(heme) / R(ecipient)、述語を V(erb) とした場合、ニヴフ語の基本語順は SV / APV / ATRV ということができ、かなり厳格な主要部後置型のパターンを示す。名詞句においては主要部後置型の語順が義務的であり、語順を入れ替えることはできない。節においても上記の基本語順をとる傾向を示すが、目的語を節の頭に置くこともできる。ただし、その際には自立形の動詞を用いなければならない。

(2) *ni t^hlani xu-t* (自立形 *iy-* / 拘束形 *xu-*)

1SG reindeer kill-IND

「私がトナカイを獲った」

(3) *tʰlanji ni iy-t (*xu-)*

reindeer 1SG kill-IND

「トナカイは私が獲った」

節における格標示のパターンは、自動詞主語 S・他動詞主語 A・他動詞目的語 P のすべてが無標の形 (∅) で標示されるため、名詞側の標示という点からするといわゆる中立型といえることができる。しかしながら、述語の方の頭子音交替という観点からすると、他動詞の場合は P と V のあいだでしか頭子音交替は起こらないことから、主格対格型と見ることができる。さらに、複他動詞の場合、一部の例外を除けば頭子音交替は R と V の間だけで起こり、全体的には P=R≠T という図式が成り立ち、ニヴフ語は secundative (P=R≠T) タイプの言語に分類することができる (Dryer 1986, Malchukov, Haspelmath and Comrie 2010 を参照)。複他動詞に関する詳しい記述は、4.2 節を参照されたい。

(4) *əmk karantas pʰ=ɛvɬj kʰim-t.* (自立形 *imyə-* / 拘束形 *kʰim-*)

mother pencil REFL=child give-IND

「母は鉛筆を自分の子供に与えた」

(5) *əmk pʰ=ɛvɬj=təχ karantas imyə-t. (*kʰim-)*

mother REFL=child=DAT pencil give-IND

「母は自分の子供に鉛筆を与えた」

1.5.2 節で述べたように、ニヴフ語の名詞に一致の現象は見られず、一部の定形動詞 (命令) と副動詞 (先行・継起・等位副動詞) には不完全ではあるが、主語の人称と数に関する一致が現れる。ただし、人称代名詞の場合は、指示対象が複数である場合は義務的に複数形を用いる。

ニヴフ語に能動・受動の区別はなく、文法関係の変化 (結合価の増加) を引き起こすものには、他動詞化接尾辞 *-u* と使役接尾辞 *-ku* がある。使役構文に見られる 1 つの特徴としては、被使役者格 *=aχ* をとっている名詞句と使役接尾辞 *-ku* をとっている動詞の間に現れている動詞は、使役接尾辞が標示されていなくても、自動的に使役の解釈を受けるという点があげられる。

- (6) *n=atk=aχ* *vi-n* *kolkhoz=ux* *orpot-ku-jnə-ŋa*
 1SG=father=CAUSEE go=CVB.3PL kolkhoz=LOC work-CAUS-INT-CVB
 「(ロシア人たちが) 私の父をコルホーズに行かせて働かせようとしたとき」

上記の例で、動詞 *vi* 「行く」は使役接尾辞をとっていないが、「(父を) 行かせる」という使役の意味で解釈される。使役接尾辞は、副動詞接尾辞 *-r/-t/-n*、*-ror/-tot/-non* とともに指示転換の機能を果たすことがある。

- (7) *n=aχ* *ij-ku-ror* *c^h=atk* *p^hr^hə-t*.
 1SG=CAUSEE eat-CAUS-CVB.3SG 2SG=father come-IND
 「私が食べてから、あなたの父が来た (lit. 私に食べさせてから、あなたの父が来た)」

副動詞接尾辞の人称・数は主節の主語に一致しており、被使役者格の名詞句は、意味的には従属節の主語として解釈される。

従属節は原則として非定形の形をとり、上位節の前に置かれる。話し言葉においては、非定形動詞で文が結ばれることも多く見られる。例えば、条件の意味を表す副動詞接尾辞 *-vaj* で文が結ばれた場合は、願望の意味を表すことがある。

- (8) *ni* *pujŋa* *tu-vaj!*
 I bird become-CVB
 「私が鳥だったらいいのに！」

連体節について見ると、元となる文の主語・目的語のみならず、場所や道具などの斜格名詞句までも連体修飾構造の主要部とすることができる。

- (9) 丹菊・パクリナ (2008: 13)
təŋank, *la* *er^hq* *p^hi-ø* *niv=γun*
 long.time.ago Amur side dwell-PTCP human=PL
 「昔、アムール地方に住んでいた人たち」 [主語]

(10) *c^ho* *maɤ-ø* *caqo=yir*

fish cut.fish-PTCP knife=INS

「魚を切るナイフで」[斜格名詞句 (道具)]

極性疑問は疑問を表す接語 =*la* によって標示される。

(11) *c^hi* *naux* *nut=ziŋ* *nə-ɤavr-ŋ* *əŋŋ* *iv-t=la?*

you.SG today what=also do-NEG-PTCP time be-IND=Q

「あなたは今日あいている時間ありますか」

内容疑問文の場合は、接語 =*lu*~=*lo* または =*ŋa* を用いて表す。疑問詞だけを使い、他に特別な形式を用いることなく、疑問を表すこともできる。

(12) *c^hi* *t^has* *qo-t?*

you.SG where feel.a.pain-IND

「あなたはどこが痛いですか」

(13) *p^h=aŋχ* *t^ho-r* *t^has=toχ* *vi-j-t=ŋa?*

REFL=male.dog be.with-CVB.2SG where=DAT go-FUT-IND=Q

「オス犬をつれてどこへ行きますか」

1.6. 資料

本稿の記述は、筆者が2011年から2015年のあいだに5回にわたって、サハリン島のノグリキとドリンスクで行った現地調査で主に二人の話者から収集した資料(テキスト資料とエリシテーションで得られた資料)、東サハリン方言のテキスト集である丹菊・パクリナ(2008, 2014)、ニヴフの昔話を収録しているSangi(2012)、サハリン方言語彙集である丹菊(2014)に基づいている。

丹菊・パクリナ(2008)は、ニヴフ人であるウラディミール・ミハイロヴィチ・サンギ氏(1935年生まれ、Sangi 2012の著者)の採録によるニヴフ語資料であり、語り手はエカチェリーナ・フトクク女史(1908年～1979年?)である。全8話の昔話・体験談(約35分)を文字化したものである。表記については、IPA準拠の独自の方式を用いており、日本語訳が付されている。巻末にはキリル文字版のニヴフ語テキストもある。

丹菊・パクリナ(2014)は、丹菊先生自身による録音データを文字化したものであり、語り手はタチヤナ・ウリタ氏(1917年～2007年)である。全12話からなっており、表記法に関しては丹菊・パクリナ(2008)と同じである。日本語訳はあるが、キリル文字版のニヴフ語テキストは付されていない。

Sangi(2012)は、ニヴフ人であり、詩人、小説家でもある彼自身が書いたニヴフの昔話である。1話のみが収録されており、キリル文字によって書かれている。全28ページからなっている(ロシア語訳を含む)。

丹菊(2014)は、筆者の知る限り、最も収録語数の多いサハリン方言の語彙集である。

用いた資料のうち、丹菊・パクリナ(2008, 2014)にはCDが付いており、実際の音声を聞くことも可能である。

上記にあげた資料の形態素分析はすべて筆者が行っており、本文中で特にその出典を記していない例(文)は、全て筆者が現地調査より得たものである。

調査にご協力いただいた話者2名に関する情報(名前、生年、出身地)を以下に示す。

故 ヴァレンティーナ・サチグン氏：1935年生まれ、女性、サハリン島のウグヴォ村 БҮҮҮО (ノグリキ地区) 出身。

ガリーナ・パクリナ氏：1940年生まれ、女性、サハリン島のチャイヴォ村 Чайво (ノグリキ地区) 出身。なお、調査当時はドリンスクに居住していた。

両氏の間で特にはっきりとした方言的な違い、もしくは世代的な違いは認められなかった。本文中で特に明記はしていないが、例 (文) の大部分はパクリナ氏によるものである。他方、付録 1 のニヴフ語のテキストはサチグン氏によるものであるが、書き起こしの作業の際には、パクリナ氏のご協力を得ている。

第2章 音韻論

本章 音韻論では、2.1. 節 母音、2.2. 節 子音、2.3. 節 音素配列論、2.4. 節 音交替、2.5. 節 強勢、の順で記述を行う。

2.1. 母音

東サハリン方言は、ほかの方言と同じく、6個の母音を持つ。

(14) /i/ /ə/ /u/

 /e/ /o/

 /a/

/ə/ は非円唇の [i] であり、/u/ と /o/ は円唇の [u] と [o] で発音される。母音が音声的に長く発音されることがあるが、音韻的に対立するものではない。

(15) əfk	[i:fk]	「早く」
nutlu	[nudlu:]	「何か」
kəfke	[kiɸkie:]	「雨が降ったので」
həpa	[hipa:]	「間投詞 (冷たいものに触れたとき)」

語中において、母音に続く有声摩擦音が落ちることがあるが、その際には母音が長く発音される⁴。

(16) eys [e:s] 「あそこ」

⁴ 同様の現象がアムール方言と西サハリン方言で報告されている (Panfilov 1962: 22, Shiraishi 2010: 30)。

場合によっては、母音が長く発音される際に、/i/ が /e/ になることがある。

(17) *haimŋa* > *haemŋa* [hae:mŋa] 「年をとったとき」

母音 /e/ の後に口蓋垂音が続く場合は、広い [e] ~ [a] で発音される⁵。

(18) *niŋeŋ* [niŋeŋ] 「少し」

meŋr [m'eŋr] 「二つ」

eŋlŋ [eŋlŋ] 「子供」

母音 /a/ は、前もしくは後ろに口蓋垂音が来る場合は、やや後ろよりの [a] で発音されることがある。

(19) *aŋ-* [aŋ-] 「(犬が) 吠える」

qanŋ [qanŋ] 「犬」

ɤaru- [ɤaru-] 「止める」

cf. *caj* [caj] 「再び、また」

語において母音が現れる位置に注目してみると、他のすべての母音が語頭・語中・語末の位置に比較的自由に現れているのに対し、/e/ の場合は少数の名詞 (*k^he* 「網」、*e* 「櫛」) や副詞 (*lele* 「たくさん」)、接辞 (副動詞 *-fke*) などを除き、語末に現れるのは稀である。以下にそれぞれの母音の例を示す。

(20) /i/ *in* 「彼」

cif 「秋」

p^hi 「自分」

/ə/ *ə^hk* 「夜」

p^hə^h 「机」

napə 「まだ」

⁵ 西サハリン方言においても同様の現象が報告されている (Shiraishi 2010: 33)。

/a/	<i>azmur^h</i>	「お土産」
	<i>tamχ</i>	「タバコ」
	<i>c^hχa</i>	「お金」
/o/	<i>osk</i>	「ウサギ」
	<i>tol</i>	「水」
	<i>c^ho</i>	「魚」
/u/	<i>ut</i>	「体、身長」
	<i>kutli</i>	「外」
	<i>lu</i>	「歌」
/e/	<i>eβlŋ</i>	「子供」
	<i>k^heŋ</i>	「太陽」
	<i>k^he</i>	「網」

2.2. 子音

子音の音素目録は下記の表のとおりである。

(21) 東サハリン方言の子音音素

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
破裂音	有気	p ^h	t ^h	c ^h	k ^h	q ^h	
	無気	p	t	c	k	q	
摩擦音		f v	r ^h r	s z	x y	χ ʁ	h
鼻音		m	n	ɲ	ŋ		
側面音			l				
接近音		w		j			

2.2.1. 破裂音

破裂音は有気／無気の対立を示す。無気音の系列は朝鮮語の濃音 (경음 kyengum, 된소리 toynsoli) の発音に類似している。/c^h/ と /c/ は、それぞれ破擦音 [t^hc] と無声破裂音 [c] に近い音声で発音される音であるが、頭子音交替が起こる際にはそれぞれ /s/ と /z/ に変わることから、形態音韻論上の理由から破裂音として扱う (2.4.5. 節を参照)。

有気と無気の違いによるミニマルペアは、語頭の位置でのみ見られる。

- (22) p^haχ 「窓」 vs. paχ 「石」
 t^haχ 「額」 vs. taχ 「風邪」

無気破裂音が有声音、特に母音や鼻音の後に来る場合は、対応する有声音の [b], [d], [ʃ], [g], [g] で発音されることが多い。

- (23) *nenpər^hk* [nenbər^hk] 「自分一人」
huŋtaf [huŋdaf] 「その家」
həmci- [həmji] 「そのようである」
c^hamkun [c^hamgun] 「シャーマンたち」
manŋq- [maŋg-] 「強い」

有声破裂音を含むロシア語が借用される場合は、語頭以外の位置では有声破裂音で発音される。

- (24) ロシア語 > ニヅフ語
- | | | | |
|----------|---|--|-------|
| работать | > | <i>orpot-</i> [orbot] | 「働く」 |
| яблоки | > | <i>japlak ~ japrka</i> [jablak ~ jabrka] | 「リンゴ」 |
| доктор | > | <i>toxtor</i> [doxtor ~ toxtor] ⁶ | 「医者」 |

2.2.2. 摩擦音

摩擦音には、有声摩擦音 /v, r, z, ʝ, ʁ/ とこれに対応する無声摩擦音 /f, r^h, s, x, χ/ がある。/s/ と /z/ の調音点は歯茎であるが、頭子音交替が起こるときに破裂音の /c^h/ と /c/ と交替するので、記述の便宜上硬口蓋に入れてある。/r^h/ と /r/ は、それぞれ舌先の震えを伴う [r̥] とその有声の [r] であり、/r/ ははじき音 [r̥] で発音されることがある。

- (25) *nerχ* [nerχ] 「私に」
ovroφ [óvroφ] 「クロテン」

/f/ は両唇摩擦音 [ɸ]、/v/ はその有声音の [β] で発音される⁷。摩擦音の場合も、破裂音と同様、語頭以外の位置でのミニマルペアは見つかっていない。

- (26) *vi-* 「行く」 vs. *fi-* 「暮らす、住む」
ʁaw- 「飲み込む」 vs. *χaw-* 「～という、～と呼ばれる」
ra- 「飲む」 vs. *r^ha-* 「焼く」

/h/ は語頭にのみ現れる。

⁶ 語末の /r/ は無声化しない。

⁷ 唇歯音の [f], [v] で記述している研究もある (Panfilov 1962, Savel'eva and Taksami 1970, Gruzdeva 1998)。

(27) *hap-* 「塩辛い、辛い」

hermaf- 「潜る」

hut 「それ」

hivs 「白樺」

2.2.3. 鼻音

鼻音には /m, n, ɲ, ŋ/ がある。語末に鼻音を持つ名詞の場合、後ろにはほかの要素が続くときにその鼻音が落ちることがある。

(28) *qankun* < *qanŋ* 「犬たち」

ɛɪl pan- < *ɛɪlŋ* 「子供が生まれる」

鼻音が後続する子音の調音点に同化することはない。

(29) *antχ* 「お客」

anko 「どこ」

nonq 「動物の仔」

hunv- 「ある／いる、暮らす」

2.3. 音素配列論

2.3.1. 語中音消失

音素配列論の記述に入る前に、ニヴフ語で起きた語中音消失 (vowel syncope) について述べておく必要がある。ニヴフ語の語根は、方言を問わず、1音節の語根が圧倒的に多く、一部の借用語を除けば、3音節以上の語根は見られない。

Shiraishi (2009) は、西サハリン方言について、(C)VC(C)VC 語形は自然発話においてしばしば第2母音が脱落し (C)V(C)CC に縮約されることがあると指摘しているが、このような現象は東サハリン方言においてもみられる。以下に例を示す (アクセントはすべて第1音節に落ちる)。

(30) <i>kʰəlmrʰ ~ kʰəlmərʰ</i>	「へそ」
<i>kʰuvɯŋ ~ kʰuvuŋ</i>	「糸」
<i>hotɯŋ ~ hotoŋ</i>	「町」
<i>pityŋ ~ pityəŋ</i>	「本」
<i>sizm ~ sizəm ~ sizam</i>	「日本人」

Austerlitz (1990: 21-22) は、南サハリン方言のデータを基に、語根初頭の子音クラスター (破裂音と摩擦音) の連続が生じた変化について、次のようなプロセスを想定している。要約して示す。

(31) Austerlitz (1990: 21-22; 表記は原文ママ)

QVQV- (Q= stop, V=vowel) : アクセントは第2音節

母音間の破裂音が摩擦音化 (spirantization) → 非強勢母音の消失 (syncope)

例 : **təký* → **taxý* → *txy* 「上、上に」 (または **təgý* → **təgý* → **tgy* → *txy*)

さらに、語根頭の QR- (R=resonant) 連続 (*tla* ← **tála* 「もり (鋸)」)、語根中・語根末の子音クラスターについても、原則として同じプロセスで説明できるとしている。

Krejnovič (1979: 299) は、アムール方言の多くの語において、アクセントが第2音節から第1音節へ移るといふ変化が起きていると述べている。現在の東サハリン方言においても、語アクセントは原則的に第1音節にあるが (2.5. 節を参照)、アムール方言と同様の変化が起きている。もし上記で見た Austerlitz の説明が正しいとすれば、アムール方言と東サハリ

ン方言の両方で語根頭の「破裂音+摩擦音」の子音クラスターが見られることから、語中音消失はアクセントの移動より先に起こったと推定される。

語根末で母音が現れる場合とそうではない場合で揺れが見られるのは、語中音消失という音変化が起きている途中であるためであり、ニヅフ語の音韻論の記述を複雑にする一つの原因になっている。

2.3.2. 音節構造

東サハリン方言は、以下に示すように非常に多様な音節構造を持つ。音節頭では最大二つ、音節末では最大三つの子音連続が起こり得る。

(32) 音節構造 (V=母音、C=子音)

V	<i>e</i> 「櫛」、 <i>i</i> 「川」
CV	<i>mu</i> 「船」、 <i>ŋa</i> 「けもの」
VC	<i>ux</i> 「鼻」、 <i>ut</i> 「体、身長」
CVC	<i>pux</i> 「汗」、 <i>ŋoχ</i> 「脂身」、 <i>tur^h</i> 「肉」
CCV	<i>k^hlə</i> 「空」、 <i>c^hχa</i> 「お金、金銭」
CCVC	<i>c^hχar^h</i> 「木、枝」、 <i>mχoŋ</i> 「十」
VCC	<i>oχm</i> 「樹皮」、 <i>ət^k</i> 「父」
CVCC	<i>comr^h</i> 「葉」、 <i>nonq</i> 「動物の仔」
CCVCC	<i>mrolf</i> 「昔」、 <i>t^hχar^hp-</i> 「忘れる」
VCCC	<i>antχ</i> 「客」、 <i>eβlŋ</i> 「子供」、 <i>eŋf^q</i> 「花」
CVCCC	<i>hontq</i> 「袋」、 <i>t^hoβzŋ</i> 「実」
CCVCCC	<i>nr^haksk</i> 「みな、すべて」

音素目録にあげたすべての母音と子音は語頭に現れ得る。しかしながら、子音クラスター(特に語頭位置)においては、音素配列に強い制約が見られる。以下では、語頭・語中と形態素末に起こり得る子音クラスターのタイプとそこに見られる制約について記述する。

2.3.2.1. 語頭の子音クラスター

語頭の子音クラスターC1C2- 構造では現れ方に強い制限が見られる。子音クラスターにおいて、C1 には破裂音 (P)、摩擦音 (F)、鼻音 (N) が、C2 には破裂音が現れることはなく摩擦音、鼻音、側面音 (L) が立ち得る。以下にそれぞれの可能な組み合わせをタイプ別に示す。

(33) a. /PF-/ タイプ

/p ^h r/	p ^h rə-	「来る」
/p ^h x/	p ^h xə-	「帰る」
/t ^h x/	t ^h xəwr ^h	「屋根」
/t ^h χ/	t ^h χar ^h p-	「忘れる」
/t ^h v/	t ^h vi-	「終わる」
/c ^h χ/	c ^h χa	「お金」
/k ^h r ^h /	k ^h r ^h u	「明後日」
/k ^h v/	k ^h var ^h	「うじむし」
/pr ^h /	pr ^h oŋ	「カラフトシシヤモ」(丹菊 2014)
/ks/	ksur ^h ku-	「滴る」(丹菊 2014)
/tr/	trat	「セキレイ」(丹菊 2014)

b. /PN-/ タイプ

/p ^h ŋ/	p ^h ŋaɸ-	「若い」
/t ^h n/	t ^h noχ	「ひも」
/t ^h ŋ/	t ^h ŋa	「白鳥」
/c ^h ŋ/	c ^h ŋaj	「写真、絵」
/k ^h n/	k ^h nu-	「明るくなる、夜が明ける」

c. /PL-/ タイプ

/t ^h l/	t ^h lanji	「トナカイ」
/k ^h l/	k ^h lə	「空」
/pl/	pləf qar ^h q	「黄色い花がつくユリ」(丹菊 2014)
/kl/	kləut	「ヤマネコ」(丹菊 2014)
/ql/	qlaɸlar ^h	「乱暴な、表面が粗い、ざらざらした」(丹菊 2014)

d. /FF-/ タイプ

/xr/ *xro-* 「掛ける」

e. /NF-/ タイプ

/mɣ/ *mɣoqr^h* 「十」

/mr/ *mrolf* 「昔」

/nr^h/ *nr^haksk* 「皆、全部」

/nɣ/ *nɣukr^h* 「四十」

/ɲɣ/ *ɲɣər* 「上まぶた (?)」

f. /NL-/ タイプ

/ml/ *m^hla* 「耳」

g. /NN-/ タイプ

/ɲɲ/ *ɲɲar^h* 「はしご、階段」

子音クラスター C1C2- においては /PF-/、/PN-/、/NF-/ のタイプが最も一般的であり、/P/ にはほとんど有気音が現れる。C2 の位置に破裂音が来ることはなく、接近音と声門摩擦音 /h/ が語頭の子音クラスターに現れることもない。さらに、C1 の位置に口蓋垂を調音点とする音が現れることは非常に稀であり、C1 に摩擦音が現れる例も現在確認できているのは上記の 1 例 (/FF-/ タイプ) のみである。

2.3.2.2. 語中の子音クラスター

語中では最大 /-C1C2C3-/ の子音クラスターが現れる。語中では接近音 (A) も子音クラスターを形成することがある。起こり得る子音クラスターのタイプを /-C1C2-/ から以下に示す。

(34) a. /-FP-/ タイプ

/fɕ/ *tafciɲ* 「塩」

/r^hk/ *ɲar^hki* 「蚤 (のみ)」

/rɸ/ *orpot-* 「働く」

/r^hp/ *ar^hpər^h* 「蓋」

/r^hq/ *fer^hqaj-* 「なぐる」

/sk/	fəskə-	「驚く」
/sp/	espə-	「刺す」
/sq/	zosqu-	「割る」
/xt/	pixtə	「ひざ」
/χc/	vaχcu-	「裂く」
/χt/	maχtur ^h	「本当」

b. /-FN-/ タイプ

/ɸn/	aɸni-	「ほっする、ほしい」
/rm/	hermaf-	「潜る」
/xm/	uxmu-	「戦う」
/χŋ/	eχŋav-	「笑う」
/zm/	azməc	「男性」

c. /-FF-/ タイプ

/ɸr/	aɸri	「つば」
/ɸz/	niɸzaχ	「涙」
/rɸ/	p ^h sarɸo-	「休む」

d. /-FL-/ タイプ

/ɸl/	iɸlu-	「怖がる、恐れる」
/rl/	irlə-	「引っ張る、運搬する、引く」
/zl/	vizləχ	「根」

e. /-FA-/ タイプ

/ɸj/	qɑɸju-	「泣く」
------	--------	------

f. /-PF-/ タイプ

/cv/	zicvu-	「踏む」
/qv/	ɸɑqvə-	「洗う、洗濯する」
/tɸ/	pity(ə)ŋ	「本」

g. /-NP-/ タイプ

/mc/	t ^h ɑmci-	「どう、どのように」
/nt/	vantu-	「育つ」
/ŋc/	oŋcik	「つんぼ、耳が聞こえない人」
/ŋq/	maŋqo-	「好む」

- h. /-NF-/ タイプ
- | | | |
|------|---------------|------|
| /mr/ | <i>amraŋ</i> | 「味」 |
| /pɣ/ | <i>ŋaŋɣəf</i> | 「骨」 |
| /pɬ/ | <i>eŋkar-</i> | 「盗む」 |
- i. /-NL-/ タイプ
- | | | |
|------|----------------|-------|
| /ml/ | <i>kʰəmlə-</i> | 「考える」 |
|------|----------------|-------|
- j. /-NA-/ タイプ
- | | | |
|------|---------------|----------|
| /mj/ | <i>kəmjo-</i> | 「ふれる、触る」 |
|------|---------------|----------|
- k. /-LF-/ タイプ
- | | | |
|------|----------------|-------|
| /lɣ/ | <i>rʰəlyə-</i> | 「開ける」 |
| /lɬ/ | <i>olkaŋ</i> | 「豚」 |
- l. /-LN-/ タイプ
- | | | |
|------|-----------------|------|
| /lm/ | <i>kʰəlmərʰ</i> | 「へそ」 |
|------|-----------------|------|
- m. /-AF-/ タイプ
- | | | |
|------|---------------|------|
| /jv/ | <i>tujvu-</i> | 「沈む」 |
|------|---------------|------|
- n. /-AN-/ タイプ
- | | | |
|------|---------------|-------|
| /jm/ | <i>hajmə-</i> | 「老いる」 |
|------|---------------|-------|
- o. /-AL-/ タイプ
- | | | |
|------|---------------|-----------|
| /wl/ | <i>ɣawlus</i> | 「紙、新聞、雑誌」 |
|------|---------------|-----------|

/cʰ/ を除き、語中の子音クラスターに有気破裂音が現れることはなく、さらに /-C1C2-/ において、C2 の位置に無声摩擦音が現れる例も非常に稀である。例外とも言えそうなこれらの例は、重複によるプロセスで形成された一部の語に見られる。

- (35) *cʰifcʰiv-* 「濡れている」
cʰuysuy- 「飛び出す」(丹菊 2014)

語中では最大三つの子音クラスターが起こり得るが、非常に珍しく、一つのタイプしか起こらない。

(36) /-Fr^hk-/ タイプ

/vr ^h k/	<i>ŋavr^hki</i>	「毛」
/γr ^h k/	<i>vəγr^hkə-</i>	「腐る」
/kr ^h k/	<i>ekr^hki-</i>	「汚い」

2.3.2.3. 形態素末の子音クラスター

形態素末における子音クラスターの構造は非常に複雑であり、タイプの数も一番多い。最大三つの子音が連続して起こり得る。以下に /-C1C2/ の例から示す。

(37) a. /-NF/ タイプ

/mr ^h /	<i>q^homr^h</i>	「砂」
/ms/	<i>ems</i>	「歯」
/mx/	<i>ŋamx</i>	「髪の毛」
/mχ/	<i>tomχ</i>	「ひじ」
/nr ^h /	<i>minr^h</i>	「八」
/nχ/	<i>nanχ</i>	「姉」
/ŋr ^h /	<i>coŋr^h</i>	「頭」
/ŋs/	<i>t^haŋs</i>	「いくら」

b. /-NP/ タイプ

/mk/	<i>tamk</i>	「手」
/nq/	<i>nonq</i>	「子 (動物の仔)」
/ɲk/	<i>ɲnk</i>	「食べ物」
/ŋq/	<i>r^haŋq</i>	「女性」

c. /-NN/ タイプ

/nŋ/	<i>qanŋ</i>	「犬」
/ɲm/	<i>tɲm</i>	「ゆび」

d. /-PP/ タイプ

/tk/	<i>ət^hk</i>	「父親」
------	------------------------	------

e. /-PF/ タイプ

/cx/	əcx ⁸	「夫」
/cχ/	ɲacχ	「あし」
/kr ^h /	nəkr ^h	「四つ」
/kz/	pəkz-	「なくなる、消える」
/pr/	kəpr-	「立つ」
/qr/	caqr-	「はねる、跳躍する」
/qr ^h /	ɲaqr ^h	「一つ」
/tf/	ɲetf	「かお」

f. /-PN/ タイプ

/kɲ/	takɲ	「つめ」
/tɲ/	t ^h atɲ	「朝」

g. /-LF/ タイプ

/lx/	hilx	「舌」
------	------	-----

h. /-FP/ タイプ

/fq/	ɲafq	「友達、友人」
/r ^h k/	xir ^h k	「シラミ」
/r ^h q/	lar ^h q	「服」
/sq/	asq	「弟、妹」
/χt/	oχt	「薬」

g. /-FN/ タイプ

/ɬm/	oɬm	「樹皮」
/rɲ/	murɲ	「馬」
/vɲ/	k ^h uvɲ	「糸」

h. /-FF/ タイプ

/ɣf/	muyf	「日、昼間」
/ɣr/	iyr-	「まねる」
/ɣr ^h /	aɣaɣr ^h	「着物」

⁸ この語は əcx~əc^hx で揺れが見られる。問題の語形をあげている丹菊 (2008) と丹菊 (2014) では、前者では無気破裂音 /c/, 後者では有気破裂音 /c^h/ になっており、テキスト集である丹菊・パクリナ (2008) にも両方の形が現れている。

/ʏs/	<i>tuys</i>	「ことば」
/ʏz/	<i>iyz-</i>	「着る」
/rf/	<i>parf</i>	「夕方」
/zr ^h /	<i>ozr^h</i>	「蟻」
i. /-AP/ タイプ		
/jq/	<i>nojq</i>	「たまご」
j. /-AF/ タイプ		
/wx/	<i>nawx</i>	「今日」

次は /-C1C2C3/ の子音クラスターをタイプ別にまとめる。

(38) a. /-PFP/ タイプ

/ksk/ *nr^haksk* 「みな」

b. /-FFP/ タイプ

/ʏr^hk/ *vəʏr^hk* 「のう、うみ (膿)」

c. /-NFP/ タイプ

/ɲfq/ *enfq* 「花」

d. /-NPP/ タイプ

/ntq/ *hontq* 「袋」

e. /-FFF/ タイプ

/rʏr^h/ *ɲarʏr^h* 「胸 (むね)」

f. /-FFN/ タイプ

/ʏvɲ/ *ɲiʏvɲ* 「人間」

/ʌzɲ/ *t^hoʌzɲ* 「実」

g. /-NFF/ タイプ

/ɲʏr^h/ *uɲʏr^h* 「星、影」

h. /-FPN/ タイプ

/r^hqɲ/ *ker^hqɲ* 「海」

i. /-FLN/ タイプ

/ʌlɲ/ *eʌlɲ* 「子供」

j. /-ANP/タイプ

/jɲk/ məjɲk 「ちち、ちぶさ」

/wɲk/ awɲk 「コオリガモ」

語頭・語中、形態素末で起こり得る子音クラスターは、アムール方言と南サハリン方言においても /CC-/、/-CCC-/、/-CCC/ で東サハリン方言と変わらない。興味深いのは、語頭の子音クラスターにおいて、南サハリン方言では /w/ が阻害音とともに /tʰw/, /cʰw/ の子音クラスターに現れるのに対し、/v/ は現れない点である (服部 2000: 376)。

東サハリン方言では /tʰv/, /kʰv/ が見られ、逆に /w/ は語頭の子音クラスターには現れない。アムール方言においても /w/ が語頭の子音クラスターに現れることはないのに対し、/v/ は見られる。

2.3.2.4. 音素配列的な制限

2.3.2.4.1. 子音クラスターにおける制限

東サハリン方言の子音クラスターには、特に語頭において、強い制限が見られる。語頭・語中・形態素末の子音クラスターに見られる制約は次のようにまとめられる。

(39) 子音クラスターにおける制約

語頭 (/C1C2-/)	語中 (/C1C2C3-/)	形態素末 (/C1C2C3/)
・C1 に有声破裂音が来ることはない。	・有気破裂音が現れることはない。(例外 /cʰ/)	・有気破裂音が現れることはない。(例外 /cʰ/)
・C1 に口蓋垂音が現れるのは稀である。	・無声摩擦音が現れるのは稀である。	・/h/ が現れることはない。
・C1 に摩擦音が現れるのは非常に稀である。	・3つの子音が連続して現れるのは、/-Frʰk-/ タイプのみである。	
・C2 に破裂音が来ることはない。	・/h/ が現れることはない。	
・/h/ が現れることはない。		
・/j, w/ が現れることはない。		

2.3.2.4.2. 軟口蓋音・口蓋垂音と母音の分布

軟口蓋音 /k^h, k, x, ɣ/ と口蓋垂音 /q^h, q, ɣ, ʁ/ は、非常に偏った分布を示す。筆者の収集した語彙でこれらの音と母音の現れ方を調べてみると、次のような分布を示している。

(40) 軟口蓋／口蓋垂音と母音の現れ方

	/i/	/ə/	/u/	/e/	/a/	/o/	合計
/k ^h , k/	14	18	15	10	8	2	67
/x, ɣ/	14	14	9	2	0	0	39
/q ^h , q/	4	0	0	0	26	21	51
/ɣ, ʁ/	0	0	0	0	23	17	40
合計	32	32	24	12	57	40	197

軟口蓋音 /k^h, k, x, ɣ/ は、狭母音の /i, ə, u/ の前に現れることが多く、反対に口蓋垂音 /q^h, q, ɣ, ʁ/ の場合は、そのほとんどが非狭母音の /a, o/ の前に現れていることが分かる⁹。一般的ではない組み合わせの例を以下に示す¹⁰。

(41) p^haskam- 「学ぶ」

anko 「どこ」

ar^hqi 「キュウリウオ」

nevr^hqi 「まつ毛」

ɲar^hqi 「蚤 (のみ)」

⁹ Shiraishi (2010: 32) によると、西サハリン方言におけるこれらの軟口蓋音と口蓋垂音は、ほとんど異音関係の分布を示すという。

¹⁰ Austerlitz (1956: 262) は、軟口蓋を調音点に持つ破裂音と摩擦音の後に /a, o/ が続く例は特別な儀式に用いられる語や借用語に見られると述べている。

2.3.3. 母音調和の痕跡

Krejnovič (1979: 297) は、ニヴフ語はもはや母音調和を消失しているが、その痕跡として狭母音の /i, ə, u/ と広母音の /e, a, o/ の対立が見られるとしている。アウステルリッツ (1990: 179) は、ニヴフ語には舌の高低による母音調和が存在すると述べている。

東サハリン方言の 2 音節語における母音の現れ方を調べてみると、その分布に偏りがあることがわかる。

(42) 東サハリン方言の 2 音節語における母音の現れ方

V1 \ V2	/i/	/ə/	/u/	/e/	/a/	/o/	合計
/i/	7	3	1	0	2	1	15
/ə/	8	9	4	0	1	1	23
/u/	6	2	13	0	3	0	24
/e/	2	1	0	3	4	0	9
/a/	6	0	9	0	25	4	44
/o/	3	1	3	0	6	8	21
合計	32	16	30	3	41	14	136

この結果を見る限り、V1 が狭母音 /i, ə, u/ である場合は V2 にも狭母音が現れ、V1 に広母音 /e, a, o/ が来る場合は V2 にも広母音が現れるという傾向が観察される。さらに、/e/—/e/ の組み合わせを除き、V2 に V1 と同じ母音が来る語が一番多いことが見て取れる (太字の部分)。

他の方言と同じく、東サハリン方言においても、母音調和の痕跡とみなし得る現象が観察される。例えば、単数の代名詞接語は、ホストの母音によって交替することがある。以下は 3 人称単数代名詞の接語の例である (3.2.1. 節を参照)。

- (43) *i=y*lu- 「恐れる」
*i=r*lə- 「引く、引っ張る」
*e=y*ro- 「掛ける」
*e=z*mu- 「好む、喜ぶ、愛する」

これらの例からかつてのニヴフ語には、いわゆる逆行的な母音調和があったと推定されている。ただし、現在のニヴフ語に生産的な音韻プロセスとしての母音調和は存在しない。

2.3.4. 側面音

Shiraishi (2010: 34) は、西サハリン方言において、/l/ は [r] の異音を持つと述べている (rhotacism)。

(44) Shiraishi (2010: 35)

<i>k^hliz-</i>	[k ^h liz] ~ [k ^h riz]	「満腹する」
<i>elyala</i>	[elyala] ~ [eryala]	「たくさん」
<i>amla</i>	[amla] ~ [amra]	「味」

東サハリン方言においては、そのような例は見つかっていないが、ロシア語から借用された語に /l/ と /r/ でゆれる現象が見られる。

(45) *japrka* ~ *japlak* < яблоко (ロシア語) 「リンゴ」

2.3.5. 接近音

接近音には /w/ と /j/ があり、語のあらゆる位置に立ち得る。語頭の位置においては、アムール方言では /w/ と /v/ が合流してしまい、音韻的な対立はなくなっているのに対し、東サハリン方言では /w/ と /v/ の区別が残っていることは先行研究で述べられているとおりである (Krejnovič 1937、Panfilov 1962 など)。

しかしながら、本稿の東サハリン方言に関する調査では、語頭の位置では /w/ と /v/ のあいだでゆれが観察され、語頭以外の位置では、アムール方言と同じく、対立をなしている。

(46) <i>waj</i> ~ <i>vaj</i>	「鍋」
<i>wax</i> ~ <i>vax</i>	「刃」
<i>q^hawt</i>	「乾く、枯れる」 vs. <i>q^havt</i> 「熱い、暑い」

2.4. 音交替

2.4.1. 有声化

有声化は、無声摩擦音を語末に持つ語の後に有声音で始まる語が続く場合 (例 47) と鼻音で終わる語の後に無気破裂音で始まる語が来る場合 (例 48) に起こる¹¹。

(47) 語末の無声摩擦音の有声化

<i>c^has</i>	「時間」	+	<i>=ux</i>	LOC	[c ^h azux]	「時間に」
<i>taf</i>	「家」	+	<i>mi</i>	「中」	[tavmi]	「家の中」
<i>taf=toχ</i>	「家へ」	+	<i>vi-</i>	「行く」	[taftoχvi-]	「家へ行く」 (=toχ ~ =roχ DAT)
<i>coŋr^h</i>	「頭」	+	<i>ŋamx</i>	「毛」	[coŋrŋamx]	「髪の毛」
<i>hus</i>	「そこ」	+	<i>laf-</i>	「落ち着く」	[huzlaf-]	「そこへ落ち着く」 (丹菊 2008: 20)

(48) 鼻音の後の有声化

<i>in</i>	3PL	+	<i>taf</i>	「家」	[indaf]	「彼らの家」
<i>nenŋ</i>	「一人」	+	<i>pər^hk</i>	「自分、～だけ」	[nenŋbər ^h k]	「一人だけ」
<i>huŋ</i>	「その」	+	<i>taf</i>	「家」	[huŋdaf]	「その家」

場合によっては、鼻音以外の後でも無気破裂音の有声化が見られるが、この現象には語末の鼻音が落ちるといった通時的な音変化が関与している。アムール方言では見られない一部の形態素末の鼻音が東サハリン方言では保持されていることがある。

(49) アムール方言 東サハリン方言

<i>qan</i>	<i>qanŋ</i>	「犬」
<i>mur</i>	<i>murŋ</i>	「馬」
<i>ŋir</i>	<i>ŋirŋ</i>	「食器、皿」
=ku ~ =yu	=kun ~ =yun	PL
—	-ŋ	PTCP

¹¹ これらの現象は、Krejnovič (1937) や Shiraishi (2010) でも指摘されている。

ほとんどの先行研究においては、語末の鼻音が落ちるという現象は、アムール方言で見られるものであるとされている。しかしながら、東サハリン方言を調べてみると、語末に鼻音を持つ一部の名詞や接語、接尾辞において、鼻音が保持されている形と脱落している形の両方が見られる。

(50) 鼻音が脱落した形		鼻音を保持している形	
<i>qan=kun</i>	<	<i>qanŋ</i> ¹²	「犬たち」
<i>ŋafq=yu=toχ</i>	<	<i>ŋafq=yun=toχ</i>	「友人たちへ」 (=kun ~ =yun PL, =toχ ~ =roχ DAT)
<i>hu taf</i>	<	<i>hu-ŋ taf</i>	「その家」 (-ŋ PTCP)
<i>pila r^haŋq</i>	<	<i>pila-ŋ r^haŋq</i>	「大人の女性 (lit. 大きい女性)」

鼻音が脱落している場合は、表面上では発音されることはないが、後続の無気破裂音の有声化と頭子音交替を引き起こす (2.4.5. 節を参照)。

(51) <i>hu taf</i>	[hu ^N daf] ¹³	「その家」
<i>iv taf</i>	[iv ^N daf]	「住む／住んだ家」
<i>ŋafq=yu=toχ</i>	[ŋaφqxu ^N doχ]	「友人たちへ」

同様の現象はアムール方言でも見られる。

(52) Shiraishi (2010: 91; 表記は一部変更した)		
<i>eya pəŋx</i>	[eya ^N bjŋx]	「牛肉のスープ」
<i>pityə təw-</i>	[pityi ^N diw-]	「本を (読むことを) 学ぶ」

Shiraishi (2010: 91-92) によれば、比較的若い世代の話者では、脱落した鼻音による有声化などの音韻プロセスは起きない傾向があるという。

¹² 単独で用いられる場合を除くと、常に *qan* という形で現れる。

¹³ 以下、Shiraishi (2010) に倣い、鼻音が脱落している個所を必要に応じて ^N で示す。

2.4.2. 母音の挿入

語頭においては、原則として最大で2子音の連続しか起こらない (2.3.2. 節を参照)。子音クラスターを持つ語頭に所有者もしくは目的語を表す接語が前接される場合は、3子音連続を避けるために母音が挿入される (太字の母音)。

- (53) $p^h=raf$ 「自分の家」 $p^hi=r^hlagi$ 「自分のトナカイ」 < $p^h=$ REFL
 $n=nan\chi$ 「自分の姉」 $ni=ndə-$ 「私を見る」 < $n=$ 1SG

しかしながら、後続の語頭に子音クラスターがないにもかかわらず、母音が挿入されている例も見受けられる。なお、接語がホストに付加されるときにみられる挿入母音もホストの母音によって変わることがある (2.3.3. 節を参照)。

- (54) $p^hi=nə=yun$ < $p^h=$ REFL 「自分の (複数の) 物」
 $p^he=vo=ux$ 「自分の村で」

上記の例はそれぞれ、形式名詞 $nə$ ¹⁴「もの、こと」と名詞 vo 「村」に接語の $p^h=$ が付いている例である。Shiraishi (2010: 46-47) によれば、西サハリン方言においても、一部の接語-ホストの連続で、ホストが子音クラスターで始まっていないところに母音が挿入される例があると述べている。

- (55) Shiraishi (2010: 46; 表記を一部変更)

$p^hi=na\chi$ 「自分のベッド」
 $p^hi=saqo$ 「自分のナイフ」

Shiraishi (2010) は、問題の母音にはアクセントを置けないことや無声化することが多い点から代名詞ではなく挿入母音であるとしている。さらに、親族名称や身体部位、文化的に

¹⁴ 先行研究では、この形式を接尾辞として扱っているが (Panfilov 1962, Krejnovič 1979, Savel'va and Taksami 1970, Mattissen 2003 など)、本稿では指示語の修飾を受けられることや複数標識が付き得る点から形式名詞とみなす ($hu nə=yun$ 「その (複数の) こと/もの」)。

重要なアイテム（「犬」「家」など）にはこのような現象が見られないことから、譲渡可能／不可能所有との関連性を指摘している。

一方、上記であげた東サハリン方言の例 ($p^hi=nə=yun$ 「自分の（複数の）もの」) の場合は、「強制的に移住させられて自分の物すべてを前の居住地においてきた」という文脈で現れた例であり、 $nə$ は譲渡可能なものを指していると解釈できる。さらに、この例では p^hi の母音にアクセントが落ちている。

2.4.3. 語末無気破裂音の内破音化

語末の無気破裂音の後に、破裂音もしくは鼻音が続く場合は破裂が聞こえず、内破音化する現象がみられる（内破音化が起きている語を下線で示す）。

(56) [tuk`toχ p^hiγt]
tuk=toχ p^hrə-ku-t
 here=DAT come-CAUS-IND
 「ここへ来させた」

(57) [k^heq`ŋanyira]
k^heq ŋanyə-ra
 fox look.for-CVB.3SG
 「狐を探したり、」

(58) [p^hiγkɪŋk`niγ]
 pə^hk iŋ-k nə-r
 oneself eat-NMLZ make-CVB.3SG
 「自分が食べるものを作るために」

(59) [ɲincik luxtut`p^hiniyuncik huʃit luxtut]
 ɲin sik luxtu-t p^hi=nə=yun sik huci-t luxtu-t
 we.EXCL all move-CVB.1PL oneself=thing=PL all put-CVB.1PL move-CVB.1PL
 「私たちみんな引っ越して、自分たちのもの全部おいて引っ越して」

上記の例はすべて、内破音化が起こっている語境界に休止が置かれることなく、一続きで発話されている例である。稀ではあるが、言い淀みなどであいだに休止が置かれる場合にも、内破音化が起こることがある。

(60) [ekʰ... milkβoux pantɾ]

ek Milk vo=ux pant-r
 there Milk town=LOC born-CVB.3SG
 「あそこ…Milk 村で生まれて」

2.4.4. /h/ の脱落

/h/ は語頭にのみ現れるが、落ちることがある。さらに、/h/ の脱落によって、前の母音が聴覚的に長く聞こえることがある (例 63)。

(61) [nitʰadyu^Nda]

ni-t ha-t=yun=ta
 eat-CVB.2PL do.so-IND=PL=FOC
 「肉だけを食べているのだ」

(62) [luŋerqŋux]

Luŋ her^hqŋ=ux
 Luŋ side=LOC
 「ルン (地名) の方から」

(63) [orbotra:k]

orpot-ra ha-k
 work-CVB.3SG do.so-NMLZ
 「仕事したりしたそのような人だ」

ただし、語頭の /h/ が常に落ちるわけではなく、文頭や休止の後では落ちない。

(64) 丹菊・パクリナ (2008: 20)

lavŋ *vo* *her^hqŋ=ux*

continental.resident village side=LOC

「大陸の住民の村の方から」

2.4.5. 頭子音交替

頭子音交替には、後続する形態素の頭子音が破裂音から摩擦音に変わる摩擦音化と摩擦音から破裂音に変わる破裂音化の2つのプロセスがある。以下では、頭子音交替が起こる際の形態統語的な環境と交替規則について記述する。

2.4.5.1. 音韻的な環境

2.4.5.1.1. 摩擦音化

摩擦音化は母音、接近音、破裂音、側面音の後に破裂音の頭子音を持つ形態素が続くときに起こる。有気破裂音は対応する無声摩擦音に、無気破裂音は対応する有声摩擦音に交替する。

(65) *t^hlanjɪ rur^h* 「トナカイの肉」 < *tur^h* 「肉」

ja=kanŋ 「彼の犬」 < *qanŋ* 「犬」

r^hə vər^hk 「ドアだけ」 < *pər^hk* 「～だけ」

qoj sɣar^h 「カラマツ」 < *c^hɣar^h* 「木」(丹菊 2014: 187)

ciw vil- 「音が大きくなる」 < *pil-* 「大きい／大きくなる」

(丹菊・パクリナ 2008: 41)

ŋafq ɣa 「友達の名前」 < *q^ha* 「名前」

ir^hkt fe- 「ベリーを摘む」 < *p^he-* 「摘む」(丹菊・パクリナ 2008: 27)

p^h=xazm 「自分の罾」 < *k^hazm* 「罾」

pal fi- 「山に住む」 < *p^hi-* 「住む」(丹菊 2014: 8)

ŋamk xlas 「7 クラス」 < *k^hlas¹⁵* 「クラス」

¹⁵ ロシア語からの借用語である (класс)。

ただし、鼻音が脱落したことによって、母音で終わっている場合 (2.4.1. 節を参照) は、摩擦音化が起こらないこともある。

- (66) *hu kʰazm* [hu^Nkʰazm] 「その罨」 < *kʰazm* 「罨」 (丹菊・パクリナ 2008: 35)
ɲafq=ɣu=toχ [ɲafqxu^Ndoχ] 「新しい家」 < =*toχ* ~ =*roχ* DAT

摩擦音の後に破裂音が続く場合、普通は摩擦音化が起こることはないが、非常に稀に摩擦音化が起こっている例が見られる。

- (67) *hoŋɛ raf* 「空っぽの家」 < *taf* 「家」 (丹菊・パクリナ 2008: 13)
ɲax raf 「6軒の家」 < *taf* 「家」 (丹菊・パクリナ 2008: 38)

頭子音交替が起こる環境であっても、あいだに休止が置かれる場合は摩擦音化が起こることはない。

- (68) *pal tʰxə* 「山の上」 < *tʰxə* 「上」 (丹菊 2014: 18)

鼻音の脱落により、形態素境界で側面音と破裂音が続けて現れることもある。

- (69) *pʰ=ɛɪl=toχ* [pʰɛɪl^Ndoχ] 「自分の子供に」
 REFL=child=DAT
qʰal=kun [qʰal^Ngun] 「親戚」
 clan=PL

2.4.5.1.2. 破裂音化

摩擦音の後と鼻音の後に摩擦音の頭子音を持つ形態素が続く場合、後続の摩擦音は対応する破裂音に変わる。

(70) <i>q^has ca-</i>	「太鼓を叩く」	<	<i>za-</i>	「叩く」(丹菊・パクリナ 2008: 41)
<i>coŋχ q^haw-</i>	「チヨニハと呼ぶ」	<	<i>χaw-</i>	「~と呼ぶ」(丹菊・パクリナ 2008: 23)
<i>k^her^h p^hur-</i>	「話をする」	<	<i>fur-</i>	「言う」(丹菊・パクリナ 2008: 37)
<i>c^huy-suy-</i>	「飛び出す」	<	重複形	(丹菊 2014: 24)
<i>c^hχəf k^hu-</i>	「熊を殺す」	<	<i>xu-</i>	「殺す」
<i>eβŋ k^hu-</i>	「子供を殺す」	<	<i>xu-</i>	「殺す」
<i>vaŋ cu-</i>	「鍋を洗う」	<	<i>zu-</i>	「洗う」(丹菊・パクリナ 2008: 25)
<i>min t^hu-</i>	「私たちを追う」	<	<i>r^hu-</i>	「追う」(丹菊・パクリナ 2008: 14)

稀ではあるが、鼻音の後に続く破裂音が摩擦音で実現する例や破裂音化が適用されない例も見られる。

(71) 丹菊・パクリナ (2008, 2014)

摩擦音で実現される例

<i>min xeq</i>	「私たちのキツネ」	<	<i>k^heq</i>	「キツネ」
<i>in χas</i>	「彼らの太鼓」	<	<i>q^has</i>	「太鼓」
<i>raŋ raf</i>	「産屋」	<	<i>taf</i>	「家」

破裂音化しない例

<i>mam ye-</i>	「妻を得る」	<	<i>ye-</i>	「とる、買う」
<i>lavŋ vo</i>	「大陸住民の村」	<	<i>vo</i>	「村」

2.4.5.2. 形態統語的な条件

頭子音交替は、前述した音韻環境であっても常に起こるわけではない。以下に頭子音交替が起こる／起きない形態統語的な条件を示す。

(i) 接辞添加

原則として、接尾辞添加によりその接尾辞に頭子音交替が起こることはない。以下に使役接辞と副動詞接辞の例を示す。

(72) 使役接辞 *-ku*¹⁶

<i>pʰrə-ku-</i>	[pʰɾigu]	「来させる」
<i>orbot-ku-</i>	[orbotku]	「働かせる」
<i>pʰi-ku-</i>	[pʰigu]	「住ませる」
<i>kəŋ-ku-</i>	[kiŋgu]	「凍らせる」 (Sangi 2012: 10)

(73) 先行副動詞 *-tot*

<i>val~val-tot</i>	「切り落としてから」 (丹菊・パクリナ 2008: 39)
<i>kiy-tot</i>	「縛ってから」 (丹菊・パクリナ 2008: 43)
<i>aj-tot</i>	「作ってから」
<i>χa-tot</i>	「撃ってから」
<i>orpot-tot</i>	「働いてから」

使役接辞の頭子音が無気破裂音と有声破裂音で現れるのは、脱落した鼻音が引き起こす有声化によるものである (2.4.1. 節を参照)。

かつてのニヴフ語では、動詞語幹と一部の動詞接辞のあいだに鼻音 (/ŋ/, /n/) が現れることがあったが、現在では落ちてしまっている (Jakobson 1971, Mattissen 2003 など)。東サハリン方言においては、稀ではあるが動詞語幹と接尾辞のあいだに鼻音が現れることがある。

(74) <i>ha-ŋ-ku-r</i>	[haŋguɾ]	(< <i>-ku</i> CAUS)	「それで、そうやって」
<i>qaxjo-ŋ-ku-r</i>	[qaxjoŋguɾ]		「泣いていて」 (丹菊・パクリナ 2014: 36)
<i>vi-ŋ-k</i>	[viŋk]	(< <i>-k</i> NMLZ)	「旅人」
<i>-t ~ -nt</i>	[t ~ d ~ nd]		IND

(ii) 接語の添加

前接語または後接語がホストに付加されるときには、後続の形態素で頭子音交替が起こる。以下にそれぞれの例をあげる。

¹⁶ ただし、/k/ は [k, g, γ, x] の異音を持つ。Sangi (2012) では、使役接尾辞の表記に一貫して軟口蓋破裂音を表す文字を用いている。

(75) 格 (DAT) =roχ

<i>i=roχ</i>	「川に」
<i>əmk=roχ</i>	「母に」
<i>intənat=roχ</i>	「寄宿学校に」 (< ロシア語)
<i>ŋafq=yun=toχ [doχ]</i>	「友人たちに」
<i>t^hulf=toχ</i>	「冬に」

(76) 再帰 (REFL) *p^h=*

<i>p^h=xazm</i>	< <i>k^hazm</i>	「自分の罌」
<i>p^h=raf [p^hraf]¹⁷</i>	< <i>taf</i>	「自分の家」
<i>p^hi=r^hlanj¹⁸</i>	< <i>t^hlanj</i>	「自分のお金」
<i>p^h=kan [p^hkan]</i>	< <i>qanŋ</i>	「自分の犬」

(iii) 重複

重複による語形成の際にも、後部要素の頭子音が交替することがあるが、一般的な交替規則から外れる例が見受けられる。

(77) <i>qal~bal-</i>	「きれいである、明るい」
<i>pulk~vulk-</i>	「丸い、転がる」
<i>tuk~ruk-</i>	「吐き気がする」
<i>fes~pez-</i>	「こする、拭く」 (/f/ が /p/ に交替) ¹⁹
<i>ray~rayu-</i>	「嫌う」 (交替せず)

¹⁷ 有気破裂音は後続する形態素の頭子音の無声化を引き起こすことがある (*p^h=vo [p^hfo]* 「自分の村」)。

¹⁸ 音素配列の制約から母音が挿入されている。

¹⁹ 交替規則に従うと、/p^h/ に変わるはずであるが、語中に有気破裂音が来ることはないという音素配列の制約が働いていることが考えられる。

(iv) 統語的な条件

頭子音交替は原則として従属部と主要部のあいだでのみ起こる。すなわち、主語と目的語、主語と述語のあいだで頭子音交替が起こることは、普通はない。頭子音交替が起こる統語的な環境²⁰は次のとおりである。

(78) [[名詞]_{NP} + [名詞]_{NP}]_{NP} : 所有構造

p^h=əmk *raf=toχ* (< *taf*)

REFL=mother house=DAT

「自分の母の家へ」

(79) [[動詞]_{VP} + [名詞]_{NP}]_{NP} : 連体修飾構造

c^h=vil-a *ramk* (< *tamk*)

2SG=big-PERM hand

「あなたの大きい手」

(80) [[名詞]_{NP} + [動詞]_{VP}]_{VP} : 「目的語 + 他動詞」構造

vəŋ cu-tot (< *zu-*) (丹菊・パクリナ 2008: 25)

pot wash-CVB.3PL

「鍋を洗ってから」

少数ではあるが、主語と述語のあいだで頭子音交替が起こることがある。

(81) *pil-* 「大きい、大きくなる」 *aw vil-* 「声が大きくなる」

kəl- 「長い、長くなる」 *aw yəl-* 「声が長くなる」

tamk yəl- 「手が長い」

pil- 「大きい、大きくなる」 *ciw vil-* 「音が大きくなる」

²⁰ 先行研究では、頭子音交替が起こり得る統語的な構造体に関して ‘dependent-head constellation’ (Mattissen 2003), ‘syntactic section’ (Jakobson 1971), ‘syntactic complex’ (Nedjalkov and Otaina 2013) など、様々な用語を用いている。

上記の例は、主語と述語の関係にありながら頭子音交替が起こっている。これらの例は主語と述語のあいだに休止が置かれることなく発音されている。

副詞が頭子音交替のプロセスに関与することはない。すなわち、それ自体の頭子音が変わることもなければ、続く語の頭子音交替を引き起こすこともない。

2.5. 強勢

Gruzdeva (1998: 12) によれば、ニヴフ語ではどの音節にも強勢が落ちることがあるが、第1音節に落ちる傾向がある。さらに、Krejnovič (1979: 298-299) は、複合語においてはその内部構造によって違うパターンを示すと述べており、サハリン方言においては2つ以上の名詞語幹からできている複合語の場合は、最後の語幹に強勢が落ち、名詞+動詞の複合語の場合は名詞語幹に強勢が落ちるといふ。

筆者の調査によると、東サハリン方言においては、原則として第一音節に強勢が落ちる。

(82) Krejnovič (1979: 298-299)	筆者の調査結果
<i>amámnt</i> 「歩く」	<i>ámamt</i>
<i>vuk~vukúnt</i> 「暗い」	<i>vúk~vukt</i>
<i>teŋi</i> 「カラフトマス」	<i>téŋi</i>
<i>raúnt</i> 「教える」	<i>ráwut</i>
<i>mitr#cóŋqr</i> 「トンボ」	<i>mít#coŋr^h</i> (「名詞+名詞」複合語)

(83) 複合語の強勢

名詞+名詞	<i>t^húyr#mu</i>	「汽船」
	<i>r^háŋq#eblŋ</i>	「女の子」
動詞+名詞	<i>púj#mu</i>	「飛行機」
	<i>púj#ŋa</i>	「鳥」
名詞+動詞	<i>ŋá#ŋanyə-</i>	「狩りをする」
	<i>c^hó#ŋanyə-</i>	「漁をする」

以上第2章では、ニヴフ語東サハリン方言の音韻論に関して、他の諸方言で記述のある問題の東サハリン方言での状況を調査、確認するとともにこの方言独自のいくつかの特徴を分析し記述を行った。

第3章 形態論

本章 形態論では、品詞別に名詞、代名詞、動詞、副詞の順で検討していく。最後にこの言語においてやや特殊な性質を示す数量詞を扱う²¹。

3.1. 名詞

3.1.1. 複数標示

名詞における数の標示は、義務的なものではない。複数を表すためには、接語の =*kun* ~ =*ɣun* (頭子音交替による異形態) を付加する方法と名詞語幹を重複する方法が用いられる。さらに、義務的ではないが、同じ接語が直説法の定形動詞 (-*t* ~ -*nt*) の後に付加され、主語が複数であることを表すこともある²²。

Panfilov (1962: 92) の記述によると、主語が複数の指示対象を指している文において、主語と述語の両方に複数標識が付加される場合 (主語=PL-述語=PL)、主語と述語の両方に複数標識されない場合 (主語-述語)、主語にのみ標識される場合 (主語=PL-述語)、述語にのみ標識される場合 (主語-述語=PL) の4つのパターンがあり得る²³。

南サハリン方言 (ポロナイスク方言) に関して述べている高橋 (1942) には、以下のよう
な記述がある。

動詞の複数を表すには、名詞の複数を作る時と同様に、不定法の形に -*kun*、-*ɣun* をつける。しかし意味さへ通じればなるべく省略するのが普通である。だから、主格と述語とは数の上では必ずしも相應せず、時には、主格は単数でも目的格が複数なるが爲に述語を複数にする事さへある。

高橋 (1942: 49)

²¹ 複数接語と格接語を名詞形態論で扱うのは問題があるが、便宜上ここで一緒に記述することにした。

²² 金子 (2010: 46) は「全体が一緒に行動しているときには複数表示になることが多いようにみえる」と記している。

²³ 丹菊 (2012: 115) は、東サハリン方言の複数標識について「名詞 (可算名詞) が複数の場合は義務的に付加される。動詞の場合はオプションである」と述べており、加算名詞の複数標示は義務的であるとしている。

以下では、東サハリン方言における複数標識 =*kun* ~ =*yun* の形態統語的な特徴を示す。
まず、=*kun* ~ =*yun* が付加され得るのは名詞、動詞、代名詞である。

3.1.1.1. 名詞／代名詞に後接する場合

=*kun* ~ =*yun* は有情物名詞と無情物名詞の両方に付加され得るが、有情物名詞に付く例が圧倒的に多い。無情物名詞には *haps* 「ハプス草」、*həy^h* 「樹皮製容器」、*k^hazm* 「カズム罌」、*ŋacx* 「脚」、*c^hχa* 「お金」のようなモノを表す名詞のほか、*q^hal* 「氏族」、*q^ha* 「名前」のようなモノ名詞以外の例も見られる。以下にそれぞれの例をあげておく。

(84) 丹菊・パクリナ (2008: 13)

haps=kun *ɨŋ-inə-t* *vi-t=yun*
haps=PL *eat-INT-CVB.3PL* *go-IND=PL*
「ハプス草をとって食べるために行った」

(85) 丹菊・パクリナ (2008: 31)

hu *k^hazm=yun* *xici-r*
that *trap=PL* *pull.out-CVB.3SG*
「そのカズム罌を引っ張って」

(86) *hu* *c^hχa=yun=yir* *p^he=rχ* *ki* *ye-ta* *lar^hq* *ye-ta*

that *money=PL=INS* *REFL=DAT* *shoes* *take-CVB.1SG* *dress* *take-CVB.1SG*
「(私は仕事をしてからもらった) そのお金で自分の靴を買って、服を買った」

さらに、複数が標示されている名詞のうち約 6 割は文の主語であり、無情物名詞の主語に付加されている例は稀である。

(87) *in* *ŋacx=kun* *kəl-ta* *ut* *paq-ta* *ha-t=yun=furu*

they *leg=PL* *long-CVB.3PL* *body* *short-CVB.3PL* *be.so-IND=PL=HS*
「彼らは脚が長く、体が短かったそうだ」

Panfilov (1976: 22) は斜格名詞句の場合は、複数の指示対象を指しているにもかかわらず、主語の名詞句より複数が表示されないことが多いと述べている。このことは、主語には有情物名詞が来ることが多く、さらに複数標識が無情物名詞より有情物名詞に付くことが多いということに起因するものと考えられる。また、Panfilov (1962: 113) には、いわゆる近似複数の意味を表している例が提示されている。

(88) Panfilov (1962: 113)

Xevgun=gu narxo-t vi-inə-dʲ
Xevgun=PL set.a.trap-CVB.3PL go-INT-IND
 「ヘヴグンたちは、罾を仕掛けるために行く」

上の例で *Xevgun=gu* は、「ヘヴグンと呼ばれる複数の人」ではなく、「ヘヴグンとその仲間たち」という意味を表す。Nedjalkov and Otaina (2013: 50) は、アムール方言において、人の名前や親族名称の複数形は近似複数の意味を表すとしている。次に示す例のように東サハリン方言においても親族名称に付加された場合は近似複数の意味に解釈される。

(89) *atk=yun=ax tuk=tox pʰrə-ku-t*
father=PL=CAUSEE here=DAT come-CAUS-IND
 「お父さんたちをここへ来させた」

上記の例において、*atk=yun* 「お父さんたち」は「お父さんとその仲間たち」という意味を表す。次に、目的語に付加された複数標識が主語の複数性または配分的な複数性を表していると考えられる例が見受けられる。

(90) 丹菊・パクリナ (2008: 24)

hut=yun pʰ=χa=yun fur≠qavr-t
that=PL REFL=name=PL say≠not-IND
 「彼らは自分の名前を言わなかった」

上記の文の主語を単数主語に変えると、目的語に複数を標示することはできなくなる²⁴。

- (91) **jaŋ* *p^h=χa=yun* *fuɾ≠qavr-t*
s/he REFL=name=PL tell≠not-IND
「彼は自分の名前を言わなかった」

また、*hut*「それ」、*tus*「ここ」などの指示代名詞と *nut*「何」、*thas*「どこ」などの疑問代名詞にも複数が標示され得る。

- (92) 丹菊・パクリナ (2008: 33)
hut=yun *t^hunyu-r^h* *ij-t*
that=PL pick.up-CVB.3SG eat-IND
「それらをとって食べた」

- (93) 丹菊・パクリナ (2008: 33)
nut=yun *ye-n* *ij-i-t?*
what=PL take-CVB.1SG eat-FUT-IND
「何をとって食べる？」

3. 1. 1. 2. 動詞に後接する場合

=*kun*~=*yun* が動詞に付加される際には、非定形動詞に付加されることはなく、専ら直説法の定形動詞にのみ付加される。さらに、そのほとんどが動作動詞に付加されており、状態動詞に付加されるのは非常に稀である。以下は状態動詞 *kal-*「長い/長くなる²⁵」に複数が標示されている例である。

²⁴ 類似の現象は近隣の朝鮮語にも見られる。

²⁵ 服部 (1944: 53) は、本稿で状態動詞と呼んでいるものについて「一般に形容詞と稱せられて居る品詞はギリヤーク語 (ニヴフ語; 筆者注) では同時に動詞でもある」と述べ、「大きい」「暖かい」「老いた」「強い」などの語は同時にそれぞれ「大きくなる」「暖かくなる」「老いる」「強くなる」という意味を持つと指摘している。

(94) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

p^hakefake *aw* *ɣəl-t=yun*
more.and.more voice long-IND=PL

「(シャーマンたちの) 声がだんだん長くなった」

上記の例に見るように、状態動詞が「～くなる」という変化の意味を表す場合は、複数が標示され得る。直説法の定形動詞に付いている例はすべて、主語の複数性を表しており、高橋 (1942) で指摘されているような、目的語の複数性を表していると思しき例は見られない。

以上、複数接語に関しては、近似複数の意味が確認できること、目的語につく複数接語が主語の複数性を示すこと、変化の意味で用いられる状態動詞にも付加され得ることについて述べた。

3.1.2. 格標示

東サハリン方言の格には、以下の6つがある。

(95) ニヅフ語東サハリン方言の格

格	形式
具格 (INS)	= <i>kir</i> ~ = <i>ɣir</i>
比較格 (COMP)	= <i>ak</i>
被使役者格 (CAUSEE)	= <i>aɣ</i>
場所格 (LOC)	= <i>ux</i>
与格 (DAT)	= <i>toɣ</i> ~ = <i>roɣ</i> ~ = <i>rɣ</i>
到達格 (TERM)	= <i>toɔo</i> ~ = <i>roɔo</i>

ニヅフ語は格標示の観点からすると、いわゆる中立型の格標示体系を持つ。主格、対格、属格の形式上の区別はなく、これらの統語関係は主要部の規則的な頭子音交替によって示される (2.4.5. 節を参照)。頭子音交替の観点からすると、主格対格型の言語とみられることもできる。無標の名詞句は、まず主語、他動詞の目的語、複他動詞の間接目的語に用いられる。

(96) *exlŋ k^havi r^hxə=ux ler-t.* [修飾語]

child snow on=LOC play-IND

「子供が雪の上で遊んでいる」

(97) *əmk p^h=exlŋ smo-t.* [主語と他動詞の目的語]

mother REFL=child like-IND

「母は子供を愛している」

(98) *əmk karantas p^h=exlŋ k^him-t.* [複他動詞の間接目的語]

mother pencil REFL=child give-IND

「母は子供に鉛筆をあげた」

無標の名詞句は [修飾名詞+被修飾名詞]_{NP} 構造における修飾名詞にも用いられる (*Ivan vityŋ* 「イヴァンの本」)。ニヴフ語にはコピュラがなく「AはBだ」の構文は、名詞を並べるだけで表され、無標の名詞句は述語として機能する。コピュラ文の否定の場合は動詞 *ha-* 「そうである、そうする」の否定で表される。

(99) *tut pityŋ ha≠qavr-t.*

this book do.so≠not-INT

「これは本ではない」

動詞 *mu-* 「なる」は、変化前と変化後の対象を表す2つの名詞句を取るが、変化後の対象も無標の名詞句で表される。

(100) *ŋ=asq toxtor mu-t.*

1SG=younger.brother doctor become-IND

「私の弟は医者になった」

風間 (2003: 269) によれば、トルコ語、モンゴル語、ナーナイ語では、変化後の対象は「他動詞、もしくは、他動詞化しても、やはり無語尾の名詞をとる」というが、ニヴフ語でも同様のことが言える。

- (101) *jaŋ p^h=eɤŋ=aχ toχtor mu-ku-t.*
 s/he REFL=child=CAUSEE doctor become-CAUS-IND
 「彼は子供を医者にした」

3.1.2.1. 具格 =*kir* ~ =*yir*

Panfilov (1962: 146) によれば、具格は *iyr-~k^hir-~xir-*「使う」という動詞に由来するものであり、アムール方言では *-kit~ -yit~ -git~ -xit* の形式も見つかっているが、それは副動詞接尾辞 *-r/-t* の痕跡であるとしている²⁶。東サハリン方言においても、=*kit* ~ =*yit* の形式が見られる。

具格は、主に道具／手段、材料、行為の対象を表す。

- (102) *orpot-tot hu c^hαa=yun=yir p^he=rχ ki ye-ta*
 work-CVB.1SG that money=PL=INS self=DAT shoes buy-CVB.1SG
 「仕事してから、そのお金で自分に靴を買って…」

- (103) *jaŋ c^hαar^h=kir c^hiɸc aj-t.*
 s/he tree=INS chair make-IND
 「彼は木で椅子を作った」

- (104) *paχ=kir paz-t.*
 stone=INS throw-IND
 「石を投げる」

さらに、具格は行為が向けられる場所的な意味を表すことがある。

²⁶ アムール方言においては、*-r/-t* 副動詞接尾辞は主語の人称によって使い分けがなされ、2・3 人称単数の場合は *-r* が、1 人称単数と全人称複数の場合は *-t* が用いられる (4.6.1. 節を参照)。

(105) 丹菊・パクリナ (2008: 39)

jan coxtə er^hqŋ=kir potə hətə xe-ta
s/he neck side=INS hole middle bore-CVB.3PL

「彼は魚の頭の方に (ひもを通す) 穴をあけて」

以下の例 (106) は、述語が表す行為の結果として現れたものを表しており、上記の例とは異なる意味を表す具格名詞句である。

(106) 丹菊・パクリナ (2008: 37)

eru-ku-t itə-ŋa loqr^h c^ho=yir eru-rə
vomit-CAUS-CVB.3PL see-CVB fresh fish=INS vomit-CVB.3SG

「(飼い主たちが犬を) 吐かせて見てみると、新鮮な魚を吐き出した」

Panfilov (1962: 145) によると、*-skir* は名詞化接尾辞 *-s* と具格に由来するもので、すべての方言に見られ、理由／原因を表すことがあるという。先行研究での指摘通り、東サハリン方言においても、*-r^hkir* という形式が確認できる。

(107) *hu pat ni maxtu-r^hkir orpot-f=toχ p^hrə-j-t=ra.*
that tomorrow I be.true-ADV LZ work-NMLZ=DAT come-FUT-IND=FOC

「明後日、私は必ず職場に来ます」

しかしながら、東サハリン方言では、理由／原因を表す用例は確認できていない。

3.1.2.2. 比較格 =ak

比較格は比較の対象を表す。

(108) *ni c^h=ak ut vil-t.*
I 2SG=COMP body big-IND

「私はあなたより体が (背が) 大きい」

比較格が *sik* 「全部、すべて」という名詞に付加された場合は、最上級の意味を表す。

- (109) *c^{hi} tu χotŋ=ux sik=ak ut vil-t.*
you.SG this town=LOC every=COMP body big-IND
「あなたはこの村で一番背が高い」

3. 1. 2. 3. 被使役者格 =aχ

使役接尾辞の *-ku* が用いられている使役構文の被使役者は、それが有情物である場合、被使役者格 =aχ を任意にとる。

- (110) *n=atk=aχ vi-n kolxoz=ux orpot-ku-jnə-ŋa*
1SG-father-CAUSEE go-CVB.3PL kolkhoz=LOC work-CAUS-INT-CVB
「(ロシア人たちが) 父を行かせてコルホーズで働かせようとしたとき」

使役接尾辞は、副動詞接尾辞 *-r/-t/-n*、*-ror/-tot/-non* とともに用いられて指示転換の機能を果たすことがある。このような場合、使役の意味は失われ、被使役者格の名詞句は従属節の主語として解釈される。

- (111) *ni c^h=aχ p^hrə-ku-t ezmu-t.*
I 2SG=CAUSEE come-CAUS-CVB.1SG rejoice-IND
「私はあなたが来てうれしかった」

- (112) *c^h=atk n=aχ ij-ku-ror p^hrə-t.*
2SG=father 1SG=CAUSEE eat-CAUS-CVB.3SG come-IND
「私が食べてからあなたの父が来た」

上記の例では、副動詞接尾辞の人称と数が主節の主語に一致しており、使役の意味は失われている。さらに、主節の動詞が *it* 「言う」で、従属節が間接引用副動詞の *-vu-r/-vu-t* をとっている場合も従属節の行為者項に被使役者格が現れることがある。

(113) 丹菊・パクリナ (2008: 35)

niv=kun=aχ ix-inə-j-vu-r it-ra
man=PL=CAUSEE kill-INT-E-REP-CVB.3SG say-CVB.3SG

「(タコは) 人間たちが殺そうとするだろうと言って」

上記の例において、主節と従属節とは異主語であり、従属節の動詞に使役の接尾辞は標示されていないが、副動詞の人称と数は主節の主語に一致する。主節と従属節とが同主語である場合は、被使役者格は現れない。

(114) 丹菊・パクリナ (2008: 22)

hut=yun=vər^hk ku-t iŋ-vu-t it-t
that=PL=only take-CVB.3PL eat-REP-CVB.3PL say-IND

「(彼らは) そんなものばかり獲って食べていると言った」

3.1.2.4. 場所格 =ux

場所格は、述語が表す行為が行われる場所、存在の場所、時点、経路、物事の出所を表す。以下に例を示す。

(115) *jaŋ tol=ux hermaf-t.*

s/he sea=LOC dive-IND

「彼は海で潜った」

(116) *k^huti=ux c^haχ juŋ-r c^har-ror tuŋvu-t.*

hole=LOC water enter-CVB.3SG full-CVB.3SG sink-IND

「穴から (船に) 水が入って、いっぱいになってから沈んだ」

(117) *jin χotoŋ=ux kinotiatr iv-t.*

we.EXCL town=LOC theater exist-IND

「私たちの町には映画館がありました」

(118) *jaŋ hu civ=ux vi-t.*
 s/he that load=LOC go-IND
 「彼はその道を通って行った」

(119) *ni c^h=ux karantas laŋar-t ye-t.*
 I 2SG=LOC pencil lend-CVB.1SG take-IND
 「私はあなたから鉛筆を借りた」

3. 1. 2. 5. 与格 =toχ ~ =roχ ~ =rχ

与格は行為や感情が向けられた物や人、受取人を表す。以下に例を示す。

(120) *mu tol vaj=roχ tujvu-t.*
 boat sea under=DAT sink-IND
 「船が海の下に沈んだ」

(121) *murŋ=toχ hup-t vi-t.*
 horse=DAT ride-CVB.1SG go-IND
 「馬に乗って行った」

(122) *əmk p^h=eβlŋ=toχ karantas iym-t.*
 mother REFL=child=DAT pencil give-IND
 「母は子供に鉛筆をあげた」

(123) *n=əmk n=asq calqa-ku-r e=rχ um-t.*
 1SG=mother 1SG=younger.sibling cheat-CAUS-CVB.3SG 3sg=DAT get.angry-IND
 「母は弟が嘘をついて弟に怒った」

非常に稀に与格は連続して現れることがある。これはこの言語の膠着的な性格を示すとともに、与格の接語としての性格を反映しているといえるだろう。

(124) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

p^he=rχ=toχ

REFL=DAT=DAT

「自分のところへ」

3.1.2.6. 到達格 =*toβo* ~ =*roβo*

到達格は空間的・時間的な限界を表す。以下に例を示す。

(125) 丹菊・パクリナ (2008: 18)

hajmǝ-f=toβo

hajmǝ-r

mu-f=toβo

olden-NMLZ-TERM

olden-CVB.3SG

die-NMLZ=TERM

「老いるまで、老いて死ぬまで」

(126) 丹菊・パクリナ (2008: 44)

kuz-inǝ-f=toβo

go.out-INT-NMLZ=TERM

「出ていくところまで」

前出のものにさらに付け加える場合、普段とは違うことを強調して言う場合にも到達格が用いられる。

(127) *k^heq* *ŋanγǝ-ra*

oβrof

ŋanγǝ-ra

hu-ŋ

k^huzǝr^h=toβo

fox

look.for-CVB.3SG

sable

look.for-CVB.3SG

that-PTCP

wolverine=TERM

「キツネをさがしたり、クロテンをさがしたり、そのクズリまで、」

3.1.3. 名詞派生

ニヅフ語の名詞化には、動詞語幹に名詞派生接尾辞を付加する方法と直説法の動詞形式

-*t*~*-nt* をそのまま項として用いる方法がある²⁷。Panfilov (1962: 41) は、ニヴフ語の名詞派生接尾辞について、生産的な名詞形成接尾辞の数は極めて少なく、歴史的には名詞化されたものであったとしても現在は用いられない接尾辞がはるかに多いと述べている。東サハリン方言にも生産的ではないいくつかの接尾辞が見られる。

(128) 非生産的な名詞化接尾辞

<i>tu-s</i>	「ここ」	<i>vo-n</i>	「村人」	<i>t^hla-ŋi</i>	「トナカイ」
<i>hu-s</i>	「そこ」	<i>sik-m</i>	「全員、全部」	<i>te-ŋi</i>	「カラフトマス」
<i>aw-s</i>	「あそこ」	<i>ula-ŋ</i>	「丘」	<i>c^ho-ŋi</i>	「ハエ」
<i>t^ha-s</i>	「どこ」			<i>k^hlu-ŋi</i>	「カタツムリ」(丹菊 2014: 85)

このように、指示語根に *-s* が接尾されて場所を表す代名詞を派生しているもの、*vo* 「村」や *sik* 「すべて、全部、全員」に接尾されて人を意味する名詞を派生しているもの、出自は明らかではないが語末に *-ŋi* を持つ一連の動物名称が見られる。

以下では、比較的生産性の高い4つの名詞派生接辞の例を取り上げる。なお、動詞が名詞化される際には音変化が起こることがある²⁸。

3.1.3.1. *-r^h*

-r^h による名詞化は、ヴォイス・テンス・アスペクトなどの動詞カテゴリーが標示されることはなく、格と複数の名詞カテゴリーと所有者を表す接語をとることができる。主に道具の意味を表すが、他にも物事の名称、動詞語幹が表す行為を行う人などの意味を持つ名詞を派生する。

(129) 名詞派生接尾辞 *-r^h* (丹菊 2014)

<i>jaŋ-</i>	「見張る」	<i>jaŋ-r^h</i>	「見張り、番人」
<i>jatku-</i>	「閉める」	<i>atku-r^h</i>	「蓋」

²⁷ Mattissen (2003: 21) は、ニヴフ語の直説法の接尾辞は名詞化接尾辞に由来するものであり、名詞と動詞の両方の性質を持つと述べている。

²⁸ 例えば、語頭に /i~j/ を持つ一群の他動詞が名詞化される際には、語頭の /i~j/ が落ちることがある。

<i>javko-</i> 「付ける」	<i>avko-r^h</i> 「糊」
<i>pusu-</i> 「掃く」	<i>posu-r^h</i> 「箒」
<i>r^hə^hkə-</i> 「閉める」	<i>r^hə^hkə-r^h</i> 「鍵」
<i>ɲarbo-</i> 「仕掛ける」	<i>ɲarbo-r^h</i> 「罨」
<i>taɣv-</i> 「囲む」	<i>taɣv-r^h</i> 「周囲」
<i>lələ-</i> 「つめる」	<i>lələ-r^h ~ lələ-s</i> 「痰」

3.1.3.2. -k

-k による名詞化は、行為者、物事の名称、語幹が表す性質を帯びているモノや人など、様々な意味の名詞を派生する。

(130) 名詞派生接尾辞 -k (丹菊 2014, 丹菊・パクリナ 2014)

<i>jaj-</i> 「作る、直す」	<i>aj-k</i> 「作る人、直す人」
<i>juski-</i> 「支払う」	<i>juski-k</i> 「料金、給料」
<i>ijn-</i> 「食べる」	<i>ijn-k</i> 「食べ物、食べる人」
<i>nuɣi-</i> 「先である、最初である」	<i>nuɣi-k</i> 「一番目のもの、犬橋の先導犬」
<i>paɣl-</i> 「赤い」	<i>paɣl-a-k</i> 「赤いもの／人」
<i>hor-</i> 「美味しい」	<i>hor-la-k</i> 「美味しいもの」

人名にも -k で名詞化されたものが見られる (*vi-ŋ-k* [go-PTCP-NMLZ] 「ヴィンク (行く、旅人)」。状態動詞が名詞化される際には、恒常的な性質を表す *-la~-a* が語幹に付加される (例 131a)。さらに、-k による名詞化の際には、結合価が保持されるほか (例 131b)、テンス・アスペクト・モダリティーの動詞カテゴリーが標示され得る。また、複数と格、所有者も標示され得る。

(131) a. 丹菊・パクリナ (2014: 64)

<i>hara, k^hikr^h</i>	<i>p^hi-k</i>	<i><u>pil-a~pil-a-k=ɣun,</u></i>	<i>hut,</i>	<i>tajɣat.</i>
and	a.higher.place	dwell-NMLZ	big-PERM~big-PERM-NMLZ=PL	that PN
「そして、高いところにあるもの、大きなもの、それらはタヤガトだ」				

b. 丹菊・パクリナ (2008: 20)

haŋa naf Pilvo fi-k=yun, hut=yun naf, r^hak=toχ vi-t=yun=lo?
then now Pilvo live-NMLZ=PL that=PL now where=DAT go-IND=PL=Q

「さてそれで、ピルヴォ村に住んでいたものたち、彼らが、どこへ行ったのか...」

次の例 (132) のように、意図を表す動詞語幹派生接辞 *-inə* と共に文末の述語として用いられる場合は、義務の意味を表すことがある。

- (132) *c^{hi} t^hatŋ əfk oz-inə-k.*
you.SG morning early get.up-INT-NMLZ
「あなたは朝早く起きなければならない」

3.1.3.3. *-f*

-f は主に場所を表す名詞を派生するが、非常に生産性が高い。以下に例を示す。

- (133) 名詞派生接尾辞 *-f*

<i>juy-</i>	「入る」	<i>juy-f</i>	「入口」
<i>ul-</i>	「高い」	<i>ul-a-f</i>	「高いところ、丘」
<i>iv-</i>	「ある、いる」	<i>iv-f</i>	「ある／いるところ、居場所、位置」
<i>orpot-</i>	「働く」	<i>orpot-f</i>	「職場」

-k と同様、状態動詞の場合は、名詞化する際に恒常的な性質を表す *-la~a* が付加され得る (*ul-a-f*[high-PERM-NMLZ]「高いところ、丘」)。テンス・アスペクト・モダリティーの動詞カテゴリーが標示されることもあり、結合価も保持される。格と数が標示され得るが、所有者が標示されている例は見られない。以下の例 (134) では、結合価を保持しており、格も標示されている。

- (134) 丹菊・パクリナ (2014: 44)

p^h=atkəcx it-f=toχ
REFL=grandfather say-NMLZ=DAT

「おじいさんが言っていたところへ」

-fの主な機能は場所名詞を派生することであるが、この接尾辞は時間的な意味を表すこともある。

(135) 丹菊・パクリナ (2008: 18)

hajmə-r; hajmə-f=tovɔ, hajmə-r mu-f=tovɔ,
olden-CVB.3SG olden-NMLZ=TERM olden-CVB.3SG die-NMLZ=TERM
「年を取って、年老いるまで、年老いて死ぬまで、」

上記の -f によって名詞化された語は、場所の意味を表しているというよりは、より抽象的な時間の意味を表していると解釈できる。

3.1.3.4. -t ~ -nt

次に、-t~-ntによる名詞化について述べる。この接尾辞は -f、-kと同様、テンス・アスペクト・モダリティーの動詞カテゴリーが標示され得る。結合価も保持される。格、複数、所有者の名詞カテゴリーも標示され得る。具体例は4.5.1節を参照されたい。

ただし、-t~-ntが語幹に付いて語彙化されたものの例は稀である。

(136) 名詞派生接尾辞 -t~-nt (語彙化されたもの)

tu-t 「これ」 *nu-t* 「何」
hu-t 「それ」 *nuyi-t* 「先導犬」 (丹菊・パクリナ 2008: 9)
aw-t 「あれ」 *ɲarɔo-t* 「罌」
thə-t 「どれ」

語彙化されたものには、代名詞類と少数の名詞が存在するのみで、当然ながら動詞カテゴリーの接尾辞が付くことはない。-t~-ntによる名詞化は、そのほとんどが動詞語幹の表す出来事を表し、その主な機能は、補文節を形成することである (4.5.1. 節を参照)。

(137) *ni cʰi it-t=ɣun hujvu-t.*
I you.SG say-NMLZ=PL remember-IND
「私はあなたが言ったことを覚えている」

3.2. 代名詞

代名詞は形態・統語的に「人称によって異なる閉じたクラスの文法的な語」(Dixon 2010: 189)、「節において名詞句の位置に立ち得る自由形式」(Payne 2012[1997]: 43) と定義される。

東サハリン方言の代名詞には、人称代名詞、指示代名詞、再帰代名詞、疑問代名詞があり、これらの代名詞は上記の形態・統語的な特徴を持っている。以下では、人称代名詞、再帰代名詞、指示代名詞、疑問代名詞について順に記述していく。

3.2.1. 人称代名詞

東サハリン方言の代名詞には、他の方言と同じく、1 / 2 / 3 人称があり、Bhat (2004: 134) に従うと、「3 人称 three-person」タイプに分類できる。すなわち、3 人称の人称代名詞に指示代名詞 (3.2.3. 節) とは関係のない形式を用いる言語であり、3 人称の人称代名詞は常に人間を表す。

1 人称複数には包括形と除外形の区別があり、1 / 2 / 3 人称単数の場合は自立形と拘束形 (接語) が存在する。それぞれの形式を以下に示す。

(138) 東サハリン方言の人称代名詞

	自立形 (単数)	自立形 (複数)	拘束形 (単数)
1 人称	<i>ni</i>	<i>min</i> ~ <i>mir^hn</i> [INCL] <i>nin</i> [EXCL]	<i>n=</i>
2 人称	<i>c^hi</i>	<i>c^hin</i>	<i>c^h=</i>
3 人称	<i>jaŋ</i>	<i>in</i>	<i>j=</i> ~ <i>i=</i> ~ <i>e=</i> ~ <i>ja=</i>

拘束形の代名詞接語は、1 / 2 人称の場合は単数代名詞から母音の /i/ が落ちた形であるが、ホストの頭音が子音連続である場合は、母音が挿入される (2.4.2. 節)。3 人称の拘束形は、ホストの頭音が母音である場合は *j=*、子音である場合は *i=* の形になるが、*ja=* の形も頻繁に現れる。拘束形はホストの名詞に前接して所有者を、他動詞のホストに前接して目的語の機能を果たす。Gruzdeva (1998: 26) は、複数の人称代名詞にさらに複数が表示されることがあると述べているが、筆者の調査ではそのような例は確認できていない。

3.2.2. 再帰代名詞

再帰代名詞は p^hi 「自分」である。人称と数による区別はなく、複数 (=kun ~ =yun) が標示されることもない。単数の人称代名詞と同じく、所有者もしくは直接目的語の位置に現れる場合、格をとる場合には母音が落ちて拘束形の $p^h=$ となる。ただし、後続の形態素の頭音が子音連続である場合は母音が挿入される (例 142)。さらに、与格をとる場合は、1 人称と 2 人称の人称代名詞と同じく、母音が挿入される (例 143)。

(142) 丹菊・パクリナ (2008: 26)

min $p^hi=r^hlaj_i=yun...$

we.INCL REFL=reindeer=PL

「私たちは自分たちのトナカイを…」

(143) *jaŋ* $p^he=r\chi=pər^hk$ $k^həmlə-t$.

s/he REFL=DAT=only think-IND

「彼女は自分のことばかり考えている」

再帰代名詞を付加する際、頭に子音クラスターを持たないホストに $p^hi=$ を用いる例が見られる。

(144) 丹菊・パクリナ (2008: 13)

ni $pər^hk$ $p^hi=na\chi=kir$ *milk* *itə-t*

I oneself REFL=eye=INS monster see-IND

「私自身が自分の目で化け物を見た」

上記の例において、 $na\chi$ 「目」は子音クラスターで始まっているわけではないが、あいだに休止が置かれていないにもかかわらず、母音が挿入されている。このような例は非常に稀で、今のところ $p^hi=nə=yun$ 「自分のモノ (複数)」の例が見つかっている。Shiraishi (2010: 46) は、西サハリン方言において、親族名称、身体部位、犬・家などの文化的に重要なアイテムの場合 (譲渡不可能) は母音が挿入されず、譲渡可能とみなし得るものに母音が挿入されると述べており、そこでは $na\chi$ 「目」は譲渡不可能に分類されている。なぜ、東サハリン方言で母音が挿入されるのかは明らかではない。

多くの言語では、先行詞と照応形は同じ節内に制限され、朝鮮語や日本語のように節間でも照応形が用いられ得る一部の言語においても、その使用は補文節構文に限られるようである (Dixon 2012: 160-163)。東サハリン方言の場合は、補文節のほか、連体節と副詞節にも再帰代名詞が用いられる。

(145) 補文節

ni [*namr^h* *p^{hi}* *nut* *nə-t*] *jajmə-t*.
I yesterday oneself what do-NMLZ know-IND
「私は昨日、自分が何をしたのか覚えている」

(146) 連体修飾節

ni [*p^{hi}* *ye*] *lep* *ni-t*
I oneself take bread eat-IND
「私は自分が買ったパンを食べた」

(147) 副詞節 (丹菊・パクリナ 2014: 14)

p^h=ŋafq *hujvu-r* *q^ho-rer-ŋə*
REFL=friend remember-CVB.3SG sleep-cannot-CVB
「(彼女は) 自分の友人のことを思い出して、眠れなくなったとき」

再帰代名詞のほかに、*pə^hk* ~ *par^hk* という形式が用いられることがあるが、この形式の統語的な資格については先行研究において、意見が分かれている。例えば、Savel'eva and Taksami (1970) は「連体代名詞 (attributive pronoun)」、Nedjalkov and Otaina (1981) は「副詞」、Mattissen (2003) は「不変化小辞 (invariable particle)」として扱っている。

特に、Nedjalkov and Otaina (1981: 188) は、「彼自身 he himself」タイプの組み合わせには *p^{hi}* ではなく *park³⁰* が用いられるとしている。

³⁰ 東サハリン方言の *pə^hk* に対応する形式である。

(148) Nedjalkov and Otaina (1981: 192)

vrac^h park p^h=oχt-ti.

doctor oneself REFL=treat-IND

「医者自身が自分を治療した」

丹菊 (2014) には *pər^hk* に関して、「1. 自分、自分で、1人で。2. ~自身、~だけ。」の意味を持つとしている。

(149) 丹菊・パクリナ (2014: 24)

hu-ŋ əcx vi-r, pər^hk vi-r itə-t

that-PTCP husband go-CVB.3SG oneself go-CVB.3SG see-IND

「そのじいさんは行って、1人で行ってあれを見た」

多くの言語では、再帰代名詞が強調の機能も持つとされており (Dixon 2012: 166)、以下のような例から東サハリン方言の *pər^hk* も強調の機能を担っていることがわかる。

(150) 丹菊 (2014: 125)

nar^h pər^hk=lu

who oneself=Q

「いったい誰か」

3.2.3. 指示代名詞

東サハリン方言の指示代名詞は、5つの指示語根に接尾辞の *-t~ -nt* を付加することによって形成される (例 151, 152)。この接尾辞の *-t~ -nt* は、動詞語幹に付いて名詞化や直説法のマーカーとしても用いられる。他にも、接尾辞 *-s* と *-k* が付加された場所や方向を表す一群の代名詞があるが、これらの接尾辞の生産性は高くない。

(151) 指示語根と指示代名詞

語根	モノ・コト	場所	方向
<i>tu-</i> 「近い」	<i>tut</i> 「これ」	<i>tus</i> 「ここ」	<i>tuk</i> 「こちら」
<i>hu-</i> 「少し離れている」	<i>hut</i> 「それ」	<i>hus</i> 「そこ」	<i>huk</i> 「そちら」
<i>ey-</i> 「 <i>hu-</i> より遠い」	<i>eyt</i> 「あれ」	<i>eyt</i> 「あそこ」	<i>ek</i> 「あちら」
<i>aw-</i> ³¹ 「 <i>ey-</i> より遠い」	<i>awt</i> 「あれ」	<i>aws</i> 「あそこ」	— ³²
<i>ku-</i> 「目に見えないもの」	<i>kut</i> 「あれ」	—	—

(152) *tut seta hut=at tafciŋ.*

this sugar that=FOC salt

「これは砂糖で、それが塩です」

指示代名詞が連体修飾に用いられる際には、指示語根に連体形接尾辞 *-ŋ* を必要とするが、現代の東サハリン方言では、標示されない場合が多い³³。

(153) *tu(-ŋ) lu* [this(-PTCP) song] 「この歌」

hu(-ŋ) taf [that(-PTCP) house] 「その家」

モノ・コトを指す代名詞³⁴の場合は、直説法／名詞化の機能を果たす *-t* ~ *-nt* が接尾されてできたもので、名詞と同じく数や格をとることはできるが、所有者が標示されることはない。場所を表す代名詞は、名詞化接尾辞 *-s* によって派生されたものである。格をとることができるが、所有者が標示されることはない。方向の代名詞は、接尾辞 *-k* によって派生されたもので、格をとり得るが、所有者が標示されることはない。

前の文脈ですすでに出てきたものを指している場合は、*tu-* 「これ」 *hu-* 「それ」 *ku-* 「あれ」を用いる。*tu-* 「これ」と *hu-* 「それ」の使い分けは、現場指示の場合に類似しており、例え

³¹ 遠いことを強調している場合は、*aeŋ-* [ae:ŋ] のような形も見られる。

³² 用例を確認することができなかったことを表す。

³³ アムール方言においては、語末の鼻音が落ちるという変化が起きており、東サハリン方言に見られる連体形接尾辞の *-ŋ* は、存在しない。東サハリン方言においても同様の変化が進んでいると考えられる。

³⁴ *tut* 「これ」 *hut* 「それ」は、3人称の人間を指す場合にも用いられる。

ば昔話の語り手と聞き手では、語り手側からは *tu tʰəlkurʰ* 「この昔話」を使い、聞き手側は *hu tʰəlkurʰ* 「その昔話」を使う。

(154) 丹菊・パクリナ (2008: 36)

tu-ŋ tʰəlkurʰ ax sik=ra
 this-PTCP folklore just end=FOC
 「この話はもう終わりだよ」

(155) 丹菊・パクリナ (2008: 9)

orŋorʰ tʰəlkurʰ pʰurʰ-ta, hat... hu-ŋ orŋorʰ tʰəlkurʰ=kin... [中略]
uilta folklore tell-CVB.3PL and... that-PTCP uilta folklore=with...
ŋivŋ tʰəlkurʰ hut=ŋin ara voci-nt
 man folklore that.thing=with almost same-IND
 「ウイлта人が昔話をしたんだが、そのウイлтаの昔話と…[中略] ニヴフの昔話はそれとほとんど同じだ」

ku-「あれ」は、以前見たもの、前の会話で出てきたもの (Krejnovič 1979: 305)、発話の場がないもの、ずっと前で話題にしたもの (Panfilov 1962: 240-247) を表す。

(156) 丹菊・パクリナ (2008: 41)

pʰ=anχ=kin uyrət vi-ŋa naf, ax hu kʰutə=roχ pʰrʰə-t=ŋun.
 REFL=dog=with together go-CVB now at.last that hole=DAT come-IND=PL
ku *kʰutə=roχ pʰrʰə-ŋa, ciw vil-t. ku kʰas ciw. ku cʰam=kun,*
 that hole=DAT come-CVB sound big-IND that drum sound that shaman=PL
pʰake nan aw vil-ta,
 gradually now sound big-CVB.3PL

「(彼は) 自分のオス犬と一緒にいくと、やっとあの穴までたどり着いた。この穴まで来るとき、だんだん (太鼓の) 音が大きくなった。あの太鼓の音だ。あのシャーマンたちの声がだんだん大きくなってきた」

3.2.4. 疑問代名詞

東サハリン方言における疑問代名詞は次のとおりである。

(157) 東サハリン方言の疑問代名詞

<i>nut</i>	「何」
<i>t^hat</i>	「どれ」
<i>t^hak</i>	「どちら」
<i>t^has, anko</i>	「どこ」
<i>nar^h, t^hawt</i>	「誰」
<i>t^haŋs</i>	「いくつ、いくら」
<i>əyr^h ~ ayr^h</i>	「いつ」

nut「何」は、おそらく語根 *nu-* と直説法の *-t~-nt* から形成されていると思われるが、名詞を修飾する場合は、指示代名詞と違って、*nut milk*「何の化け物」のようになっており、これはもはや分析できない形である。複数は標示され得るが、格をとることはない³⁵。

語根 *t^ha-*「どの」から派生された一連の疑問代名詞が存在するが、*t^hat*「どれ」は直説法の *-t~-nt* で派生されたものであり、名詞を修飾する際には、*t^ha tif*「どの道」のように、語根が名詞の前に置かれる。*t^has* は接尾辞 *-s* によって派生されたものであり、格を取り得る。*t^hak* は接尾辞 *-k* によって派生されたものであるが、与格を取っている例が見られる。

3.2.5. その他

不定代名詞の意味は、疑問代名詞をそのまま用いるか、疑問代名詞に *=lu*、*=avr^h* を付加することによって表される。

³⁵ 丹菊・パクリナ (2014: 30) に *r^haŋq=robo nut=robo* [woman=TERM what=TERM]「女の人や何まで」のように、到達格を取っている例が見られるが、これは到達格が強調の用法で用いられた例である (3.1.2.7. 節)。

(158) 不定代名詞

nut=lu 「何か」

nut=avr^h 「何か」

t^haz=avr^h 「どこか」

əɣr=avr^h 「いつか」

なお、ニヴフ語には否定を表す不定代名詞はなく、その意味は疑問代名詞と否定文を用いることで表される。

(159) *nar^h=ciŋ nut=ziŋ hu r^haŋq aɣzu-t*

who=also what=also that woman not.know-IND

「その女性について誰も何も知らない」

3.3. 動詞

この節では、まずニヴフ語の屈折形態論と派生形態論について順に見ていくことにする。さらに、動詞複合体を構成する形式の承接順序と機能についてもここで記述する。

3.3.1. 屈折形態論

3.3.1.1. 定形動詞

定形動詞の場合、直説法と命令法、疑問法が区別される。直説法の接尾辞 *-t~ -nt* は、本来は名詞化の機能を果たしていたものであり、直説法の動詞は名詞の特徴も併せ持つとされている (Mattissen 2003: 21; 名詞化に関しては 3.1.3.4 節を参照)。

直説法と疑問法は人称や数による区別を持たず、それぞれ *-t~ -nt* と *-l* で標示される。一方、命令法の場合は、主語の人称と数に応じて次に示す形式を用いる。

(160) 命令形の屈折接尾辞

	単数	複数	双数
1 人称	—	<i>-ta</i>	<i>-nate</i>
2 人称	<i>-ja</i>	<i>-ve</i>	—
3 人称	<i>-karo</i>	<i>-karkaro</i>	—

Gruzdeva (1998: 34) は、東サハリン方言の命令形 3 人称には、もともと数による対立がなかったが、おそらくロシア語からの影響を受けて、単数と複数で対立が生じたと推定している。さらに、目上の人やそれほど親しくない相手に対しては、*-nave* という命令形を用いることもあるという (ibid.)。以下に具体例を示す。

(161) 直説法：*-t~ -nt*

ni p^h=raf=toχ vi-t.
I REFL=house=DAT go-IND
「私は自分の家に行った」

(162) 命令法 (1 人称複数) : *-ta*

pat parf vec^herinka aj-ta.

tomorrow night party do-IMP.1PL

「明日の夜、パーティーをしよう」

(163) 命令法 (1 人称双数) : *-nate*

əyr=li p^hsarvoku=ux vi-nate.

when=Q holiday=LOC go-IMP.1DU

「いつか休みのときに行こう」

(164) 命令法 (2 人称単数) : *-ja*

jaŋ=aχ r^ho-r vi-ku-ja.

3SG=CAUSEE take-CVB.2SG go-CAUS-IMP.2SG

「彼を連れて行け」

(165) 命令法 (2 人称複数) : *-ve*

c^hin taf=toχ vi-ve.

you.PL home=DAT go-IMP.2PL

「あなたたちは家に帰りなさい」

(166) 命令法 (3 人称単数) : *-varo* (Gruzdeva 1998: 47)

havarō la ur-katn-varo!

let weather good-AUG-IMP.3SG

「天気良くなりますように！」

(167) 命令法 (3 人称複数) : *-varvaro* (Gruzdeva 1998: 46)

in p^hr^hə-in-aχni-kaj p^heyrdoχ p^hr^hə-varvaro!

3PL come-INT-want-CVB let come-IMP.3PL

「彼らが来たければ、来させろ」

(168) 命令法（丁寧）：-nave (丹菊・パクリナ 2008: 44)

thəlyur^h mu-ku-n k^her^h p^hur-nave

folklore be-CAUS-CVB.2PL story talk-IMP.POL

「(私が話したことをほかの人たちに) 昔話にして、話を聞かせてください」

(169) 疑問法：-l

c^hi ij-inə-l?

you.SG eat-INT-INTERR

「食べるか？」

3.3.1.2. 非定形動詞

ニヅフ語の非定形の動詞形には等位節や副詞節を標示する副動詞と連体節を標示する連体形がある。連体形の場合、テンス・アスペクト・モダリティーなどが標示され得るが、主要部の人称と数による区別はなく、接尾辞の *-ŋ* をとる。ただし、連体形接尾辞 *-ŋ* は標示されないことも多く、語幹がそのまま名詞の前に置かれることもある。

一方、副動詞においてはテンスが標示されることはなく、一部の副動詞では主語の人称と数に一致を示す。以下に、ニヅフ語の副動詞と連体形の形とそれが表す機能を示す。

(170) ニヅフ語の副動詞と連体形

副動詞	人称標示	等位	<i>-ra / -ta / -na</i>
		先行	<i>-ror / -tot / -non</i>
		継起	<i>-r / -t / -n</i>
	時	先行	<i>-pa, -fke, -ŋa ~ -ŋə, -vul ~ -ful, -vuye</i>
		同時	<i>-ivo, -tata, -bra</i>
		後行	<i>-anke</i>
	理由	<i>-lax</i>	
	譲歩	<i>-kisk</i>	
	条件	<i>-kaj</i>	
	目的	<i>-toχ ~ -roχ</i>	
連体形		<i>-ŋ</i>	

上記の形式のうち、等位副動詞 (-*ra* / -*ta* / -*na*)、先行副動詞 (-*ror* / -*tot* / -*non*)、継起副動詞 (-*r* / -*t* / -*n*) は、やや不完全ではあるが、主語の人称と数、主節の時制に一致を示す。

(171) 人称標示副動詞

	FUT	NFUT
1SG, 1/2/3PL	n 系列 (- <i>n</i> , - <i>na</i> , - <i>non</i>)	t 系列 (- <i>t</i> , - <i>ta</i> , - <i>tot</i>)
2/3SG	r 系列 (- <i>r</i> , - <i>ra</i> , - <i>ror</i>)	

以下に、一部の人称標示副動詞と時の副動詞の例を示す。

(172) 人称標示副動詞：等位

hu *c^hχa=yun=yir* *p^he=rχ* *ki* *ye-ta*
 that money=PL=INS REFL=DAT shoes take-CVB.1SG
lar^hq *ye-ta* (*ha-t*)³⁶
 clothes take-CVB.1SG do.so-IND

「(私は仕事をしてからもらった) そのお金で自分の靴を買って、服を買った」

(173) 時の副動詞 (丹菊・パクリナ 2008: 14)：先行

r^həlyə-jo-Ɂar-ŋə,
 open-DIMN-PFV-CVB

「少し戸を開けたとき、」

(174) 時の副動詞 (丹菊・パクリナ 2008: 38)：同時

i *rulku-r* *tu-fke* *ətətə* *taf* *maɁo-Ɂra,*
 river pass-CVB.3SG go-CVB INTJ house many-CVB

「川を歩いて行くと、おやおや家がたくさんあって、」

³⁶ 等位副動詞は、文末に補助動詞 *ha*-「そうである、そうする」を取ることがあるが、そのまま文を終えることも可能である。

(175) 時の副動詞 (丹菊・パクリナ 2008: 14) : 同時

ni mæckə-tata tʰəlkurʰ tʰawt kʰeraj-kaj napə
1SG little-CVB folklore somebody tell-CVB yet
vi-t mə-t mə-t ha-t.
go-CVB.1SG listen-CVB.1SG listen-CVB.1SG do.so-IND

「私が小さかった時には、誰かが昔話を言うといつも行って聞いていた」

(176) 時の副動詞 (丹菊・パクリナ 2008: 22) : 先行

naf loci malʒo-vuʒe hu tʰuʒrʰ=avʀʰ ujʒi-re
now Russian get.many-CVB that fire=even disappear-CVB.3SG

「今はロシア人ばかりたくさん増えていて、その火も見られなくなった」

3.3.2. 派生形態論

ニヴフ語の動詞における派生形態論には、語幹を派生させるアスペクト、他動詞化、使役、テンス、モーダルの接尾辞がある。しかしここでは生産性の低い他動詞化の接尾辞 *-u* は扱わない。本節では、使役とテンス・アスペクトについてその詳細を明らかにする。

3.3.2.1. 使役

ニヴフ語において、使役の意味を表す接尾辞には *-u* と *-ku* があり、Nedjalkov, Otaina and Xolodovič (1995[1969]) は、それぞれを「語彙的な使役 (lexical causative)」と「形態的な使役 (morphological causative)」と呼んでいる。本稿では、後者の使役構文 (以下、*-ku* 使役構文と呼ぶ) を対象に、被使役者項の格標示と副動詞の人称標示について調査した結果を報告する。

以下、3.3.2.1.1. 節では *-ku* 使役構文に関する先行研究をまとめる。次の 3.3.2.1.2. 節では研究方法と調査結果を示した後に考察を行い、結論を述べる。なお、例文の表記及び形態素分析に関しては、筆者が適宜変更したところがあることを断っておく。

(180) Nedjalkov and Otaina (2013: 42)

a. *if p^hrə-r ezmu-dj.*
s/he come-CVB.3SG rejoice-IND
「彼は来て喜んだ」

b. *ni if p^hrə-gu-t ezmu-dj.*
I s/he come-CAUS-CVB.1SG rejoice-IND
「私は彼が来て嬉しかった」

(181) Nedjalkov and Otaina (2013: 42, 231)

a. *c^h=ətək liys+q^ha-ror p^hrə-dj.*
2SG=father wolf+shoot-CVB.3SG come-IND
「あなたの父はオオカミを撃ってから来た」

b. *n=aχ liys+q^ha-gu-ror nan c^h=ətək p^hrə-dj=ra.*
1SG=CAUSEE wolf+shoot-CAUS-CVB.3SG already 2SG=father come-IND=FOC
「あなたの父は私がオオカミを撃った後に来た」

上記 2 例の日本語訳からも分かるように、指示転換の用法で用いられる *-ku* は使役の意味を失い、副動詞接辞は主節の主語の人称と数に一致する (Nedjalkov and Otaina 2013: 42)。

3.3.2.1.2. 研究方法とその結果および考察

ここでは、東サハリン方言からの用例を十分に収集することができなかったため、Nedjalkov and Otaina (2013) と Panfilov (1962, 1965) に収録されているアムール方言の例文から得られた *-ku* 使役構文 206 例を分析の対象とする。その分析は、被使役者の格標示、副動詞の人称標示、そして使役構文が表わす意味に注目しながら行った。なお、*-ku* 使役の副詞的な用法 (3.4.2. 節を参照) は考察の対象から除外している。

ここでは、まず [1] 被使役者の格標示、[2] 副動詞の主語一致、[3] 使役構文が表わす意味について、それぞれ見ていくことにする。

[1] 被使役者の格標示

被使役者名詞には、有情物名詞が 163 例、無情物名詞が 14 例現れており、明示されていない例は 31 例であった。さらに、有情物名詞が被使役者格 =aχ で標示されている例は 132 例、無票の例は 31 例であった。無情物名詞が被使役者格 =aχ を取っている例は見られず、すべてが無標の名詞句で現れている。以下に、いくつかの例を示す。

(182) a. Nedjalkov and Otaina (2013: 240)

atək j=aχ vi-gu-di.
father 3SG=CAUSEE go-CAUS-IND
「父は彼を行かせた」

b. Nedjalkov and Otaina (2013: 52)

if k^heq p^hrə-gu-di.
s/ he fox come-CAUS-IND
「彼は狐を (近くまで) 来させた」

c. Panfilov (1965: 44)

amək c^haj nepi-gu-di.
mother tea be.sweet-CAUS-IND
「母はお茶を甘くした」

先行研究において、有情物の被使役者における被使役者格 =aχ は任意的な要素であるとされており、それ以上の記述は管見のかぎり見当たらない。しかしながら、無票の有情物の被使役者 31 例を見ると、その分布に大きな偏りが見られる。つまり、6 例を除く 25 例が従属節内に現れており、それらの例は上記 (180)、(181) に示したように指示転換の機能を果たしている。一方、被使役者格を取っている有情物名詞は、132 例の内 89 例が主節に用いられ、使役の機能を果たしている。以下に無標の被使役者名詞が従属節 (183, 184) と主節 (185, 186) で用いられている例をそれぞれ示す。

(183) Panfilov (1965: 60)

ni p^h=əmək əki-gu-t p^hrə-dⁱ
I REFL=mother be.bad-CAUS-CVB.1SG come-IND

「私は母が体を壊したので来た」

(184) Nedjalkov and Otaina (2013: 228)

ətək mu+hec-jiki-gu-t ni vi-t p^h=ətək+ro-dⁱ.
father boat+take.out-be.unable-CAUS-CVB.1SG I go-CVB.1SG REFL=father+help-IND

「父が船を出せなかったので、私が行って手伝った」

(185) Panfilov (1965: 49)

ni əyrkə k^heq+umgu p^hi=y-gu-dⁱ=ra
I almost fox+woman REFL=kill-CAUS-IND=FOC

「私は狐の女に殺されるどころだった (lit. 私はほとんど狐女に自分を殺させた)」

(186) Nedjalkov and Otaina (2013: 242)

tə+nivx tək ŋarma-ke c^ho ek-ku-dⁱ.
this+man long.time wait-CVB fish bite-CAUS-IND

「この人は、魚が食いつくまで長く待っていた」

上記の例 (183) ~ (186) は、「A が B に C をさせる」という典型的な使役構文とは意味の面で異なっていると思われるが、それについては、[3] で詳しく見ることにする。

さらに、次に示す例のように、従属節と主節の両方に被使役者が現れることがある。

(187) Nedjalkov and Otaina (2013: 242)

ətək n=aχ əvəŋ+moq-ku-r; n=aχ
father 1SG=CAUSEE oar+break.in.two-CAUS-CVB.3SG 1SG=CAUSEE
enadⁱ+r^həpr-ku-dⁱ.
another.one+bring-CAUS-IND

「私がオールを折ってしまって、父は私に他のものを持って来させた」

この場合、従属節の *-ku* は指示転換の機能を、主節の *-ku* は使役の機能を持つ。

[2] 副動詞の人称標示

ニヴフ語の人称標示副動詞の内、継起副動詞 *-r/-t* と先行副動詞 *-ror/-tot* は、主節と従属節に同一主語しか許さず、もし異主語を持つ場合は使役接尾辞 *-ku* をとることによって、主語をそろえる。その際に、副動詞の人称と数は主節の主語に一致する。

(188) Nedjalkov and Otaina (2013: 240)

a. *ōla oz-r, vi-r vəŋir-dʲ.*
child get.up-CVB.3SG go-CVB.3SG cook-IND
「子供は起きて、行って、ご飯を作った」

b. *ni p^h=ōla=aχ oz-t vi-t, vəŋir-gu-dʲ.*
I REFL=child=CAUSEE get.up-CVB.1SG go-CVB.1SG cook-CAUS-IND
「私は子供を起こして、行かせてご飯を作らせた」

しかしながら、1例ではあるが、副動詞の人称と数が被使役者に一致する例が見られる。次に例を示す。

(189) Nedjalkov and Otaina (2013: 257)

if imŋ=aχ c^ho+r^ha-tot iŋ-gu-j-ger-r it-c.
s/he they=CAUSEE fish+fry-CVB.3PL eat-CAUS-E-refuse-CVB.3SG say-IND
「彼は彼らに魚を焼いてから、食べないようにと言った」

ニヴフ語の使役は、(188b)に見るように、被使役者と使役接尾辞 *-ku* の間を作用域とするため、「魚を焼く」人が主節の主語である「彼」だと解釈するのは難しい。言い間違いの可能性も考えられるが、今のデータからは判断が難しい。

[3] -ku 使役構文が表わす意味範囲

Nedjalkov and Otaina (2013) は、使役接尾辞 -ku について、間接作為的 (distant factitive)、または許可 (permissive) の意味を表すとしており、再帰要素 $p^h=$ と関連づけて受身の意味に関して触れているのは服部 (1988) のみである。

服部 (1988) で指摘されているように、ニヴフ語には単なる使役文としての解釈が困難な場合がある。例えば、次の例を使役の意味に解釈するのは極めて困難であり、受身の意味に解釈した方が自然であると思われる。

(190) Nedjalkov and Otaina (2013: 256)

mer sək p^hi=y-gu-nə-dⁱ=ra.

we.INCL all REFL=kill-CAUS-FUT-IND=FOC

「我々はみんな殺されるだろう (lit. 私たちはみんな自分を殺させるだろう)」

上記の例以外に、受身の意味を表していると考えられる例を以下に示す。

(191) Nedjalkov and Otaina (2013: 230)

k^hej p^h=ra-gu-t ni p^hovo~p^hovo q^ho-dⁱ.

sun REFL=shine-CAUS-CVB.1SG I at.once~at.once sleep-IND

「太陽に照らされて (lit. 太陽に自分を照らさせて)、私は少し眠った」

(192) Panfilov (1965: 224)

ōla, nav-at c^hi harvo-ba, kins=ku+k^hu-ra,

child now-FOC you.SG be.strong-CVB devil=PL+kill-CVB.2SG

c^hi cez-ba, kins=ku p^hi=y-gu-ra.

you.SG be.weak-CVB devil=PL REFL=kill-CAUS-CVB.2SG

「あなたが強ければ、化け物を殺して、あなたが化け物に殺される (lit. 化け物に自分を殺させる)」

(193) Nedjalkov and Otaina (2013: 245)

cək imɲ=uin hum-ke hemar=aχ p^h=xər-gu-di.

a.long.time they=LOC be-CVB old.man=CAUSEE REFL=drive.out-CAUS-IND

「(わたしは) 彼らのところで長く居すぎたので、おじいさんに追い出された (lit. おじいさんに自分を追い出させた)」

上記に示した例からも分かるように、すべての例が再帰要素を含んでおり、再帰要素を伴わずに *-ku* のみで受身の意味を表している例は見られなかった。しかしながら、使役としても受身としても解釈が難しい例も見られる。例えば次の例文である。

(194) Nedjalkov and Otaina (2013: 147)

təmk+oxt=ti+ləyə-ke p^hake nan r^həf əki-gu-di.

hand+medicine=even+not.have-CVB even.more only wound be.bad-CAUS-IND

「薬もなくて、さらに手の傷が悪くなった (lit. 傷を悪くさせた)」

上記の例では、使役や受身の意味を読み取ることは難しいと思われる。また、典型的な使役の意味とは離れた、自然現象などのコントロール不可能な状況、非意図的な場面などにおいても *-ku* が用いられる。

(195) Nedjalkov and Otaina (2013: 346)

ɲəŋ ɲəu-gu-tot q^ho-di-ra.

we.EXCL grow.dark-CAUS-CVB.1PL sleep-IND-FOC

「私たちは暗くなってから寝た」

(196) Nedjalkov and Otaina (2013: 247)

if ma+suy-u-r ərkə kut-ku-di.

s/he dried.fish+get.off-TR-CVB.3SG almost fall-CAUS-IND

「彼は干し魚を降ろして、落とすところだった」

(197) Nedjalkov and Otaina (2013: 234)

if lep+ətu=doχ q^hau-r c^he-gu-dⁱ.
s/he bread+cover=DAT not.be-CVB.3SG be.dry-CAUS-IND

「彼はパンを放置していて、乾いてしまった」

例 (195) は、使役者のコントロールできない自然現象であり、ただ単に「日が沈むのを待ってから」という意味を表している。そして、例 (196), (197) の場合は、使役者の予期できない、非意図的な行為を表している。これらの *-ku* 使役構文は、典型的な使役の意味である「A が B に C をさせる」のようなコントロール可能かつ意図的なものとは言えない。

以上、本節で明らかにしてきたことは以下のとおりである。

・従来の先行研究では、格接尾辞 *=aχ* は、有情物の被使役者名詞に任意に付加されるとされてきた。しかしながら、従属節と主節とでは、有情物の被使役者がとる格に大きな偏りがあることが分かった。つまり、無票の名詞句の場合は、計 31 例の内 25 例 (約 80%) が従属節に現れているのに対し、被使役者格 (*=aχ*) の場合は、計 132 例の内 89 例 (約 67%) が主節に現れている。

・*-ku* は強制・許可などの典型的な使役の用法の他にも、コントロールできない自然現象などの状況や受け身の用法まで、広い領域をカバーしている。

3.3.2.2. テンス

ニヴフ語は未来と非未来で対立しており、東サハリン方言においては、未来は *-i~j* で標示されるが、非未来は明示的な形式を持たない。

(198) a. *pat antχ=kun p^hrə-j-t=yun.*
tomorrow guest=PL come-FUT-IND=PL

「明日お客さんたちが来る」

b. *namr^h antχ=kun p^hrə-t=yun.*
yesterday guest=PL come-IND=PL

「昨日お客さんたちが来た」

- c. *hu nivŋ naf yaprka in-t.*
 that human now apple eat-IND
 「あの人は今リンゴを食べている」

例 (198b) は過去の出来事を、例 (198c) は現在の出来事を表している。さらに、非未来形は、現在や過去の習慣、ある期間続く動作を表す表現にも用いられる。

- (199) a. *ni t^hatŋ~tatŋ xaulas uru-t.*
 I every.morning paper read-IND
 「私は毎日新聞を読んでいる」

- b. *namr^h jaŋ muŋvniŋ tata q^ho-t.*
 yesterday s/he one.day all sleep-IND
 「昨日、彼は一日中寝ていた」

副詞節に未来の接尾辞が現れることはなく、主節以外では、もっぱら連体修飾節と補文節にのみ見られる。

- (200) *jaŋ nawx t^hatŋ in-i-t amt-rer-t.*
 s/he today morning eat-FUT-NMLZ be.in.time-cannot-IND
 「彼は今朝ごはんを食べる暇がなかった」

3.3.2.3. アスペクト

ニヴフ語におけるアスペクトの標示には、[1] 語幹派生接尾辞を用いる方法、[2] 補助動詞を用いる方法、[3] 動詞の重複による方法が用いられる。以下では、それぞれの方法について記述する。

3.3.2.3.1. 接尾辞を用いる方法

• *-inə ~ -jnə*

この形式の主な機能は、意図や推測を表すことである。

(201) *ni tolinsk=roχ vi-jnə-t.* (意図)

I Dolinsk=DAT go-INT-IND

「私はドリンスクへ行くつもりです」

(202) 丹菊・パクリナ (2008: 18) : 推測

c^horŋi rur^h ni-r ar^hp-r mu-jnə-t=ra.

reindeer meat eat-CVB3.SG choke-CVB3.SG die-INT-IND=FOC

「トナカイの肉を食べて、窒息して死ぬであろう。」

Nedjalkov & Otaina (2013) は、状態動詞に付加された場合は「起動」のアスペクト的な意味を持つとしており、次の例を挙げている。

(203) Nedjalkov and Otaina (2013: 135)

c^haqo məjməj-inə-dj.

knife be.blunt-INT-IND

「ナイフが鈍くなりかけている」

東サハリン方言においては、状態動詞に付加されている例は見られず、ほとんどが動作動詞であった。自発の意味を表す動詞 *iylu*-「恐れる」に付加されている例が1例見られたが、確かに「起動」のアスペクト的な意味を表している。以下に例を示す。

(204) 丹菊・パクリナ (2014: 38)

p^h=eβlŋ=aγr^h iylu-jnə-r kəmlə-ta

REFL=child=also fear-INT-CVB.3SG think-FOC

「自分の子供も怖いように思い始めた」

Nedjalkov & Otaina (2013: 135) は、「この言語では、意図や願望は意図された行為の初期段階 (initial state) として解釈される」と述べているが、次の例に示すように、常に行為の初期段階として解釈されるわけではない。

(205) 丹菊・パクリナ (2008: 41)

nana c^ham=kun lu-jnə-ŋa kuz-r, p^h=aŋχ ke-r,
just shaman=PL sing-INT-CVB go.out-CVB.3SG REFL=dog catch-CVB.3SG

「まだシャーマンたちが歌い始めないうちに外へ出て、自分の犬を捕まえて、」

日本語訳からも分かるように、歌はまだ始まっておらず、この例は、「シャーマンたち」の意図や願望、または行為を行うための準備段階を表している。

• *-kar / -ivu ~ -jvu*

-kar の場合、主に過去の出来事に関する表現に用いられ、その出来事が完結していることを表す。興味深い点は例 (206b) のように、すでに完結性を含意している動詞 *t^hvi-*「終わる」には用いることができるが、*mu-*「死ぬ」には用いることができないということである (例 206c)。一方、不完了の *-ivu* の場合は、*t^hvi-*「終わる」と *mu-*「死ぬ」の両方に用いることができるが、現在の進行状態を表す場合は、例 (206a') に見るように、無標の非未来のテンス形式を用いることも可能である。

(206) a. *ni ax pityəŋ juru-kar-t.*

I already book read-PFV-IND

「私は本を (最後まで) 読んだ」

a' *ni naf pityəŋ juru(-jvu)-t.*

I now book read(-IPFV)-IND

「私は今本を読んでいる」

b. *film t^hvi-kar-t.*

movie finish-PFV-IND

「映画は (完全に) 終わった」

b' *film t^hvi-jvu-t.*

movie finish-IPFV-IND

「映画は終わるところだった」

c. **acim* *mu-Ɂar-t*.
grandmother die-PFV-IND
「祖母が死んだ」

c' *acim* *mu-jvu-t*.
grandmother die-IPFV-IND
「祖母は死にかけていた」

-*ivu* は、特に発話時点で行われている動作を表す (Nedjalkov and Otaina 2013: 137)。

• -*xsu*

この形式について、Nedjalkov and Otaina (2013) は「否定的慣習」を表すとしているが、東サハリン方言においても類似した機能を持つ³⁸。

- (207) a. *jaŋ* *arak* *ra-Ɂavr-t*.
s/he alcohol drink-NEG-IND
「彼はお酒を飲まない」
- b. *jaŋ* *arak* *ra-xsu-t*.
s/he alcohol drink-NEG.USIT-IND
「彼はいつもお酒を飲まない」
- c. *jaŋ* *arak* *ra-rer-t*.
s/he alcohol drink-cannot-IND
「彼はお酒を飲めない」

この形式について、Nedjalkov and Otaina (2013) と Gruzdeva (1998) はアスペクト (慣習 usitative) のカテゴリーに含めているが、Panfilov (1965) はモダリティーとして扱っている。上記の3つの例は文脈によって同じ意味に解釈され得る。

³⁸ 丹菊 (2014: 252) は、否定の助動詞として *xsu*-「～しない」をあげており、動詞の *jayzu*-「知らない」との関連性について触れている。例) *jaŋ araq ra-xsu-nt* 「彼はふだんから酒を飲まない」

• *-xə*

先行研究での指摘どおり、状態動詞に用いることはできない。

(208) a. *jaŋ arak ra-katŋ-t.*
s/he alcohol drink-AUG-IND
「彼はお酒をたくさん飲む」

b. *jaŋ arak ra-xə-t.*
s/he alcohol drink-HBT-IND
「彼はいつもお酒を飲む」

c. **ur-xə jivŋ*
be.good-HBT human
「いつも良い人」

例 (208c) では、恒常的な性質を表す *-la*、または程度の高さを表す *-kar / -katŋ* を用いて言わなければならない。さらに *-katŋ* は文脈によっては、*-xə* と同じ意味で用いることができる。

• *-rəm / -təm*

継起副動詞 *-r / -t* に *-əm*³⁹が付いたものであり、主語の人称と数によって変化する。ただし、未来の継起副動詞 *-n* と結合した *-nəm* という形式は見られない。

(209) 丹菊・パクリナ (2008: 14)
tʰuŋr mi=vərʰk jrʰə-rəm-t
fire inside=only see-CONT.3SG-IND
「火の中だけを見つめていた」

過去の行為の結果が発話時には残っていないことを表すときにも用いられる。

³⁹ 丹菊 (2014: 39) は、*-əm* について「動詞連用形 (副動詞形; 筆者注) に接尾して動作が進行中であることを表す」と述べている。

(210) a. *jaŋr^h c^{hi} t^hatŋ afk oz-t?*
 why you.SG morning early get.up-IND
 「なぜこんなに早く起きたの？ (今現在、起きている相手に)」

b. *jaŋr^h c^{hi} ar^hk oz-rəm-t?*
 why you.SG night get.up-CONT.2SG-IND
 「なぜ夜中に起きていたの？ (一旦起きたが、また寝た場合)」

(211) a. *nar^h p^haχ alyə-t?*
 who window open-IND
 「誰が窓を開けたの？ (今も開いている)」

b. *nar^h p^haχ alyə-rəm-t?*
 who window open-CONT.3SG-IND
 「誰が窓を開けていたの？ (今は閉まっている)」

3.3.2.3.2. 補助動詞を用いる方法

前節でみた接尾辞を用いる方法のほかに、継起副動詞の後に補助動詞を用いることで表すこともできる。アスペクトの意味を表す際に用いられる補助動詞には以下のようなものがある。

(212) *ha-* 「そうである、そうする」 習慣
hunv- ~ hum- 「ある／いる」 継続
t^hvi- 「終わる」 完了

(213) *t^hamci-ŋ ŋa tur^h=pər^hk ni-t ha-t=yun?*
 what.kind.of-PTCP animal meat=only eat-CVB.3PL do.so-IND=PL
 「普段はどんな動物の肉を食べているのか。」

(214) Sangi (2012: 2)

caqr^h ruv niyv=kun p^h=vo fi-t hum-t=yun.
three sibling man=PL REFL=town live-CVB.3PL exist-IND=PL
「3人の兄弟が自分たちの村で住んでいた」

(215) Sangi (2012: 12)

q^ho-r t^hvi-ror jaŋ oz-ŋə
sleep-CVB.3SG finish-CVB.3SG s/he get.up-CVB
「寝終わってから、彼が起きたときに」

3.3.2.3.3. 重複による方法

動詞語幹の重複によってもアスペクトの意味を表すことがある。その際には、反復的・多回的な意味を表す。

(216) 丹菊 (2008: 30)

t^hatŋ=asr^h eŋko-r, eŋko-r oz~oz-ra?
morning=FOC fast-ADVLZ.2SG fast-ADVLZ.2SG get.up~get.up-CVB.2SG
「朝も早くから、いつも早く起きて」

動詞だけではなく、名詞や数量詞などの重複によっても反復的・多回的な意味を表すことがある。

(217) 丹菊・パクリナ (2008: 23)

nenŋ~nen=toχ ja=χa otot-t.
one~one=DAT 3SG=name ask-IND
「一人一人に名前を尋ねた」

3.3.3. 動詞複合体

亀井・河野・千野編 (1996: 1371) は、動詞複合体について、次のように述べている。

日本語の動詞は、その語基にさまざまな接辞や助辞 (particle) を付けて、いろいろな具体的な構成体をつくり出すが、この構成体という具体的な単位には、従来、特別な名称がなかった。そこで、仮にこれを動詞複合体 (verb complex) とよぶことにしたい。そして、日本語の複合体は動詞だけでなく形容詞や形容動詞にもみられるので、これを用言複合体と称することにする。

(亀井・河野・千野編 1996: 1371)

ニヅフ語の動詞の基本構造は、次のように示すことができる。

(218) [[語根 (- 語幹派生接尾辞 n)]_{語幹} - 屈折接尾辞]_語

但し、() 内は任意であることを、n は複数の派生接尾辞の連鎖が可能であることを表す。

ニヅフ語の動詞は、語幹のみで用いることはできず、統語的な環境に応じて、屈折接尾辞の一つを必ずとらなければならない。さらに、上記の動詞の基本構造は、接語や補助動詞によって複雑な複合体を形成し得る。以下に比較的長い動詞複合体の例を示す。

(219) *c^h=aχ* *p^hrə-ku-jnə≠qavr-t=yun=la*

2SG=CAUSEE come-CAUS-INT≠not-IND=PL=Q

「(彼らは) あなたを来させようとしなかったのか」

ニヅフ語の動詞複合体は、語幹の後ろに派生接尾辞や屈折接尾辞、補助動詞などが来るとい構造になっている。ここでは、動詞複合体を構成する形式の承接順序と機能について記述するが、本論に入る前に、ここで扱う動詞複合体の範囲について述べておく必要があると思われる。

3.3.3.1. 複合体

ニヴフ語には、特定の形態統語的な環境において、後続する語の頭子音が交替する現象(2.4.5節を参照)、目的語が他動詞の直前に置かれるときには拘束形の動詞を用いなければならないという現象がある。

(220) *ni tamx ta-t.* (<ra- 頭子音交替)

I tobacco drink-IND

「私は煙草を吸った」

(221) Krejnovič (1958: 26)

ovla=gu u=dəmk~rəmk vo-t ler-di (<ev- の拘束形)

child=PL RECP=hand-hand take-CVB.3PL play-IND

「子供たちがお互いの手をとって遊んでいる」

頭子音交替が起こる要素の間と目的語+拘束形の他動詞の間には、休止を置くことができず、一つのアクセント単位をなすことから、このような現象は、結合度の高さを表すしるしとみることができる。このような事実から、Krejnovič (1958) は「抱合」とみなしている一方で、Panfilov (1954)⁴⁰ や Jakobson (1971) は一語とはみなさず、それぞれ「語連合 (word union)」、「統語セクション (syntactic section)」と呼んでいる。また、Nedjalkov and Otaina (2013) には「統語的複合体 (syntactic complex)」という用語もみられる。

さらに、他動詞の直前に置かれる目的語は、等位名詞句や連体修飾によって、理論的には無限に拡張することができる。以下の例において複合体は [] で示す。

(222) Panfilov (1954: 20)

ni pila [piula q'otr k'u-d] (<iy- ~ -xu- ~ -k'u-)

I big black bear kill-IND

「私は大きな黒いクマを殺した」

⁴⁰ Panfilov (1954) は、ニヴフ語における頭子音変化の現象を連声 (sandhi) とみなしている。

(223) Panfilov (1962: 167)

ŋaŋəŋnɪvɪx q^hotr=ke [c^holŋi=ye k^hu-d]
hunter bear=CONJ reindeer=CONJ kill-IND

「獵師がクマとトナカイとを殺した」

上記の例文の下線部は、述語と複合体を形成することはないが、これについて Jakobson (1971: 80) は、「統語セクションの内部では、先行する語は後続する語に従属するものであり、等位的な語が一つの統語セクションを構成することはできない」と述べている。すなわち、「等位的な語」のあいだで頭子音交替が起こることはなく、複合体を形成することはない。本稿では、他動詞の前に置かれて複合体を形成する連体修飾語や目的語名詞句を除き、動詞語根の後ろに現れる形式のみを記述の対象とする。

次に、動詞語根連続の問題であるが、Mattissen (2003) は、ニヴフ語の動詞語根連続 (verb root serialization) を次の三つのタイプに分けている。

・一時的な連続：分析的な表現が可能

(224) Panfilov (1965: 31, 113)

ɪf nə-ur-dⁱ → hə ɲɪvɪx ur-gur nə~nə-dⁱ
s/he do-good-IND that person good-ADV LZ.3SG do~do-IND

「彼はうまく働いている」 「あの人は良く働いている」

ニヴフ語において、動詞語根連続は「固有の、または恒常的性質」を表す際に用いられるが、「具体的な状況」を表す際には、分析的な表現が用いられる (Mattissen 2003: 191)。

・語彙化された連続

(225) Otaina (1978: 38)

vār̄k-maŋg-dⁱ
rot-strong-IND

「不純である」

語彙化された連続の二番目の語根には *ur-*「良い」 *elvr-*「悪い」 *ləyə-*「無い」 *many-*「強い／高価な」 *piŋr-*「安い」などの状態動詞が多く現れるが、一時的な連続に比べて、「全体的な意味」を表す傾向がある (Mattissen 2003: 193)。

・ モーダル動詞構文

(226) Gruzdeva (1998: 43)

ni ra-in-aŋni-t

I drink-INT-want-IND

「私は (何か) 飲みたい」

Mattissen (2003: 196) は、一時的な連続と区別されるモーダル動詞構文の特徴として、次の三つをあげている。

- i) 使役、テンス、アスペクトなどの形式は、一番目の語根に標示される。
- ii) 分析的な表現ができない。
- iii) それぞれのモーダル動詞は、自立語としてのステータスが異なる。

動词语根連続は、文法化の程度にもかかわる問題であり、判断が難しいところがある。本稿では、このような状況を踏まえて、自立語としてのステータスを保持しているもののみを補助動詞とみなし、これらの形式を ≠ で表すことにする。

3.3.3.2. ニヴフ語東サハリン方言の動詞複合体を形成する形式

Nedjalkov and Otaina (2013) は、アムール方言の記述において、直説法の接尾辞 *-di* を基準に、これと同じ位置に現れる形式と前に現れる形式、そして後ろに現れる形式に分けている。本稿では、それぞれを「屈折形式」「グループ A」「グループ B」と呼ぶことにする。東サハリン方言において、比較的に使用頻度が高い形式を以下に示す。

屈折形式

- ・ 定形： *-t* (直説法)、 *-ja / -ve* (命令 2SG / 2PL)、 *-nate* (命令 1DU)、 *-ta* (命令 1PL)、 *-l* (疑問)
- ・ 非定形： *-r / -t / -n* (継起副動詞)、 *-ra / -ta / -na* (等位副動詞)、 *-ŋ* (連体形) など

グループ A

- ・派生接尾辞：*-u* (他動詞化)、*-jo* (指小)、*-ku* (使役)、*-ivu* (不完了)、*-kar* (完了)、*-rəm / -təm* (継続)、*-i* (未来)、*-inə* (意図・推量)、*-rer* (不可能) など
- ・語幹につづく補助動詞：*≠ker-* 「～したくない」、*≠qavr-* 「～しない」、*≠avni-* 「～したい」、*≠t^hvi-*⁴¹ 「～しおわる」
- ・副動詞につづく補助動詞：*≠ha-* 「そうである」、*≠hunv-~hum-* 「ある／いる」、*≠t^hvi-* 「終わる」

グループ B

- ・*=kun* (複数標識)、*=lu* (疑問)、*=lo* (疑問)、*=ŋa* (疑問)、*=furu* (伝聞)、*=ta* (確言)

以下では、グループ A とグループ B の承接順序と機能についてみていくことにする。

3.3.3.2.1. グループ A の承接順序と機能

グループ A のうち、派生接尾辞の承接順序から見ていくことにする。まず、他動詞化は語幹の一番近いところに位置し、次に指小、アスペクト、使役の接尾辞がつづく。さらに、意図・推量は使役の後にくる。

(227) a. <i>q^hav-u-jo-kar-t</i>	b. <i>vi-kar-ku-r</i>	c. <i>orpot-ku-jnə-ŋa</i>
be.warm-TR-DIM-PFV-IND	go-PFV-CAUS-CVB.3SG	work-CAUS-INT-CVB
「少し温めた」	「行かせてしまって」	「働かせようとしたとき」

東サハリン方言のデータにはみられなかったが、アムール方言ではアスペクトと使役の承接順序が変わる例がみられる。

⁴¹ 語幹の後に置かれた *≠t^hvi-* 「～しおわる」の例は、パクリナ氏との調査で得られた *juru≠t^hvi-* 「読み終わる」の例があるが、丹菊・パクリナ (2014) と Sangi (2012) では、一貫して副動詞の後に置かれて用いられている。

(228) Panfilov (1965: 68-69)

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| a. <i>kaʉ-γət-ku-dʲ</i> | b. <i>j=ajma-gu-γət-tʲ</i> |
| swallow-PFV-CAUS-IND | 3SG=watch-CAUS-PFV-IND |
| 「(彼女に)飲み込ませた」 | 「それを見せてしまった」 |

金子 (2010) には、このような交替は意味の変化を伴うという指摘があるが、それ以上の詳しいことはまだわかっていない。次に、意図・推量はアスペクトの前に位置し、未来と継続はこれらの後ろにつづく。

(229) 丹菊・パクリナ (2008: 10-11; 2014: 14, 48)

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| a. <i>juγ-inə-kaɾ-r</i> | b. <i>tor-ivʉ-rəm-t</i> |
| enter-INT-PFV-CVB.3SG | burn.out-IPFV-CONT-IND |
| 「入ろうとして」 | 「火が消えかけていた」 |
| c. <i>ki fi-jnə-rəm-ŋə</i> | d. <i>itə-ku-j-l</i> |
| shoes wear-INT-CONT-CVB | see-CAUS-FUT-INTERR |
| 「靴を履こうとしていたとき」 | 「見せるのか？」 |

未来と意図・推量が同時に複合体に現れることはない。不可能の接尾辞がほかの派生接尾辞と共起している例はみられなかった。以上のことを、使役接尾辞を中心にまとめると次のようになる。

- ・使役の前に現れる形式：他動化、指小、完了、不完了
- ・使役の後ろに現れる形式：意図・推量、未来、継続

次に語幹につづく補助動詞を見てみると、願望 *#akani*-「～したい」や否定願望 *#ker*-「～したくない」の場合は前の語幹が必ず意図・推量の *-inə* をとっており、グループ A のほかの形式と共起している例は得られていない。

- | | |
|---|-------------------------|
| (230) a. <i>r^ho-jn#ker-t</i> | b. <i>vi-jn#akani-t</i> |
| take-INT#not.want-IND | go-INT#want-IND |
| 「持っていきたくない」 | 「行きたい」 |

一方、否定の $\neq qavr$ -「～しない」の場合は、テンスやアスペクトの形式が付加されている例がある。

(231) 丹菊・パクリナ (2014: 46, 2008: 25)

a. $josqo\neq qavr-i-t=ra$

cross \neq not-FUT-IND=FOC

「渡らないだろう」

b. $xer=ci\neq qavr-ka-r-t$

tell=NEG.FOC \neq not-PFV-IND

「話もかけない」

最後に副動詞 + 補助動詞は、多くの場合に継続や習慣といったアスペクトの機能を果たしている。グループ A の形式と共起している例はみられない。

(232) 丹菊・パクリナ (2014: 16)

$palagan aj-t\neq vi-t$

shed make-CVB.3PL \neq finish-CVB.3PL

「小屋を作り終えて (彼らは) 来た」

$p^{h}r^{h}a-t=yun.$

come-IND=PL

(233) $lar^{h}q ye-ta ki ye-ta\neq ha-t.$

dress buy-CVB.1SG shoes buy-CVB.1SG \neq do.so-IND

「服を買ったり靴を買ったりした」

グループ A の形式は、機能の面からみると、主にヴォイス、テンス、アスペクト、モダリティが中心となっている。より詳しく見てみると、派生接尾辞は使役を基準にして、語幹に近い側には他動化とアスペクト形式が位置し、遠い側にはテンスとモダリティ形式が来ている。Mattissen (2003: 196) は、モーダル動詞構文において、使役、テンス、アスペクトなどの形式は、一番目の語根に標示されると述べているが、例 (231) で見るように、後ろの語根にテンスやアスペクトが標示されることもある。

3.3.3.2.2. グループ B の承接順序と機能

屈折接尾辞の外側には、複数と疑問、確言の形式が現れる。複数の形式 $=kun\sim=yun$ は主語が複数である場合に任意に付加される要素である。疑問の $=la$ は極性疑問文に、 $=\eta a$ と

=*lu* は内容疑問文に用いられるが、特に =*lu* は間接疑問に用いられることが多い。これらの形式は複数を除き、同時に出ることはない。承接順序は複数が前にきて、ほかの形式があとにつづく。

(234) 丹菊・パクリナ (2008: 44)

p^hr^hə#qavr-t=yun=ta

come≠not-IND=PL=AFFIRM

「(彼らは) 来なかったのだ」

3.4. 副詞

ニヴフ語の副詞には、派生のプロセスを経て形成されたものとそうではないものがある。以下では、それぞれの例について見ていく。

3.4.1. 非派生副詞

非派生副詞には、以下にあげるものが含まれる。

(235) 非派生副詞

時間副詞	程度副詞
<i>namr^h</i> 「昨日」	<i>ara</i> 「ほとんど」
<i>pat</i> 「明日」	<i>p^haki</i> 「もっと」
<i>nawx</i> 「今日」	<i>les</i> 「たくさん」
<i>naf</i> 「今」	<i>nijneq</i> 「少し」
<i>mrolf</i> 「昔」	<i>arara</i> 「ちょっと」
<i>afk</i> 「早く」	
<i>naf</i> 「もう」	
<i>napə</i> 「まだ」	
<i>aχ</i> 「もう、すでに」	
<i>caj</i> 「また」	

3.4.2. 派生副詞

重複の派生による副詞には、次のようなものがある。

(236) 語根重複によるもの

<i>nana</i>	「ちょうど」
<i>k^hruyru</i>	「たびたび」
<i>p^hakifaki</i>	「だんだん」
<i>lesles</i>	「たくさん」

名詞派生接尾辞 *-r^h* と具格 *=kir ~ =yir* によって形成されたものが見受けられる。

(237) *maxtu-r^hkir* 「本当に」 < *maxtu-* 「本当である」

Panfilov (1965) と Krejnovič (1979) は、状態動詞に使役接尾辞の *-ku* と継起副動詞接尾辞の *-r / -t / -n* からなる *-kur / -kut / -kun* が接尾されて副詞が形成されることがあると述べている。さらに、Panfilov (1965) は、これらの例が副詞として用いられる場合は、副動詞の時とは異なり、主語の人称と数に一致しないことがあると述べているが、そのような例は本稿で用いた資料では見られなかった。

(238) 丹菊・パクリナ (2014: 42)

nama-kur *ur-kur* *ja=ηacx=toχ* *may-r*
well-ADVLZ.3SG good-ADVLZ.3SG 3SG=leg=DAT climb-CVB.3SG
「慎重によく彼の脚のところへ登って」

さらに、継起副動詞接尾辞によって形成された副詞も見られる。

(239) 丹菊・パクリナ (2014: 44)

eko-n *vi-ve!* *eko-n* *vi-ve!*
hurry-ADVLZ.2PL go-IMP.2PL hurry-ADVLZ.2PL go-IMP.2PL
「早く行け！早く行け！」

しかしながら、Krejnovič (1979: 324) は「ニヴフ語における性質副詞は、動詞と形態的に区別することはできず、文中での機能からのみ区別できる」と述べている。実際に東サハリン方言において、*-kur / -kut / -kun* による派生副詞が結合価を保持している例が見られる。

(240) Sangi (2012: 3)

ha-r [*aw vil-kur*] *hu-η* *ekη qaxjo-t.*
do.so-CVB.3SG voice big-ADVLZ.3SG that-PTCP child cry-IND
「そうやって声を大きくして、その子供は泣いた」

これらの例で注目すべき点は、*-kur/-kut/-kun* によって派生された副詞が形態的にも統語的にも副動詞と同じくふるまっている点である。狭い意味での副詞化、すなわち語彙レベルでの派生にこれらの形式を含めるのは問題があるといえる。

3.5. 数量詞

ニヅフ語の数量詞は数を表す部分とクラスを表す部分からなっており、24 から 26 のクラスに分けられるとされている (Krejnovič 1934, Panfilov 1962, Mattissen 2003 など)。そのクラスの一部を以下に示す。

(241) ニヅフ語 (アムール方言) の数量詞 (Mattissen 2003: 15)

	人	船	一般	干し魚の束	網
1	<i>nin</i>	<i>nim</i>	<i>naqr</i>	<i>nar</i>	<i>nvor</i>
2	<i>men</i>	<i>mim</i>	<i>meqr</i>	<i>mer</i>	<i>mevor</i>
3	<i>caqr</i>	<i>cem</i>	<i>caqr</i>	<i>car</i>	<i>cfor</i>
4	<i>nər</i>	<i>nəm</i>	<i>nəkr</i>	<i>nər</i>	<i>nvur</i>
5	<i>t^hor</i>	<i>t^hom</i>	<i>t^hoqr</i>	<i>t^hor</i>	<i>t^hovor</i>
6	<i>ηax</i>	<i>ηax</i>	<i>ηax</i>	<i>ηax</i>	<i>ηayvor</i>
7	<i>ηamk</i>	<i>ηamk</i>	<i>ηamk</i>	<i>ηamk</i>	<i>ηamkvor</i>
8	<i>minr</i>	<i>minr</i>	<i>minr</i>	<i>minr</i>	<i>minrvor</i>
9	<i>nəpben</i>	<i>nəpben</i>	<i>nəpben</i>	<i>nəpben</i>	<i>nəpbenvor</i>
10	<i>mxo</i>	<i>mxo</i>	<i>mxoqr</i>	<i>mxor</i>	<i>mxovor</i>

筆者の調査では、先行研究で取り上げられているもののうち、一部の形式しか確認することができなかった。以下では、東サハリン方言において、ほぼすべての物事を数える時に用いることができ、使用頻度も最も高い数量詞を中心に記述する。まず、1 から 10 までを以下に示す。

(242) 1	<i>naqr^h</i>	6	<i>ηax</i>
2	<i>meqr^h</i>	7	<i>ηamk</i>
3	<i>caqr^h</i>	8	<i>minr^h</i>
4	<i>nəkr^h</i>	9	<i>nantur^h</i>
5	<i>t^hoqr^h</i>	10	<i>mxoqr^h</i>

1 から 5 までと 10 には *-qr^h* ~ *-kr^h* の要素が共通してみられるが、共時的にはもはや分析することはできない。

数量詞の *naqr^h* 「ひとつ」が接語 =*ciŋ* とともに否定文で用いられることがあるが、その際には「何もない」という意味を表す。

(243) 丹菊・パクリナ (2008: 15)

hapr^h naqr^h=ciŋ ujyi-t
 haps one=also not.exist-IND
 「ハプス草が一つもなかった」

さらに、*naqr^h* 「ひとつ」は不定の意味を表す機能を果たすことがある。

(244) 丹菊・パクリナ (2014: 24)

ha-ror naf caj t^hatŋ naqr^h oz-r
 do.so-CVB.3SG now again morning one wake.up-CVB.3SG
 「それからこんどは、また、ある朝、起きて」

(245) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

pil-a iv-f naqr^h=toχ vi-ŋa
 big-PERM live-NMLZ one=DAT go-CVB
 「大きな村があって、そこへ行ったとき」

例 (245) に見るように、数量詞は格を取ることも可能である。

次に、11 から 19 までの数量詞は「10 + 1, 2, 3...」のように表す。

(246) 11	<i>mχoqr^h naqrur^hk</i>	16	<i>mχoqr^h ŋaβur^hk</i>
12	<i>mχoqr^h meqrur^hk</i>	17	<i>mχoqr^h ŋamkur^hk</i>
13	<i>mχoqr^h caqrur^hk</i>	18	<i>mχoqr^h minrur^hk</i>
14	<i>mχoqr^h nəkrur^hk</i>	19	<i>mχoqr^h ŋantur^hk</i>
15	<i>mχoqr^h t^hoqrur^hk</i>		

1 から 10 までとは違って、11 から 19 までには *-ur^hk* という形式が共通して見られる。20 より大きい数量詞は次に示すとおりである。

(247)	20	<i>mexoqr^h</i>	100	<i>nr^hayk</i>
	30	<i>c^hxokr^h</i> (丹菊 2008: 81)	200	<i>mer^hayk</i>
	40	<i>naxukr^h</i>	300	<i>cakr^hayk</i>
	50	<i>t^hormxokr^h</i> (丹菊 2008: 81)	1,000	<i>nemqay</i>
	60	<i>ηax mχokr^h</i>	2,000	<i>meqr^hnemqay</i>
	70	<i>ηamk mχoqr^h</i>	10,000	<i>mχoqr^hnamqay</i> (丹菊 2008: 82)
	80	<i>minr^h mχoqr^h</i>		
	90	<i>nantur^h mχoqr^h</i>		

20 から 50 までは、すべての数量詞に共通する要素に、おそらく 10 を表す *-xu~χo* と末尾の *-qr^h~kr^h* を加えた形式からなっており、60 から 90 まではそれぞれ「6, 7, 8, 9 + 10」という形になっている。100 の単位では、*-r^hayk* という共通する要素が現れる。10,000 の単位では「10 + 1,000」という形になる。

回数を表す表現は、*nr^hak* 「1 回」、*mer^hak* 「2 回」というように、数量詞に共通する要素に *=r^hak*⁴² 「~回、~度」という形式が付加されて作られる。

(248)	<i>ay</i>	<i>naqr=ux</i>	<i>caqr^h=r^hak</i>
	year	one=LOC	three=time
		「1 年に 3 回」	

数量詞の重複によって、配分的な意味を表すこともある。

(249)	<i>naqr^h~naqr^h</i>	「一つずつ」
	<i>meqr^h~meqr^h</i>	「二つずつ」
	<i>caqr^h~caqr^h</i>	「三つずつ」

⁴² この形式は、共時的に分析可能である。疑問詞とも一緒に用いることができる。例) *t^hays=r^hak* 「何回、何度」

数量詞は名詞の前に来ることもあれば、後ろに来る場合もあり、どちらの順序も可能であるが、数量詞に (複) 数が標示されることはない。ただし、名詞+数量詞の語順では、名詞に複数が標示されることがある。

- (250) a. *ɲax raf*
six house
「6 軒の家」
- b. *taf=kun ɲax*
house=PL six
「家 6 軒」

第4章 統語論

本章 統語論では、まず名詞句の構成と複他動詞を中心とした動詞の構文について考察する (4.1. 節と 4.2. 節)。次に、等位節、連体節、補文節、副詞節、といった各種の節の構造を扱う (4.3. 節、4.4. 節、4.5. 節、4.6. 節)。最後に疑問と比較の各構文について分析を加える (4.7. 節、4.8. 節)。

4.1. 名詞句

ニヅフ語は、冠詞を持たず、数の標示も義務的ではないため、(代)名詞は単独で句を構成し得る。この節では、指示詞・数量詞・疑問詞が名詞とともに句を形成している場合 (4.1.1. 節)、所有構造 (4.1.2. 節)、等位構造 (4.1.3. 節) について記述する。

4.1.1. 指示詞・数量詞・疑問詞＋名詞

[1] 「指示詞＋名詞」

ニヅフ語の指示詞には、次のようなタイプがある。

(251) 東サハリン方言における指示詞のタイプ

名詞類		副詞類	動詞類
指示代名詞	連体修飾形		
<i>tut / hut</i> etc. 「これ・こいつ／それ・そいつ」 <i>tus / hus</i> etc. 「ここ／そこ」	<i>tuy / huɣ ~ tu / hu</i> etc. 「この／その」	<i>təmcikur / həmcikur</i> 「このように／そのように」	<i>təmcit / həmcit</i> 「このようである／そのようである」

(252) a. *cʰo orpot-tot [hu cʰɣa=yun=yir]*_{NP} [後略]

fish work-CVB.1SG that money=PL=INS

「(私は) 魚仕事をしてから (お金をもらって)、そのお金で (靴や服を買った)」

b. *hə*, [həmci tʰəlurʰ]_{NP}=pʰuru.

yes like.that folklore=HS

「そう、そのような昔話だそうだ」

上記の例 (252a) は、指示語根の *hu* 「その」が連体修飾に用いられている例であり、例 (252b) は動詞類の指示詞 *həmci*-「そのようである」が連体修飾に用いられている例である。両方とも前方照応の機能を果たしている。ニヴフ語には冠詞がなく、指示詞によるこのような名詞修飾は、一種の定性を表していると思なすことができる。

[2] 「数量詞＋名詞」

数量詞と名詞の語順は一定しておらず、その数によって、1～5 までは「名詞＋数量詞」、6 以上は「数量詞＋名詞」の語順をとることが多い。

(253) 丹菊・パクリナ (2008: 37-8, 41-2)

[toraf naqrʰ]_{NP} [ivf naqrʰ]_{NP} [kʰutə naqrʰ]_{NP} 「名詞＋数量詞」

winter.house one where.to.live one hole one

「冬の家 1 軒」 「村 1 つ」 「穴 1 つ」

[ɲax raf]_{NP} [mχoqrʰ ɲayrʰk aɲi]_{NP} 「数量詞＋名詞」

six house ten six year

「家 6 軒」 「16 歳」

[3] 「疑問詞＋名詞」

疑問詞による修飾も可能であり、確認できている例は次のとおりである。

(254) [nut ɲa]_{NP} 「何の／どんな動物」

[nut aw]_{NP} 「何の／どんな声」

[tʰaɲs niɣv]_{NP} 「何人」

[tʰaɲs cʰχa]_{NP} 「いくら」

疑問の意味を持つ状態動詞 *tʰəmci*-「どのようである」の場合は、語根に連体形接尾辞が付加されて名詞を修飾している例が見られる。

- (255) [*t^hamci-ŋ* *ŋa*]_{NP}
 what.kind.of-PTCP animal
 「どんな動物」

4.1.2. 所有構造

ニヴフ語には属格の格関係を表す明示的な形式はなく、所有関係を表す際には人称代名詞接語 (3.2.1. 節を参照) の他にも、名詞を並置する方法が用いられるが、その際に主要部の頭子音が交替することでその格関係が標示される。

なお、名詞による修飾構造においても頭子音交替が起こるため、形態・統語的な面からは所有構造と名詞による修飾構造を区別することは困難である。

- (256) 名詞による修飾構造

[*tolŋa* *rur^h*]_{NP} (< *tur^h*)
 marine.animal meat
 「海獣の肉」

- (257) 所有構造 (丹菊・バクリナ 2008: 23)

[*nin* *ŋafq=γun* *χa*]_{NP} (< *q^ha*)
 we.EXCL comrade=PL name
 「私たちの友人の名前」

本稿では、名詞による修飾構造と所有構造とを区別せず、便宜上所有構造としてまとめて扱うことにする。まず、理論上は所有構造を無限に拡張することが可能であるが、実際の例では指示対象が異なる4つの名詞、接語の例しか見られない (例 258)。さらに、例 (259) に示すように、後置詞的な要素を主要部名詞の前に置き、所有構造を作ることも可能である。

- (258) Krejnovič (1937: 30)

[*n=atk* *ruvŋ* *evlŋ=kun*]_{NP}
 1SG=father sibling child=PL
 「私の父の兄弟の子供たち」

(259) 丹菊・パクリナ (2008: 34)

[*ur mi hətə*]_{NP}

island inside center

「島の中の中心」

単数の人称代名詞と再帰代名詞が所有者になる場合は、拘束形の前接語となってホストの名詞に標示される。一方で、複数の人称代名詞の場合は、そのままの形で名詞の前に置かれる。

(260) <i>n=əmk</i>	「私の母」	<i>nin əmk</i>	「私たちの母」
<i>c^h=əmk</i>	「あなたの母」	<i>c^hin əmk</i>	「あなたたちの母」
<i>j=əmk</i>	「彼／彼女の母」	<i>in əmk</i>	「彼ら／彼女らの母」
<i>p^h=əmk</i>	「自分／自分たちの母」		

4. 1. 3. 等位構造

4. 1. 3. 1. 順接 (conjunction)

名詞句を等位接続する際には、=*kin*~=*yin*⁴³「～と」、*hara*「そして」などの形式が用いられる。=*kin*の場合は、等位接続の機能のほかに随伴者を表す機能も持つ^{44, 45}。以下では、それぞれの形式について順に見ていく。

⁴³ アムール方言の等位接続には、名詞の数に応じて単数の場合は *-ke*、複数の場合は *-ko* という異なる形式が用いられる (Panfilov 1962: 168-9, Nedjalkov and Otaina 2013: 57)。東サハリン方言の場合はそのような数による形式の使い分けはなく、単数でも複数でも =*kin* が用いられる。

⁴⁴ Stassen (2000) はこのようなタイプの言語を ‘WITH-language’ と呼んでいる。

⁴⁵ Mattissen (2003: 8) によれば、サハリン方言には、アムール方言の *-ko* に対応する形式 *-kon* があるが、数を区別せず *-kin* を用いることがあるという。より詳しいサハリン方言の等位接続形式に関する記述は、管見の限り見当たらない。

4.1.3.1.1. =kin ~ =yin

=kin は、複数の名詞句を 1 つの名詞句にする機能を果たす。この形式が 2 つの名詞句を接続する場合に限って言えば、どちらか片方に標示される場合、もしくは両方に標示される場合が考えられるため、構造的に 3 つのタイプ、すなわち AB=kin、A=kin B、A=kin B=kin があり得る。

東サハリン方言においては、AB=kin タイプは、1 つの名詞句を形成せず、=kin は随伴者を標示する機能を果たす。それに対し、A=kin B と A=kin B=kin タイプの =kin は等位接続機能を果たし、1 つの名詞句を形成する。以下に、それぞれの例を示す。

(261) 丹菊・パクリナ (2014: 50)

jan [p^h=mam=yin]_{NP} ... ofθ=roχ vi-r
s/he REFL=wife=ASC toilet=DAT go-CVB.3SG
「彼は妻とトイレに行って」

(262) 丹菊・パクリナ (2014: 16)

[j=ac^hx=kin p^h=asq=yun]_{NP} uyrut pal=roχ vi-t
3SG=husband=ASC REFL=younger.brother=PL together mountain=DAT go-CVB.3PL
「彼女の夫と自分の弟たちが一緒に山へ行って」

(263) 丹菊・パクリナ (2008: 35)

[ar^hqif=kin k^heq=yin]_{NP} həmci-t var^hk-t=yun.
octopus=ASC fox=ASC like.that-CVB.3PL fight-IND=PL
「タコとキツネが、そのように喧嘩していた」

上記の例において、AB=ASC の場合 (例 261) は、副動詞の数が A に一致を示しているのに対し、A=ASC B と A=ASC B=ASC の場合 (例 262, 263) は A+B に一致していることが分かる。すなわち、前者の場合は A が主語であり、後者の場合は A+B が主語となっている。

=*kin* によって形成された名詞句が格を取る場合は、名詞句の最後の要素に付加されるのが一般的である⁴⁶。

- (264) [*e=kin j=asq=xin*]_{NP=toχ} *ʃkola=roχ noglik intənat=roχ*
 3SG=ASC 1SG=younger.sibling=ASC=DAT school=DAT Noglik boarding.school=DAT
 「彼女と私の妹に、学校に、ノグリキの寄宿学校に」

4.1.3.1.2. *hara*

hara 「そして」は、複数の名詞句、または節を等位接続するときに用いられる。この接続語は、基本的には等位接続されるすべての名詞句に付加される。

- (265) *jin kazeta hara zjurnal hara juru-t=yun.*
 we.EXCL newspaper and magazine and read-IND=PL
 「私たちは新聞や雑誌を読んでいる」

=*kin* によって形成された名詞句と他の名詞句を等位接続する際にも *hara* が用いられる。

- (266) 丹菊・パクリナ (2014: 16)
 [*j=ətk=yin j=əmk=yin*]_{NP} *hara,*
 3SG=father=ASC 3SG=mother=ASC and
 [*j=asq r^həŋq eβlj*]_{NP} *hara=və^rʰk hunv-ta*
 3SG=younger.brother girl child and=only be-CVB.3PL
 「彼の父親と母親と、彼の妹である女の子だけがいて」

⁴⁶ アムール方言においては、A=ASC B=ASC タイプに格が付加される場合、=ASC の前、または後ろに来ることがある (Nedjalkov & Otaina 2013: 57, Panfilov 1962: 171)。東サハリン方言においては、そのような例は見られなかった。

4.1.3.1.3. その他のタイプ

焦点接語の =*ciŋ* 「～も／～さえ」や到達格 =*toɔo* 「～まで」も等位接続の機能を果たすことがあるが、その際には強調の意味が加わる。

- (267) *nin* *kazeta=roɔo* *zjurnal=roɔo* *juru-t=yun*.
we.EXCL newspaper=TERM magazine=TERM read-IND=PL
「私たちは新聞や雑誌までも読んでいる」

- (268) 丹菊・パクリナ (2008: 37)
t^hulɸ=ciŋ, *toɸ=ciŋ*, *t^has=toɰ* *vi-t=lo* *haror* *p^hr^hə-r*
winter=even summer=even where=DAT go-IND=Q then come-CVB.3SG
「冬も夏もどこに行っていたのか、それから戻ってきて」

=*ciŋ* が否定節で用いられた場合は、否定の等位接続としての機能を持つ。

- (269) *nar^h=ciŋ* *nut=ziŋ* *hu* *r^haŋq* *aɣzu-t*.
who=even what=even that woman not.know-IND
「彼女について誰も何も知らない」

4.1.3.2. 離接 (disjunction)

離接⁴⁷を表す最も一般的な方法は、不確実性を表す疑問の接語 =*lu* を用いることである。

- (270) *tut* *pityəŋ=lu* *clovari=lu*
this.thing book=Q dictionary=Q
「これは本なのかそれとも辞書なのか」

=*lu* は間接疑問を表すときにも頻繁に用いられる。

⁴⁷ Haspelmath (1993) に倣い、この用語を用いて示す。

(271) *jaŋ mor^hqa-t=lu jan-t=lu ni jaɣzu-t.*

s/he be.alive-IND=Q how.to.be-IND=Q I not.know-IND

「彼が生きているかどうか私は分からない」

4.2. 動詞の自他 —複他動詞を中心に—

自動詞／他動詞の違いについては、きわめて重要な問題ではあるが、今回は十分に扱いきれなかったため、今後の課題とする。これについては、稿を改めて論じる予定である。この節ではもっぱら複他動詞を扱い、特にその目的語標示と名詞側での格標示の仕方を分析する。なお、東サハリン方言からの用例を十分に収集することができなかつたため、Nedjalkov and Otaina (2013) と Panfilov (1962, 1965) に収録されているアムール方言の例文から収集した用例を分析の対象としていることを断っておく。

ここでは、Malchukov, Haspelmath and Comrie (2010) の複他動詞に関する類型論的な記述を参考にする。その記述では、複他動詞が持つ2つの目的語 (T, R) と他動詞が持つ1つの目的語 (P) の標示の仕方によって、複他動詞構文が5つのタイプに分類されている。すなわち、indirective (P = T ≠ R)、secundative (P = R ≠ T)、neutral (P = T = R)、tripartite (P ≠ T ≠ R; 稀)、horizontal (T = R ≠ P) タイプである。本節ではニヴフ語の複他動詞がこれらのうちどのタイプをとるかについて考察を進めていく。

Mattissen (2003: 141) によれば、ニヴフ語には次のような複他動詞がある (() 内は Nedjalkov and Otaina (2013) と Panfilov (1962, 1965) から得られた延べ用例数である)。

(272) ニヴフ語における複他動詞 (Mattissen 2003: 141)

<u>imɣ-</u> ~ -xim- ~ -k ^h im-	「与える」(28)
jasqam- ~ -asqam-	「取りあげる」(2)
ɣəlŋu- ~ -kəlŋu- ~ -gəlŋu-	「救う」(0)
<u>xez-</u> ~ -xez- ~ -k ^h ez-	「話す」(28)
jəskəm- ~ əskəm-	「説明する」(3)
<u>jar-</u> ~ -ar-	「食わせる」(21)
jəɣ- ~ -əɣ-	「飲み物を与える」(0)
<u>si-</u> ~ -si- ~ -c ^h i-	「置く」(27)
ŋər-	「下に置く」(0)
jupu- ~ -hupu-	「浸す／突っ込む」(0)
marq-	「注ぐ」(1)
r ^h ə- ~ -r ^h ə- ~ -t ^h ə-	「突き通す」(4)
saru- ~ -saru- ~ -c ^h aru-	「詰める」(2)
vəlk- ~ -vəlk- ~ -pəlk- ~ -bəlk-	「加える」(0)

<i>fəŋ-</i> ~ <i>-fəŋ-</i> ~ <i>-pʰəŋ-</i>	「投げる」(2)
<i>rov-</i> ~ <i>-rov-</i> ~ <i>-tov-</i> ~ <i>-dov-</i>	「縛る」(4)
<i>eyro-</i> ~ <i>-xro-</i> ~ <i>-kʰro-</i>	「かける」(3)
<i>lalv-</i>	「もたれる」(0)
<i>jay-</i> ~ <i>-ay-</i>	「縫い付ける」(3)
<i>ləku-</i>	「留める／固定する」(0)

Mattissen (2003: 140) は、複他動詞において、goal または recipient が複他動詞と複合体を構成すると述べている⁴⁸。つまり、基本的には上記のうちの *secundative type* であるということになる。しかし実際の例を検討していくと、下記にみるようにいくつも例外が観察できる。

以下では、用例数が比較的多い動詞 (上記の語のリストにおいて下線を付したもの) について、格標示と動詞における目的語標示の仕方を順にみていくことにする⁴⁹。

4.2.1. 格標示 (flagging)

ニヴフ語には、主格、対格、属格を表す明示的な形式はない (3.1.2 節を参照)。複他動詞の R は与格で標示される。ただし、R が複他動詞の直前の位置に置かれる場合は、格は標示されず、動詞と複合体を形成する。

まず、R を含む複他動詞である *imy-* ~ *-xim-* ~ *-kʰim-* 「与える」の格標示パターンの例を以下に示す。

(273) Panfilov (1962: 127) : neutral (P = T = R)

ətək *pʰ=meotʰu* *ŋ=əkən+kʰim-dʰ*
 father REFL=gun 1SG=elder.brother+give-IND
 「父は兄に自分の銃を与えた」

⁴⁸ Mattissen (2003) は、Dryer (1986) の ‘primary object’ という用語を採用して、ニヴフ語の他動詞は ‘primary object’ と複合体を形成すると述べており、動詞のテンプレートにおいてこの ‘primary object’ が位置する場所を ‘undergoer’ スロットと呼んでいる。

⁴⁹ Nedjalkov and Otaina (2013) に従い、統語的な複合体を形成する統語環境は “+” 記号を用いて表すことにする。

(274) Panfilov (1962: 230) : indirective (P = T ≠ R)

i=vo+xeqrŋa=in hum+jivɣ=dox hədʲ+xim-dʲ.
3SG=village+above-LOC live+man-DAT that.one-give-IND
「彼の村の上の方に住んでいる人にそれを与えた」

(275) Panfilov (1962: 127) : indirective (P = T ≠ R)

hoxor ŋir hemax=tox imy-dʲ
then cup old.woman=DAT give-IND
「それから (彼は) コップを老婆に渡した」

複他動詞 *imy*-「与える」の場合、28 例中 5 例が indirective、15 例が neutral の格標示パターンを示している。残り 8 例は項が明示されていなかったため、判断が難しい。T の項が格標識を取ることはなく、R のみが与格を取ることができる。

次に、複他動詞 *xez*- ~ *-xez*- ~ *-kʰez*- 「話す」の格標示パターンの例をあげる。

(276) Savel'eva and Taksami (1970: 409) : neutral (P = T = R)

if ərk tədʲ ɲ=xez-dʲ.
s/he already this 1SG=say-IND
「彼はすでにこれを私に話した」

xez- ~ *-xez*- ~ *-kʰez*- 「話す」の場合は、neutral タイプとみなし得る例は見られなかったが、Savel'eva and Taksami (1970: 409) に例 (276) のような例が見られる。調査資料からの 28 例ではすべて、次の例 (277) のように R 項のみが現れているが、その内 24 例は無標の名詞句が用いられ、述語と複合体を形成している。残りの 4 例は、被使役者格 (=ax) をとっている (例 278)。また、得られた例はすべて、「～に話した」または「～に話して～した／させた」という統語・意味構造を成している。

(277) Panfilov (1965: 48) : neutral (P = T = R)

nanak pʰ=utku+kʰez-r vaqa lət-ku-ra
elder.sister REFL=husband+say-CVB.3SG box make-CAUS-CVB.3SG
「姉は自分の夫に話して、箱を作らせた」

(278) Nedjalkov and Otaina (2013: 236)

ni ətək=aχ p^hrə-gu-jnə-t xez-dⁱ.

I father=CAUSEE come-CAUS-INT-CVB.1SG say-IND

「私は父に来るよう話した (lit. 私は父を来させようと話した)」

Nedjalkov and Otaina (2013: 236) によれば、例 (278) のような構文は間接命令 (indirect order) を表すのに用いられるという。本稿では、このような例は用例数に含めているが、分析の対象とはしていない。

次に、場所の複他動詞である *si-* ~ *-si-* ~ *-c^hi-* 「置く」の格標示パターンを以下に示す。

(279) Nedjalkov and Otaina (2013: 12) : neutral (P = T = R)

if cus vən+mi+si-dⁱ.

s/he meat kettle+inside+put-IND

「彼は肉をなべの中に置いた」

(280) Panfilov (1965: 226) : indirective (P = T ≠ R)

həborot p^h=ays+c^həu-ra tar^h+ŋəŋ-rot vən=doχ si-ra.

then REFL=clothes+take.out-CVB.3SG louse+look.for-CVB.3SG kettle=DAT put-CVB.3SG

「それから、自分の服を取り出して、シラミを探し、なべに置いた」

(281) Panfilov (1962: 127) : indirective (P = T ≠ R)

r^hat=x tamx+c^hi-dⁱ?

where=LOC tobacco+put-IND

「どこにタバコを置いた？」

場所の複他動詞 *si-* 「置く」の場合、27 例中 11 例が indirective、14 例が neutral の格標示パターンを示していた。残り 2 例は項が省略されていたため、判断できなかった。R は与格を取ることができるが、T は常に無標の名詞句で現れる。例 (281) は、T が述語と統語的な複合体を形成しており、先行研究 (Mattissen 2003) の記述の反例となる⁵⁰。

最後に、*jar-* ~ *-ar-* 「食わせる」の格標示パターンは以下のとおりである。

⁵⁰ Mattissen (2003: 146-147) は、このような例を例外として扱っており、ロシア語からの影響であると述べている。

(282) Nedjalkov and Otaina (2013: 265) : neutral (P = R = T)

umgu lep p^h=ōla+ar-di.

woman bread REFL=child+feed-IND

「女性はパンを自分の子供に食わせた」

(283) Panfilov (1962: 127) : secundative (P = R ≠ T)

amək lep=yir p^h=ogla+ar-di.

mother bread=INS REFL=child+feed-IND

「母はパンを自分の子供に食わせた (lit. 母はパンで自分の子供に食わせた)」

jar-~-ar-「食わせる」の場合、neutral タイプが 6 例、secundative タイプが 3 例確認できたが、残りの 12 例は項が省略されていたため、判断ができなかった。但し、R の意味役割を果たす名詞句が明示されている場合はすべて、その名詞句が述語と統語的な複合体を形成している。また、T は具格の接尾辞を取ることがあり、その際には secundative タイプの格標示を示す。

次の例 (284) は、R が与格接尾辞を取っているにもかかわらず、述語の undergoer スロットに R が再度現れている例である。

(284) Panfilov (1962: 140) : indirective-secundative?

v=emənaɣ qan=dox tʰus+tʰosq ɲir+ci-rot qan+ar-di

3SG=old.woman dog=DAT meat+leftover dish+put-CVB.3PL dog+feed-IND

「おばあさんは犬に肉の残り物を皿において犬に食わせた」

このように R が二重標示されているものはこの 1 例のみである。述語に自立形の *jar-* が用いられている 3 例にはどれも R 名詞句が現れていないことを考えると、この例では R 名詞句と述語の結びつきが、今まで見てきた複他動詞より強いと考えられる。一方、与格の R と述部の R の間に節が埋め込まれていることも何らかの影響を及ぼしている可能性がある。

4.2.2. 動詞における目的語標示 (indexing)

Malchukov, Haspelmath and Comrie (2010) は、格標示と動詞における目的語標示、すなわち、人称・数などの一致のコーディング・パターンは、互いに独立したものであるとしている。前節では、格標示のパターンについて記述を行ったが、ここでは動詞における目的語標示に注目して見ていくことにする。

ニヴフ語の動詞は、一部の副動詞とムードの接尾辞が主語の人称と数に義務的な一致を示すのみで、一般に目的語には一致を示さない。本稿では、述語の *undergoer* スロットに R と T のうちどの要素が来るか、すなわちどっちの名詞句が述語と複合体を形成しているかのみを考察の対象とする。

・ 複他動詞の *imy-* ~ *-xim-* ~ *-k^him-* 「与える」 の場合

(285) Panfilov (1974: 86) : secundative (P = R ≠ T)

amək karandas p^h=oɣla+k^him-di

mother pencil REFL=child+give-IND

「母は子供に鉛筆を与えた」

(286) Panfilov (1962: 230) : indirective (P = T ≠ R)

i=vo+xeqrɲa=in hum+nivɣ=dox hədⁱ+xim-di.

3SG=village+above=LOC live-man=DAT that.one-give-IND

「彼の村の上の方に住んでいる人にそれを与えた」

・ 複他動詞 *xez-* ~ *-xez-* ~ *-k^hez-* 「話す」 の場合

(287) Savel'eva and Taksami (1970: 409) : secundative (P = R ≠ T)

if ərk tədⁱ ɲ=xez-di.

s/he already this 1SG=say-IND

「彼はすでにこれを私に話した」

(288) Panfilov (1965: 48) : secundative (P = R ≠ T)

nanak p^h=utku+k^hez-r vaqa lət-ku-ra.

elder.sister REFL=husband+say-CVB.3SG box make-CAUS-CVB.3SG

「姉は自分の夫に話して、箱を作らせた」

・場所の複他動詞である *si- ~ -si- ~ -c^{hi}-* 「置く」の場合

(289) Nedjalkov and Otaina (2013: 12) : secundative (P = R ≠ T)

if cus vəp+mi+si-dʲ.

s/he meat kettle+inside+put-IND

「彼は肉をなべの中に置いた」

(290) Panfilov (1962: 127) : indirective (P = T ≠ R)

r^hat=x tamx+c^{hi}-dʲ?

where=LOC tobacco+put-IND

「どこにタバコを置いた？」

・ *jar- ~ -ar-* 「食わせる」の場合

(291) Nedjalkov and Otaina (2013: 265) : secundative (P = R ≠ T)

umgu lep p^h=ōla+ar-dʲ.

woman bread REFL=child+feed-IND

「女性はパンを自分の子供に食わせた」

(292) Panfilov (1962: 127) : secundative (P = R ≠ T)

əmək lep=yir p^h=oɣla+ar-dʲ.

mother bread=INS REFL=child+feed-IND

「母はパンで自分の子供たちを食わせた」

以上の例における状況をまとめると、*imy- ~ -xim- ~ -k^{hi}m-* 「与える」と *si- ~ -si- ~ -c^{hi}-* 「置く」では secundative と indirective の両方が観察され、*jar- ~ -ar-* 「食わせる」と *xez- ~ -xez- ~ -k^{hi}ez-* 「話す」では secundative のみが観察されたということになる。

4.2.3. まとめ

本節での調査結果をまとめると次のようになる。

(293) ニヴフ語の複他動詞のコーディング・パターン

	格標示 (flagging)	複合体の形成 (indexing)
<i>imy-</i> ~ <i>-xim-</i> ~ <i>-k^him-</i> 「与える」	• neutral • indirective	• secundative • indirective
<i>xez-</i> ~ <i>-xez-</i> ~ <i>-k^hez-</i> 「話す」	• neutral	• secundative
<i>si-</i> ~ <i>-si-</i> ~ <i>-c^hi-</i> 「置く」	• neutral • indirective	• secundative • indirective
<i>jar-</i> ~ <i>-ar-</i> 「食わせる」	• neutral • secundative	• secundative

Mattissen (2003) は、ニヴフ語を ‘primary object’ のタイプ (すなわち secundative タイプ) の言語とみなしている。しかしながら、格標示と動詞における目的語標示という類型論的なパラメータを用いて調べてみると、上記の結果から分かるように、異なるタイプのパターンが観察される。

この違いの最大の原因は、Mattissen (2003) が例外として扱っている用例を、本稿ではむしろ一般的な例として扱っているという点であろう。このような例は Panfilov (1962) だけではなく、Nedjalkov and Otaina (2013) や Savel’eva and Taksami (1970) などにも見られる。

(294) Savel’eva and Taksami (1970: 93)

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| a. <i>pityə+k^him-di</i> | b. <i>c^hɣa+xim-di</i> |
| book+give-IND | money+give-IND |
| 「本を与える」 | 「お金を与える」 |

(295) Nedjalkov and Otaina (2013: 164-5)

- | | | | | |
|----------------------------------|-------------------|------------------------|----------------------------|----------------|
| a. <i>ni</i> | <i>ən-ən-ɲara</i> | <i>c^ho</i> | <i>c^həŋ=doχ</i> | <i>oyske-t</i> |
| I | year~year-ADV | fish | you.PL=DAT | send-CVB.1SG |
| <i>c^həŋ=aχ</i> | <i>ɲ-t</i> | <i>morqa-gu-di=ra.</i> | | |
| you.PL=CAUSEE | eat-CVB.1SG | be.alive-CAUS-IND=FOC | | |
| 「私は毎年、魚をあなたたちに送って、あなたたちに食べさせていた」 | | | | |

b. *ni an~an-ŋara cʰəŋ=doχ cʰo+oχske-t...*

I year~year-ADV you.PL=DAT fish+send-CVB.1SG

「私は毎年あなたたちに魚を送って、」

今後は、これらの例に共通する何らかの特徴や条件は存在するのか、という点についてさらに調査していく必要がある⁵¹。

⁵¹ Nedjalkov and Otaina (2013: 164) は、例 (295a) の直接目的語 *cʰo* 「魚」の方が (295b) のそれより、‘somewhat more prominent’ であると述べているが、それ以上の記述は見当たらない。

4.3. 等位節

ニヴフ語における等位節の標示には、副動詞を用いる方法と接続語を用いる方法がある。以下では、それぞれの方法について記述する。

4.3.1. 副動詞による等位接続

節の等位接続には、等位副動詞の *-ra/-ta/-na*⁵²の他に、継起副動詞の *-r/-t/-n* が用いられる。これらの副動詞接尾辞は主語の人称と数に一致を示す (3.3.1.2. 節を参照)。継起副動詞の場合は、様態・目的・原因など主節との様々な関係を表す機能も持つ。

- (296) *ni namr^h taf=toχ mχoqr^h c^haz=ux p^hrə-t*
I yesterday house=DAT 10 time=LOC come-CVB.1SG
nojuq t^hilivizar r^hə-tot poz-t q^ho-t
little television watch-CVB.1SG lie-CVB.1SG sleep-IND

「私は昨日 10 時に家に帰ってきて、少しテレビを見てから、横になって寝た」

- (297) 丹菊・パクリナ (2008: 38)

c^ho ramɁ-ra, c^ho=yun k^hə-ta,
fish be.many-CVB.3SG fish=PL strong-CVB.3PL

「魚がたくさんいて、魚たちが飛び跳ねていた」

- (298) *nawχ atk ancaj orpot-f=toχ vi-ra*
today father again work-NMLZ=DAT go-CVB.3SG
aki institut-roχ vi-ra (ha-t.)
elder.brother university-DAT go-CVB.3SG do.so-IND

「今日も父は会社に行って、兄は大学に行った」

等位副動詞の *-ra/-ta/-na* は、文末に *ha-*「そうである」を取ることがあるが、これは義務的なものではなく、現れないことも多い。ただし、命令などのムードやその他の動詞カテ

⁵² Mattissen (2008: 120) はこの副動詞を等位従属 (cosubordinate) と見做している。

ゴリーの標示が必要になる場合は、*ha-*「そうである」が必須であり、それらの標示は *ha-*「そうである」の方に標示される。

さらに、等位副動詞の *-ra / -ta / -na* は、文脈によって離接 ('or') の意味を表すこともある。

- (299) *sarɔ-ŋ muxf ni pajnr^hak pityŋ juru-ta t^hilivizar r^hə-ta (ha-t.)*
rest-PTCP day I always book read-CVB.1SG television look-CVB.1SG do.so-IND
「私は休みの日はいつも本を読んだり、テレビを見たりしている」

Nedjalkov and Otaina (2013: 48) は、アムール方言における継起副動詞と等位副動詞の用法の違いとして、それぞれの動詞が表す動作が重なる場合、等位副動詞を用いることはできないと述べている。

- (300) Nedjalkov and Otaina (2013: 48)

a. *if cark-r təvə-di.*
s/he jump-CVB.3SG enter.house-IND
「彼はジャンプして入った」

b. **if cark-ra təvə-ra ha-di.*
s/he jump-CVB.3SG enter.house-CVB.3SG do.so-IND
「彼はジャンプして入った」

このことは、東サハリン方言にもそのまま当てはまる。例えば、上記の例 (300b) は、それぞれ別の時間に行われた動作として解釈すると問題なく言えるが、そうでない限り非文である。

4.3.2. 接続語による等位接続

東サハリン方言に「接続詞」の語類はない。しかしながら、動詞の *ha-*「そうする、そうである」の副動詞形が接続詞のような働きをすることがある。

(301) 丹菊・パクリナ (2014: 16)

j=akan=yun *ax* *palakan* *aj-t#t^hvi-t* *p^hr^hə-t=yun.*
3SG=elder.brother=PL already hut make-CVB.3PL≠finish-CVB.3PL come-IND=PL
ha-t *in* *p^hr^hə-t* *juy-ŋa*
do.so-CVB.3PL they come-CVB.3PL go.in-CVB

「彼女の兄たちは小屋を作り終えて来た。そして、彼らが来て家に入ると、」

4.3.3. 同一指示削除

2つ以上の等位節が同一指示の要素を共有している場合は、一方が削除される。以下の例ではすべての節の述語が同一指示の目的語 (*hut* 「それ」) を持っている。通常、最初の節にのみ目的語が標示される。

(302) *hut* *ir^hlə-t* *yuzi-t* *taf* *mi=roχ* *r^horuy-t*
that.thing pull-CVB.3PL bring.out-CVB.3PL house inside=DAT bring-CVB.3PL
sobo-t *iz-t* *qan=kun* *ar^h-ta* *p^hi* *ij^h-ta* *ha-t*
melt-CVB.3PL cut-CVB.3PL dog=PL feed-CVB.3PL oneself eat-CVB.3PL do.so-IND
tolŋa=yit
marine.animal=INS

「それを持ち出して、家の中に持ってきて、溶かして、切って、犬たちに食わせたり、自分たちが食べたりした。海獣 (の肉) で」

等位関係にある連体節において、主要部名詞が同一指示である場合は、主要部名詞を共有することができる。

(303) *c^h=ur-la* *pocur-la* *aw*
2SG=good-PERM beautiful-PERM voice

「あなたの良い、美しい声」

4.3.4. 使役文における等位節

使役文を作る際には、主節動詞に使役の接尾辞を付加するだけでよく、等位関係にある他の節には使役を標示しない。

- (304) *p^h=əmk* *n=aχ* *oz-r* *ʃkola=roχ* *vi-ku-t*.
REFL=mother 1SG=CAUSEE get.up-CVB.3SG school=DAT go-CAUS-IND
「母は私を起こして、学校に行かせた」

- (305) *p^h=əmk* *oz-r* *n=aχ* *ʃkola=roχ* *vi-ku-t*.
REFL=mother get.up-CVB.3SG 1SG=CAUSEE school=DAT go-CAUS-IND
「母は起きて、私を学校に行かせた」

使役構文において、例 (304) のように従属節の動詞が被使役者の後に来る場合は、「起きる」の行為者は被使役者の「私」になるが、例 (305) のように従属節の動詞が被使役者の前に来る場合は、「起きる」の行為者は主節の主語である「母」となる。2つの例文とも節同士が等位関係にあるという点では同じであるが、文の意味は大きく異なっている。

4.4. 連体節

ニヴフ語の連体節は、原則として主要部名詞句の前に置かれる。関係詞 (relativizer) が用いられることはないが、連体節の動詞は連体形接尾辞 (-*ø* ~ -*ŋ*) で標示され、人称や格が標示されることはない。節の項を主要部とする連体節を形成する際には、いわゆる「ギャップ戦略」 'gap strategy' が用いられる (Keenan 1985)。

主語、目的語、斜格名詞項を連体節の主要部にすることは可能であるが、所有者は不可能である。さらに、連体節の項とはみなせない名詞句が主要部に來ることも可能である。本稿では、寺村 (1984) の用語を借りて、前者の場合を「内の関係」、後者の場合を「外の関係」と呼ぶことにする⁵³。

4.4.1. 内の関係の連体節

上記で述べたように、内の関係の連体節は、基底の連体節⁵⁴に修飾を受ける主要部名詞句と同一指示の名詞句を含むものである (連体節は [] で示す)。

(306) 丹菊・パクリナ (2008: 18)

[*təŋank, la er^hq p^hi*] *niv=yun*
long.time.ago Amur side dwell human=PL
「昔、アムール地方に住んでいた人たち」 [主語]

上記の例は、基底の連体節の主語が関係節化されている例であるが、表層の連体節で主語の位置は「ギャップ」で標示される。主語だけではなく、直接目的語や斜格項の名詞句も連体節化が可能である。以下にそれぞれの例を示す。

(307) 丹菊・パクリナ (2008: 21)

[*axr^h=ciŋ itə≠qavr-ŋ*] [*pil-kar*] *nivŋ*
when=even see≠not-PTCP big-AUG human
「それまで見たことのない、とても大きい人だった」 [直接目的語]

⁵³ Shimoji (2008) は、このような連体節を「関係節化」されたと言うのは適切ではないとして、'simple attribution' と呼んでいる。

⁵⁴ 連体節化する前の、連体節の主要部名詞を含む節のことをここでは「基底の連体節」と呼ぶことにする。

(308) 丹菊・パクリナ (2008: 13)

ni mæckə-tata [nanχ-kun iv] taf
I very.young-CVB elder.sister-PL live house

「私が子供の時、姉たちが住んでいた家だ」[斜格名詞句 (場所)]

(309) 丹菊・パクリナ (2014: 40)

[cʰo maɪ] caqo
fish cut.fish knife

「魚を切るナイフ」[斜格名詞句 (道具)]

(310) *ni [pʰi luxtu-t pʰrə] an hujvu-t.*

I oneself move-CVB.1SG come year remember-IND

「私は自分が引っ越ししてきた年を覚えている」[斜格名詞句 (時)]

従属節と主節が同主語である場合は、従属節の主語は再帰代名詞の *pʰi* で標示される。Keenan and Comrie (1977) は、連体節化の可能性 (relativizability) に着目した類型論の研究であるが、そこでは次に示す接近可能性の階層が提案されている。これは、ある言語で斜格項の名詞句が連体節化できるのであれば、上位の階層に位置する主語、直接目的語、間接目的語も連体節化できるというものである。

(311) Accessibility Hierarchy (AH; Keenan and Comrie 1977: 66)

SU > DO > IO > OBL > GEN > OCOMP⁵⁵

ニヴフ語東サハリン方言においては、間接目的語と所有者の関係節化の例は得られていないが、アムール方言の文法書である Nedjalkov and Otaina (2013) には、間接目的語の連体節化がみられる。

⁵⁵ SU = 'subject', DO = 'direct object', IO = 'indirect object', OBL = 'major oblique case NP', GEN = 'genitive' (or 'possessor'), OCOMP = 'object of comparison'.

(312) 間接目的語の関係節化 (Nedjalkov and Otaina 2013: 273)

a. *ōla nivx=doχ it-c.*

child man=DAT say-IND

「子供が男に言った」

b. [*ōla e=rχ it*] *nivx p^hu-dⁱ.*

child 3SG=DAT say man go.out-IND

「子供が言った人が出ていった (lit. 子供が彼に言った人が出ていった)」

Nedjalkov and Otaina (2013: 273) は、斜格目的語 (oblique object) が関係節化される場合は、連体節内に代名詞の要素が現れるとしており、主語や直接目的語の連体節とは異なる手法 (代名詞保持) が用いられるという。

さらに、道具を表す状況語を関係節化する際には、他動詞の *iyr-/-kir-/-xir* 「使う」の自立形 *iyr-* の副動詞形を用いなければならないという⁵⁶ (ibid., p. 274)。

(313) Nedjalkov and Otaina (2013: 274-5)

a. *ni mu=yir ey-dⁱ.*

I boat=INS return-IND

「私は船で戻ってきた」

b. **ni ey-∅ mu....*

c. [*ni iyr-t ey*] *mu hoz-dⁱ.*

I use-CVB.1SG return boat sink-IND

「私が乗って (lit. 使って) 戻ってきた船が沈んだ」

Nedjalkov and Otaina (2013) は、例 (313b) が意図した道具の意味に解釈できない (言い換えれば、ギャップストラテジーが使えない) のは、以下に示す派生の連鎖に関わっているとしている。

⁵⁶ Panfilov (1974: 83) によれば、ニヴフ語の具格はこの動詞に由来するという。

(316) Andrews (2007: 210)

a. ano yasui konpyuutaa
that cheap computer

b. *yasui ano konpyuutaa
cheap that computer
「あの安いコンピューター」

(317) Andrews (2007: 210)

a. [boku ga sonkeisite iru] kono hito
I NOM respecting be this person

b. kono [boku ga sonkeisite iru] hito
this I NOM respecting be person
「この僕が尊敬している人」

これに対し、ニヴフ語においては、連体節と指示語が共起する場合、[指示語—連体節—主要部] の順序を取るのが普通である。

(318) 丹菊・パクリナ (2014: 28)

hu⁵⁷ [p^hʰə] nivŋ
that come human
「あの来た人」

4. 4. 2. 外の関係の連体節

ニヴフ語では、いわゆる「外の関係」の連体修飾も可能である。主要部名詞は、*tʰəlkur^h*「昔話」、*k^her^h*「話」、*aw*「声」が確認された。以下に例をあげる。

⁵⁷ 指示代名詞は、「指示語根+直説法/名詞化 *-t =nt*」からなっており、連体修飾に用いられる場合は、連体形接尾辞 *-ŋ* を取ることがあるということに注意する必要がある。ただし、連体形と名詞化由来の直説法接尾辞 *-t ~ -nt* 以外の動詞接尾辞を取ることはできない。

(319) 丹菊・パクリナ (2008: 37)

[*k^her^h* *p^hur-tata* *mu-ŋ*] *t^həlkur^h* *p^hur-i-t=ra*
story tell-CVB dead-PTCP folklore tell-FUT-IND-FOC
「(ある人が) 話をするうちに死んでしまった昔話をします」

(320) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

ni *naŋ*, [*p^hi* *vi-ŋ*] *k^her^h* *p^hur-n...*
I now oneself go-PTCP story tell-CVB.1SG
「私は今から、自分が行った (時の) 話をして…」

(321) 丹菊・パクリナ (2014: 40)

[*hu-ŋ* *p^holay-ŋ*] *aw* *latn-t*
that-PTCP shout-PTCP voice hear-IND
「あの、叫ぶ声が聞こえた」

ニヴフ語における外の関係の連体節が示す意味内容は、一般に外の関係の連体修飾が被修飾名詞の内容に関わるものであると述べている寺村 (1984: 207) の指摘に合致している。

4.5. 補文節

Gruzdeva (1998: 49) は、補文節 (complement sentences) の主語が主節と同主語なのか異主語なのかという基準を用いて、補文節を二つのタイプに分けている。まず、二つのタイプとも主節の主要部は、典型的にモーダル (modal) 動詞・局面 (phasal) 動詞・認識 (cognition) 動詞・発話 (utterance) 動詞の直説法の形をとっている。

さらに、同主語タイプの場合、補文節の主要部は直説法の定形動詞⁵⁸の他に、副動詞 *-r / -t / -n* でも標示され得ると述べている (ibid.; 以下、補文節は [] で示す)。

(322) Gruzdeva (1998: 49)

r^hajk [*c^ho ni-d*] *esqa-d*.
woman fish eat-NMLZ do.not.like-IND
「その女は魚を食べるのが嫌いだ」

(323) Gruzdeva (1998: 49)⁵⁹

ac^him [*qo-r^h*] *tvi-d*.
grandmother be.ill-CVB.3SG stop-IND
「おばあさんは病気が治った (lit. おばあさんは痛いことが終わった)」

それに対し、異主語の場合は、補文節の主要部にも定形動詞が現れ、主節の前に置かれることも後ろに置かれることもあると述べている。

(324) Gruzdeva (1998: 49)

[*parf n=aqi*] *p^hr^hə-i-d*] *ni jajm-d*.
evening 1SG=elder.brother come-FUT-NMLZ I know-IND
「私は夕方に兄が来るのを知っている」

⁵⁸ 以下、直説法の定型動詞 (*-t ~ -nt*) が補文節として機能している場合は、名詞化 NMLZ のグロスで表す。

⁵⁹ Gruzdeva (1998: 49) は、この例を補文 (complement sentences) として分析しているが、本稿では「副動詞+補助動詞」と分析している (3.3.3.2.1. 節を参照)。

(325) Gruzdeva (1998: 49)

n=nanx mə-d [eylŋ qavjo-d].
1SG=elder.sister hear-IND child cry-NMLZ

「私の姉は子供が泣くのを聞いた」

Mattissen (2003: 152) は、認識の動詞・感情の動詞・義務のモダリティーの動詞・知覚の動詞は補文節をとるとし、二つの例外を除き、語順や格標示の面で主節と変わりはないと述べている。

例外の一つ目は、主節の主語・主題と同一指示である補文節の参与者は、再帰代名詞（または再帰接語⁶⁰）で標示されるということである。二つ目は、補文節の動詞は、直説法の動詞形をとり、主節の述語と複合体を形成する際には数・格・焦点が標示されることはないということである。

(326) Mattissen (2003: 152)

atik [p^{hi} ye bos nok-nə-dⁱ] xe-dⁱ.
grandmother oneself buy cloth thin-FUT-NMLZ take.for-IND

「おばあさんは自分が買った布が薄いと思った。」

Mattissen (2003: 153) は補文節をとるいくつかのモーダル動詞をあげている。

(327) 補文節をとるモーダル動詞 (Mattissen 2003: 153)

jəjmdⁱ 「知っている」 *jəyidⁱ* 「したくない」
jəyzudⁱ 「知らない」 *jalidⁱ* 「中断する／あきらめる」
jaxndⁱ 「したい」

(328) Panfilov (1965: 154)

c^{hi} napa [ur-gur k^{herqo-dⁱ]} *əyzu-dⁱ=ra*
you.SG still be.good-ADV.LZ.2SG ice.fish-NMLZ not.know-IND=FOC

「あなたは、まだ上手く氷釣りするの（やり方）を知らないのだ」

⁶⁰ Mattissen (2003) は、接頭辞 (prefix) とみなしている。

さらに、*kʰes*「話」や *cau*「音」のようなコミュニケーション・認識の名詞はその内容を特定する補文節 (nominal complement clauses⁶¹) をとることがあるとし、次の例をあげている。

(329) Mattissen (2003: 239)

v=atax=xu [*pʰ=ola* *mu-jnə-dʰ*] *xes* *heɣ-t*
3SG=father=PL REFL=child die-INT-NMLZ news hear-CVB.3PL
「彼女のお父さんたちは、子供が病気であるという話を聞いて、」

上記の例において、補文節の述語 *mu-*「死ぬ」は、連体形ではない直説法／名詞化の接尾辞を取っており、数・格・焦点が標示されることはない (Mattissen 2003: 238)。

ニヴフ語東サハリン方言の補文節は、形態・統語的な観点から、特別な補文化標識を持たない直説法の動詞形式 (*-t ~ -nt*) による構文と *ha-r/ha-t* (*ha-*「そうである／そうする」+ 副動詞接尾辞) のような動詞を用いる構文とに分けられる。

-t ~ -nt による補文節の場合は、自動詞と他動詞のどちらも補文節をとることができる。他動詞の場合、モーダル *jayzu-*「知らない／できない」、*jajm-*「知っている／できる」、感情 *ezmu-*「好む」、知覚 *intə-*「見る」、*mə-*「聞く」、知識 *jujvu-*「覚えている」、願望 *jaxni-*「～したい」などの動詞が、自動詞に関しては、*amtrer-*「間に合わない／遅れる」という動詞が現れる。「*ha-*+副動詞」の場合は、発話動詞の *it-*「言う」と一緒に用いられる。

以下では、それぞれのタイプの補文節について順に見ていく。

4.5.1. *-t ~ -nt* 名詞化による補文節

東サハリン方言における名詞化接尾辞 *-t ~ -nt* による補文節には、テンス・モダリティーの動詞カテゴリーと数の名詞カテゴリーが標示され得る (例 330-332)。さらに、不確実性を表す疑問の焦点マーカーが標示されることがある (例 333)。

⁶¹ Noonan (2007: 147) は名詞補文節 (noun complementation) について、‘the structure of noun complements differs from other instances of complementation only in that the CTP (complement taking predicate) is a noun and not a verb or an adjective.’ と述べている。

- (330) *jaŋ nawx [tʰatŋ iŋ-i-t] amtrer-t.*
 s/he today morning eat-FUT-NMLZ be.late-IND
 「彼は今日、朝ごはんを食べるのに間に合わなかった」
- (331) *ŋ=ətək... qo-ŋa [iŋ-inə-t] aku-r kʰər-mu-t.*
 1SG=father become.ill-CVB eat-INT-NMLZ refuse-CVB.3SG starve-die-IND
 「私の父は病気になったとき、食べようとしなくて、飢えて死んでしまった」
- (332) *ni [cʰi it-t=ŋun] hujvu-t.*
 I you.SG say-NMLZ=PL remember-IND
 「私はあなたが言ったことを覚えている」
- (333) [*jaŋ morʰqa-t=lu*] (*j*)*ayzu-t.*⁶²
 s/he be.alive-NMLZ=Q not.know-IND
 「(私は) 彼が生きているか (どうか) 分からない」

下記の例のように、格をとっている例も見られる⁶³。

- (334) 丹菊・パクリナ (2008: 44)
tu ni kʰeraj-t=yir
 this I tell-NMLZ=INS
 「この、私が話したことで」

一方で先行研究 (Gruzdeva 1998, Nedjalkov and Otaina 2013) で指摘されていた局面動詞の場合は、東サハリン方言では動詞語幹+補助動詞で表される例が得られている。

- (335) *jaŋ tu pityəŋ juru#tʰvi-t.*
 s/he this book read-finish-IND
 「彼はこの本を読み終えた」

⁶² *jayzu-* ~ *ayzu-* という形の間で揺れが見られる。

⁶³ アムール方言について述べている Nedjalkov and Otaina (2013) にも、具格をとっている例がみられる。

4.5.2. 副動詞+「言う」タイプ

ニヴフ語には、補文節を標示する特別なマーカーはないが、動詞 *ha-*「*そうである／そうする*」に副動詞接尾辞 *-r/-t* が付いた形式が発話動詞 *it-*「*言う*」とともに、引用のマーカーとして用いられることがある。この場合は、補文節と上位節の主語は同一指示である。さらに、*ha-r / -t* と *it-* は一つのアクセント単位を形成する傾向がある。この補文節の述語は、テンス・アスペクト・数・焦点のマーカーをとることができる (例 337)。一方で、例 (338) に示すように、「*A* は *B* と*言う／と呼ばれる*」という構文に用いられることもある。

(336) *p^h=əmk=roχ* *it-t*.

REFL=mother=DAT say-IND

「自分の母に言った」

(337) [*tur^h=pər^hk* *ni-t* *ha-t=yun=ta*] *ha-t* *it-t*

meat=only eat-CVB.3PL do.so-IND=PL=FOC do.so-CVB.3PL say-CVB.3PL

「(友達は) 肉だけを食べているよと言って、」

(338) 丹菊・パクリナ (2008: 26)

[*hut* *yeɲiyv* *taf*] *ha-t* *it-t*.

that *yeɲiyv* house do.so-CVB.1PL say-IND

「それは「ゲニヴンの家」と言う」

4.6. 副詞節

ニヴフ語における副詞節の形成には、副動詞接尾辞が用いられるが、以下に示すように、主語の人称と数に一致を示すものとそうではないものに分けられ、副詞節と主節の出来事の時間的な関係を表す接尾辞が最も多い⁶⁴。

(339) 主な副動詞接尾辞

人称標示	等位	<i>-ra / -ta / -na</i>
	先行	<i>-ror / -tot / -non</i>
	継起	<i>-r / -t / -n</i>
時	先行	<i>-pa, -ŋa ~ -ŋə, -vul ~ -ful, -vuye</i>
	同時	<i>-ivo, -tata, -bra</i>
	後行	<i>-anke</i>
理由		<i>-fke, -lax</i>
目的		<i>-toχ ~ -roχ</i>
条件		<i>-vaj</i>
譲歩		<i>-kisk, -vajnapə</i>

以下、本節では上記の (339) の順に従って、人称標示副動詞、時、理由、目的、条件、譲歩の順に副動詞の機能について記述していく。

4.6.1. 人称標示副動詞

人称標示副動詞は、3つの系列からなっており、不完全ではあるが主語の人称と数に一致を示す。

⁶⁴ Nedjalkov (1995: 110) には 25 種類の副動詞接尾辞があるという記述が見られる。

(340) 人称標示副動詞

	FUT ⁶⁵	NFUT
1SG, 1/2/3PL	n 系列 (-na, -non, -n)	t 系列 (-ta, -tot, -t)
2/3SG	r 系列 (-ra, -ror, -r)	

等位副動詞の *-ra* / *-ta* / *-na* は、節の等位接続に用いられる。先行副動詞の *-ror* / *-tot* / *-non* は、従属節の出来事が主節のそれより、時間的に先に起こることを表す。

(341) 丹菊・パクリナ (2008: 34)

hut=yir^h ɲ=zalqo-ror hut ye-r ɲ-ku-ror
 that=INS 1SG=deceive-CVB.2SG that take-CVB.2SG eat-CAUS-CVB.2SG
 「それ（食べ物）で俺をだましてから、それをとらせて食べさせてから」

継起副動詞の *-r* / *-t* / *-n* は、主に物語的な連鎖に用いられることが多く、様態・理由・原因など主節との様々な関係を表す機能を持つ。

(342) *lesles ɲa xu-r to-r p^hrə-t.*
 many animal kill-CVB.3SG hold-CVB.3SG come-IND
 「たくさんの動物を殺して持ってきた」

(343) *ɲi namr^h lestnic=ux kuc-t tamk soɲo-t.*
 I yesterday stair=LOC fall-CVB.1SG hand break-IND
 「私は昨日階段で転んで、ケガをしてしまった」

4.6.2. 時

時の副詞節で最も多く用いられるのは、副動詞接尾辞 *-ɲa* である。*-ɲa* 副詞節は、文脈によって、理由や原因、条件の意味に解釈されることもある。

⁶⁵ *-na*, *-non*, *-n* は、アムール方言には存在しない形式である。

(344) *hut... uxmu-t nana t^hvi-ŋa mayazin=yun*
 that fight-CVB.3PL just finish-CVB store=PL
nud=ziŋ sik kavv-r̄kar-r maŋla-t=yun=vər^hk...

what=also all not.exist-PFV-CVB.3SG be.expensive-NMLZ=PL=only

「それ… 戦争をして、ちょうど終わったときは、お店もなにも全部なくなってしまつて、高いものばかり…」

-*vul* ~ *ful* 副詞節は、その状態に達した時、または主節動詞より先に起こる行為を表す (Otaina 1978: 88)。

(345) *rənək=roχ vi-vul hu-ŋ hontq ye-t*
 market-DAT go-CVB that-PTCP bag buy-IND

「(私は) 市場に行つてそのカバンを買つた」

同時性を表す場合には、副動詞接尾辞 *-ivo* が用いられる。

(346) *rənək=roχ vi-ivo ni hu-ŋ hontq ye-t*
 market-DAT go-CVB I that-PTCP bag buy-IND

「市場へ行く途中にそのカバンを買つた」

-ivo 節は日本語の「～しながら」よりも、「～する途中」「～になるにつれて」の意味に近い。*-tata* 節も同時性を表すが、動詞が表す出来事や性質が現れている期間、「～する間」「～であるうちに」の意味を表す。

(347) 丹菊・パクリナ (2008: 14)

ŋi mækə-tata t^həlkur^h t^hawt k^heraj-kaj napə
 1SG little-CVB folklore somebody tell-CVB yet
vi-t mə-t mə-t ha-t
 go-CVB.1SG listen-CVB.1SG listen-CVB.1SG do.so-IND

「私が小さかつた時には、誰かが昔話を語るといつも行つて聞いていた」

主節の出来事に後行する *-anke* 節については、先行研究 (Gruzdeva 1998, Mattissen 2003) は副動詞接尾辞とみなしているが、他とは違って、連体形接尾辞が語幹との間で見られることがあるなど、形態論的に特殊である。

(348) Gruzdeva (1998: 50)⁶⁶

um-inə-ŋ-anke *ur-gur* *kʰəmlə-ror* *it-ja*
 be.angry-INT-PTCP-CVB well-ADVLZ.2SG think-CVB.2SG say-IMP.2SG

「怒ろうとする前によく考えてから言いなさい」

東サハリン方言から得られた例は、上記の 1 例のみであり、残念ながらこれ以上形態論的なステータスを判断するのは困難である。

4.6.3. 理由

理由の副詞節には、*-fke* と *-lax* 節が用いられる。

(349) *namrʰ* *coŋrʰ* *qo-fke* *ni* *eqorʰ* *poz-t* *qʰo-t*.
 yesterday head sore-CVB I quickly lie-CVB.1SG sleep-IND

「昨日は頭が痛くて、早く横になって寝ました」

(350) (昨日なぜ仕事に来なかったのかという質問に対して)

qo-lax *pʰrʰə≠qavr-t*.
 sore-CVB. come≠not-IND

「痛くて来なかった」

4.6.4. 目的

目的を表す場合は、意図・意志を表す接尾辞 *-inə* と継起副動詞の組み合わせで表現されることが多い。

⁶⁶ 形態素分析は筆者によるものである。Gruzdeva (1998) は、*-inəŋ-* をこれ以上分析していない。

(351) *hu niyvŋ pityŋ ye-jnə-r vi-t.*
 that human book take-INT-CVB.3SG go-IND
 「あの人は本を買いに行った」

(352) *kutli r^hə-jnə-r jan p^haχ r^həly-t.*
 out.side look-INT-CVB.3SG s/he window open-IND
 「彼は外が良く見えるように窓を開けた」

他に、副動詞接尾辞の *-toχ ~ -roχ* を用いて目的を表すことも可能である。

(353) *t^hatŋ iŋ-toχ vi-ku-t*
 morning eat-CVB go-CAUS-IND
 「(彼に) 朝ご飯を食べに行かせた」

4.6.5. 条件

条件の副詞節には、*-vaj* が用いられる。

(354) *pat lax kə-vaj ni hus=toχ vi-Ɂavr-i-t*
 tomorrow rain fall-CVB I there=DAT go-NEG-FUT-IND
 「明日、雨が降ったら、私はそこに行かない」

さらに、次の例のように条件節で文を終えること (いわゆる「いいさし」 *insubordination*) で願望の意味を表すことも可能である。

(355) *ni puŋa tu-vaj!*
 I bird become-CVB
 「もしも私が鳥だったらなあ！」

4.6.6. 譲歩

-*vajnapə* という形式 (「条件の副動詞」 -*vaj* + 「副詞 (～ではあっても、まだ)」 *napə*) と -*kisk* が用いられる。

- (356) *tu japlak maŋɸ-la-vajnapə nr^haksk ɲeni#qavr-t*
this apple be.expensive-PERM-CVB entirely be.sweet-not-IND
「このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない」

- (357) 丹菊・パクリナ (2008: 32)

ɲi r^hawtan-kisk p^hazr-ŋə...
I fall.into.a.trap-CVB be.careful-CVB
「私は罠に落ちても、注意深いから (死なない)…」

4.7. 疑問

東サハリン方言において、疑問の標示にはイントネーション、動詞の屈折、接語の付加という方法が用いられる。本稿では、ニヴフ語の極性疑問文と内容疑問文の形態統語的な特徴を中心に記述する。

4.7.1. 極性疑問

極性疑問文は、イントネーションを用いる方法以外に、動詞の屈折や接語の付加によっても標示され得る。イントネーションに関しては、文末が上昇するという平叙文とは明らかに異なる違いが観察できる。動詞の屈折による標示は極性疑問文にのみ見られるが、その標示は任意的なものであり、接語の付加によっても標示できる。以下に例を示す。

- (358) *cʰi* *naux* *nut=ziŋ* *nəʔqavr-ŋ* *əŋ* *iv-l?* / *iv-t=la?*
you.SG today what=also do≠not-PTCP time be-INTERR / be-IND=Q
「あなたは今日あいている時間がありますか」

動詞屈折形式は接尾辞 *-l* によって標示され、疑問接語には *=la* が用いられる。それぞれの形式の意味機能に関しては、筆者がインフォーマントに確認した結果、動詞屈折形式 *-l* と接語 *=la* の間に意味の違いはないという回答であった。

疑問文の類型論について述べている Dixon (2012: 385-389) によれば、ある言語が疑問の動詞屈折形式をもつ場合、極性疑問文には義務的である可能性が高く、極性疑問を表す唯一の方法であり得る一方で、内容疑問文では動詞屈折形式による標示が任意的である可能性が高い。ニヴフ語の場合は、極性疑問文において、動詞屈折形式による標示が義務的ではないものの、その使用が極性疑問文に偏っているという点では類型論的な流れに沿っていると言える。

質問に答えるときは、命題が真である場合は *hə/hŋ/ŋ* 「はい」を、偽である場合は *kʰawk* 「いいえ」を用いる。

- (359) *c^{hi} tamx ta-bavr-t=la?*
 you.SG tobacco drink-NEG-IND=Q
 「あなたはタバコを吸いませんか」
- hə, ni tamx ta-bavr-t.*
 yes I tobacco drink-NEG-IND
 「はい、吸いません」
- k^hawk, ni tamx ta-t.*
 no I tobacco drink-IND
 「いいえ、吸います」

接語 =*la* を疑問の焦点となる要素に付加することにより、いわゆる焦点疑問文を形成することができる。

- (360) 丹菊・パクリナ (2008: 32)
- c^{hi}=la n=zalqo-r n=ix-i-t.*
 you.SG=Q 1SG=deceive-CVB.3SG 1SG=kill-FUT-IND
 「お前が俺をだまして殺すんだろ」

接語 =*la* は、述語によっては語用論的な命令を表すこともある。

- (361) *c^{hi}n n=ro-j-t=yun=la?*
 you.PL 1SG=help-FUT-IND=PL=Q
 「手伝ってくれますか」

4.7.2. 内容疑問

東サハリン方言における主な疑問詞には、以下に示すようなものがある。

(362) ニヴフ語東サハリン方言の疑問詞

形式	意味
<i>nut</i>	何
<i>nar^h</i>	誰
<i>anko</i>	どこ
<i>t^has</i>	どこ
<i>t^hanx</i>	どこで
<i>t^hat</i>	どれ
<i>əyr^h</i>	いつ
<i>t^hajs</i>	いくら
<i>t^hamci-</i>	どうである
<i>t^hamci-ŋ</i>	[-PTCP]どんな
<i>t^hamci-r</i>	[-CVB]どのように
<i>jan-</i>	どうする
<i>jan-r</i>	[-CVB]どうして、なぜ

「どこ」を表す疑問詞には2つの形式があるが、*anko* は所在を尋ねるときに用いられるという特徴があり、*t^has* は広く様々な場所を尋ねる際に用いられるという違いがある。

(363) *pityŋ anko?*

book where

「本はどこにありますか」

(364) *c^{hi} t^has qo-t?*

you.SG where feel.a.pain-IND

「あなたはどこが痛いですか」

疑問詞は、疑問文だけではなく、不定／不特定や全否定を表す場合にも用いられる。不定／不特定の場合は疑問詞だけで表す場合もあれば、疑問詞に接語 =*lu* ~ =*lo* (4.7.3. 節を参照)などを付けて表すこともある。全否定の場合は接語 =*ciŋ* で表す。

(365) 丹菊・パクリナ (2008: 11)

nut ye-r iŋ-kar-t=lu?
 what take-CVB.3SG eat-PFV-IND=Q

「何者かが (犬を) 捕まえて食べてしまったのだろうか」

(366) *c^hin uŋyi-ŋə nar^h=pə^hk=lo. c^hin=toχ p^hr^hə-t.*

you.PL be.absent-CVB who=only=Q you.PL=DAT come-IND

「あなたたちがいないとき、誰かが来ていた」

内容疑問文は、疑問詞のみで標示されるか、さらに疑問の接語 =*ŋa* を加えて標示される。その際に疑問詞を文頭に移動させたりする必要はなく、対応する平叙文の語順でも問題なく言える。

(367) *nar^h p^haχ alyə-t?*

who window open-IND

「誰が窓を開けたの？」

(368) 丹菊・パクリナ (2008: 37)

p^h=aŋχ t^ho-r t^has=toχ vi-j-t=ŋa?

REFL=male.dog be.with-CVB.3SG where=DAT go-FUT-IND=Q

「自分のオス犬に引かれてどこへ行くのだろうか」

4.7.3. =*lu* ~ =*lo*

疑問を表す接語のうち、=*la* は極性疑問文に用いられ、=*ŋa* は内容疑問文で用いられる。もう一つ、疑問文と関連する接語に =*lu* ~ =*lo* があるが、この形式はやや特殊な振る舞いを見せる。

アムール方言にも同形の形式が存在するが、機能的には不確かさを表し、統語的には対立する意味を表す 2 つの隣り合う動詞とともに用いられる場合が多い (Panfilov 1965: 214, Nedjalkov and Otaina 2013: 125)。

一方、東サハリン方言では、多くの例が不確かさを表し、ペアで用いられている例が多い。丹菊・パクリナ (2008) で用いられている =*lu* の例を拾ってみると、計 34 例のうち 28 例がペアをなして用いられており、残りの 6 例も一方が省略されていると見なせるものである。

(369) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

p^hxə-t *vi-kar-t=yun=lu* *jan-t=yun=lu?*
 return-CVB.3PL go-PFV-IND=PL=Q what.to.do-IND=PL=Q
 「(彼らは) 戻って行ってしまったのだろうか」

上記の例は、直訳すれば「戻って行ってしまったのかどうしたのか」であり、特に聞き手に対して答えを要求しているわけではなく、命題が表す内容に対する不確かさを表している。しかしながら、以下に示す例のように各種の疑問文として働くことも可能である。

(370) *tut pityəŋ=lu slovari=lu?*

this book=Q dictionary=Q
 「これは本ですか、それとも辞書ですか？」

(371) Q: *c^hin ŋafq=xun orpot-t=yun=lu p^hr^hau-t=yun=lu?*

you.PL friend=PL work-IND=PL=Q learn-IND=PL=Q
 「あなたたちの友達は働いていますか、それとも勉強していますか」

A: *n=ŋafq=xun škola=ux p^haskam-t=yun.*

1SG=friend=PL school=LOC study-IND=PL
 「私の友達は学校で勉強しています」

例 (370) と (371) に見るように、この場合はいわゆる選択疑問文の機能を果たしていることがわかる。ただし、話者が相手に直接働きかけているという解釈も可能だが、話者が不確かさを口にして、語用論的に答えを要求しているという可能性もある。

さらに、=lu ~ =lo が従属節に用いられた場合は、間接疑問を表すことができる。上記の例 (369) (370) (371) に見るように、=lu ~ =lo は「A=lu+B=lu」という構造をなしている。この間接疑問文の特徴は「A と B」が、同じ動作の肯否 (～するかしないか)、または異なる動作や物事 (A するか B するか、A か B か) といった対立する意味がペアとなって現れる場合がほとんどである。ただし、その片方が省略される場合もある。

(372) *jaŋ mor^hqa-t=lu jaŋ-t=lu ni jaɣzu-t.*
 s/he be.alive-IND=Q how.to.be-IND=Q I not.know-IND
 「彼が生きているかどうか私は分からない」

(373) *jaŋ mor^hqa-t=lu jaɣzu-t.*
 s/he be.alive-IND=Q not.know-IND
 「彼が生きているか分からない」

語順からみると、間接疑問のペアは常に続けて現れる。

4.8. 比較

比較 (comparison) という用語は、意味論的または認知的には、2つの対象が述部のスケール上の位置に割り当てられる精神的な行為として定義される (Stassen 2013)。この定義から考えると、2つの対象が述部のスケール上に配置されるときには、違う位置に配置される場合 (すなわち、程度に差があるものの比較) と同じ位置に配置される場合 (すなわち、同程度のものの比較) とがあり得る。

4.8.1. 程度に差があるものの比較

4.8.1.1. 比較級の表現

Stassen (2013) によると、典型的な比較構文は、1つの述部と2つの名詞句 (比較基準 standard、比較対象 comparee) を含む。ニヴフ語の比較構文においては、比較基準となる名詞句に比較格 =ak を付加することによって表すのが最も一般的である。語順の点では、他の構文と同じく、述語 (多くの場合は状態動詞) が文末に来るのが普通である。

(374) *ni c^h=ak ut vil-t.*

I 2SG=COMP body be.tall-IND

「私はあなたより背が高い」

(375) *tu ker^hqŋ hut=ak pcur-t.*

this sea that=COMP be.beautiful-IND

「この海はそれより美しい」

比較基準となる名詞句が明示されていない場合は、比較の意味を鮮明にするために *er^hq* 「側、方向、地方」を用いることがある。

(376) 丹菊・パクリナ (2008: 36)

ar^hqaf er^hq calra-maŋ-t.

octopus side deceive-be.good.at-IND

「タコのほうが (キツネより) だますのがうまかった」

(377) *q^honu val er^hq smo-t.*

white color side like-IND

「白のほうが (他の色より) 好きだ」

例 (377) に関しては、比較基準に複数の候補が存在する場合、最上級の表現として解釈されることもあり得るが、ここでは比較級として扱う。

アムール方言においては、名詞化された節に比較格が付いている例も見られるが (例 378)、本稿に用いた東サハリン方言の資料には、このような例は見られなかった。

(378) Panfilov (1965: 112)

nik nuʔi təvə-dⁱ=ək ur-jo umgu
recently first enter.house-NMLZ=COMP be.good-DIM woman
mer hemar jama-dⁱ.
we.INCL old.man see-IND

「つい先ほど入ったのよりきれいな女性を私たちのおじいさんは見かけた」

さらに、Nedjalkov and Otaina (2013: 87) で指摘されていた「状態動詞+*-jo-gur/-gut*」の形式も得ることができなかった。「状態動詞の重複形」も比較の程度を表すという記述が見られるが (ibid.)、次の東サハリン方言の例 (379) を見る限り、比較を表していると解釈するのは難しいと思われる。

(379) 丹菊・パクリナ (2014: 24)

ur-ku~ur-kur hə həmci-r itə-ŋə,
be.good-CAUS~be.good-ADV LZ.3SG yes that.way-CVB.3SG see-CVB

「良く良く、そう、そのように見てみると、」

4. 8. 1. 2. 最上級の表現

最上級の表現は、*sik* 「みんな、全部」を比較基準にして表すのが一般的である。

(380) *c^{hi} tu hotŋ=ux sik=ak ut vil-t.*
 you.SG this town=LOC all=COMP body be.big-IND
 「あなたがこの町で一番 (lit. みんなより) 大きい」

Nedjalkov and Otaina (2013: 55) には、比較格の後にさらに焦点のマーカー (=ri ‘even’) が付いている例が見られる。

4.8.2. 同程度のものの比較

4.8.2.1. 動詞 *voci-*

類似性、または同一性を表すときには、動詞 *voci-* 「同じである、似ている」を用いるのが最も一般的である。その際には、比較基準となる名詞句は随伴者を示す接語 =*kin* ~ =*ŋin* 「〜と」で標示される。

(381) 丹菊・パクリナ (2008: 9)
ŋivŋ t^halkur^h hut=ŋin ara voci-nt.
 human folklore that=ASC almost be.same-IND
 「(今から話す) ニヴフの昔話はそれ (ウイルタの昔話) とほとんど同じだ」

(382) 丹菊・パクリナ (2008: 36)
ŋi=ŋin poci-r; r^hanŋq hara,
 I=ASC be.same-CVB.3SG woman and
 「私と同じく、女性で、」

比較基準に随伴者接語が付かない場合もあるが、その際の *voci-* は「〜のようだ」という意味を表す⁶⁷。

⁶⁷ 朝鮮語の *kath-* 「同じである」とニヴフ語の *voci-* 「同じである」が非常に類似したふるまいを示すことは興味深い (下記は筆者作例による、なお筆者は朝鮮語母語話者である)。

- i) ‘appa=wa kath-ta. {father=with be.same-IND} 「父と同じだ」
- ii) ‘appa kath-ta. {father be.same-IND} 「父のようだ」
- iii) namwu=ka ssuleci-l kes kath-ta. 「木が倒れそうだ」
 tree=NOM fall.down-PTCP thing be.same-IND

(383) *jaŋ matʷas voci-t.*

s/he old.woman be.same-IND

「彼女はおばあちゃんのようにだ (おばあちゃんに似ている)」

(384) *jaŋ Kleopatra voci-r pcur-t.*

s/he Cleopatra be.same-CVB.3SG be.beautiful-IND

「彼女はクレオパトラのように美しい。」

さらに、*voci-* は次の例 (385) に示すように、接辞 *-inə* を含む語幹に付加されて、一種のモーダルの意味機能を果たすこともある⁶⁸。

(385) *hu c^hʒar^h nav=ux kuc-inə-voci-t.*

that tree now=LOC fall.down-INT-same-IND

「その木は今にも倒れそうだ」

4.8.2.2. *-inəftoχ*

この形式は、意図や起動相を表す接尾辞 *-inə* に場所名詞派生接尾辞 *-f* と与格 *=toχ* が結合したものである。アムール方言にも *-nəftoχ* という類似した形式⁶⁹ があり、Nedjalkov and Otaina (2013: 346) はこの形式を「限界－目的副動詞 *terminative-purposive converb*」と呼んでおり、「～するために」という意味を表すとしている。

次の例 (386) は、東サハリン方言の例であるが、「死ぬために」という意味に解釈するのは不自然である。

⁶⁸ この場合、*voci-* はもはやモーダルな意味を表す接辞に近い程度まで文法化しているとみることが出来る。

⁶⁹ 東サハリン方言の *-inəftoχ* とアムール方言の *-nəftoχ* に見られる形態的なずれは、時制を表す形式の違いに由来する。アムール方言の未来時制は *-nə* で標示され、東サハリン方言の未来時制は *-i* で標示される。東サハリン方言がより古い形を保持しているとされており、このことから考えるとアムール方言の *-nə* のほうがより新しい時制体系であると推測できる。となると、両方言に存在する *-nə* の本来の機能は何だったのかという問題が残る。

(386) 丹菊・パクリナ (2008: 9)

ax mu-jnəftoχ la maŋq-t.

already die-LMT wind be.strong-IND

「死んでしまいそうなほど風が強かった」

少なくとも、アムール方言との間で何らかの機能の差が存在すると考えられるが、本稿で用いた資料から見出された *-inəftoχ* の例は数が少なかったため、この形式の機能を十分に明らかにすることは今後の課題とする。

第5章 結論

本稿では、ニヴフ語東サハリン方言の音韻論、形態論、統語論について記述を行った。この章では各章の内容を簡単にまとめ、今後の課題について述べる。

第1章では、本稿の内容を理解するうえで必要であると思われる背景知識を提供している。具体的には、ニヴフの人たちの居住地域や人口、言語の系統、社会言語学的状況、東サハリン方言の文法概説などを述べた。

第2章では、音韻論について記述を行っている。ニヴフ語東サハリン方言には6の母音と28の子音がある。音節構造は非常に複雑であり、音節の頭では最大2つ、音節末では最大3つの子音連続が可能である。語根末において、母音が現れる場合とそうではない場合で揺れが見られることがあるが、それは語中音消失 (vowel syncope) という音変化が起きている途中であるためであり、ニヴフ語の音韻論の記述を複雑にする一つの原因になっている。強勢に関しては、原則として第一音節に落ちる。さらに、有声化や内破音化、頭子音交替が起こる音韻的環境と形態統語的環境についてもこの章で記述した。

第3章の形態論では、品詞ごとの形態的な特徴について述べている。名詞に文法的な性・数のカテゴリーはなく、複数の概念は接語を用いて標示する。文末の直説法の動詞は、(代)名詞に付加される複数標識と同じ形式をとることがあるが、その際には主語が複数であることを表す。さらに、目的語に付加された複数標識が主語の複数性を表すことがあるということも新たに指摘した。ニヴフ語は主格-対格型の格標示体系を持つ。主格、対格、属格の形式上の区別はなく、これらの統語関係は主要部の規則的な頭子音交替によって示される。与格は稀に連続して現れることがあり、これはこの言語の膠着的な性格を示すとともに、与格の接語としての性格を反映しているといえる。1人称複数の人称代名詞には包括形と除外形の区別があり、1/2/3人称単数と再帰代名詞の場合は自由形と拘束形(接語)が存在する。

動詞は、いくつかのムードの形(直説法、命令法、疑問法)と様々な非定形の形(連体、副動詞)で屈折する。命令と一部の副動詞(先行副動詞、継起副動詞、等位副動詞)には、主語の人称と数で一致を示すものがある。ニヴフ語は未来と非未来で対立しており、東サハリン方言においては、未来は *-i~j* で標示されるが、非未来は明示的な形式を持たない。さらに、副詞節に未来の接尾辞が現れることはなく、主節以外では、もっぱら連体修飾節と補文節にのみ見られる。ニヴフ語におけるアスペクトの標示には、[1] 語幹派生接尾辞を用いる方法、[2] 補助動詞を用いる方法、[3] 動詞の重複による方法が用いられる。特に、意図

や推測を表す接尾辞 *-ina* が「起動」のアスペク的な意味に解釈される際には、動詞が表す状況の認識時点が意味の実現に大きく関わっているということを指摘した。

ニヅフ語の使役構文において、従属節と主節とでは、有情物の被使役者がとる格に大きな偏りがあることを指摘し、使役構文が表す意味の広さについて述べた。さらに、東サハリン方言の動詞複合体について、複合体を構成する接尾辞・接語・補助動詞の承接順序と機能についても記述を行い、統語的観点から先行研究の扱いとは異なった見方を提示した。

第4章の統語論では、名詞句の構造、複他動詞節、等位節、連体節、補文節、副詞節、疑問と比較表現について記述を行った。自動詞主語を S(subject)、他動詞主語 A(agent)、他動詞目的語 P(patient)、複他動詞の2つの目的語を T(theme) / R(ecipient)、述語を V(erb) とした場合、ニヅフ語の基本語順は SV/APV/ATRV ということができ、かなり厳格な主要部後置型のパターンを示す。名詞句においては主要部後置型の語順が義務的であり、語順を入れ替えることはできない。節においても上記の基本語順をとる傾向を示すが、目的語を節の頭に置くこともできる。ただし、その際には自立形の動詞を用いなければならない。

この章における複他動詞や連体節、疑問文などの文法的諸問題を記述するに際しては、近年の類型論的な知見や、通言語的な概念を踏まえ、近隣の言語との対照も視野に入れつつ、ニヅフ語の特徴を明らかにしていくことを目指した。特に、アムール方言において、‘comitative’, ‘correlative-associative’ として先行研究が扱っていた形式については、東サハリン方言では、「A=ASC B」「A=ASC B=ASC」構造においては、A+B が主語となり、「AB=ASC」構造においては、A のみが主語の扱いを受けることを、副動詞の人称と数による一致から判断できるという事実も新たに指摘した。

比較構文において、同程度のものの比較に用いられる動詞 *voci-*「同じだ／似ている」の機能を文法化の観点から記述した。例えば、本来の意味「同じだ／似ている」で用いられる場合は、比較の対象となる名詞が随伴者を表す接語で標示されるが、比較の対象となる名詞の直後に動詞が来る場合は「～のようだ」の意味に解釈される。さらに、意図・推測を表す接辞 *-ina* を含む語幹に付加されて、一種のモーダルの意味機能を果たすことも示した。

本稿は、いわゆる消滅の危機に瀕している少数言語のひとつであるニヅフ語の「東サハリン方言」を記述の対象としている。他方言に比べて、研究が遅れていると言われていた中で、この方言の文法に関する詳しい記述を残しておくことは、大きな意義があるものと考えている。

しかしながら、この研究には記述の不十分などがあるところがある。例えば、同言語の方言間に見られる音韻・形態・統語的な違いに関しては、あまり触れることができなかった。さらに、動詞の自他の問題については、ほとんど触れておらず、本研究の一番大きな問題点となって

いる。この問題は、動詞が取る項とのあいだに見られる頭子音交替現象と絡めて整理しなければならない。近隣の諸言語（ツングース諸語、朝鮮語、日本語など）との対照研究も、ニヴフ語の特徴を明らかにするために、今後やっていく必要がある。これらの問題に関しては、今後の課題とする。

付録1 テキスト

あるニヴフの家族話

語り手：ヴァレンティナー・サチグン

採録：2011年2月@ノグリキ

təŋank *jin* *Luŋ* *vo* *fi-t=yun*
long.time.ago we.EXCL Luŋ town live-IND=PL
昔、私たちは Luŋ 村に住んでいた。

Luŋ *vo=ux* *enta* *nanax* *jin* *nanx*
Luŋ town=LOC other elder.sister we.EXCL elder.sister
Luŋ 村で、ほかの姉さんか、私たちの姉さんが

Təjji *vo=ux* *pant-ra*
Təjji town=LOC be.born-CVB.3SG
Təjji 村で生まれて

caj *nenŋ* *Chiraka* *vo=ux* *pant-ra*
again one.person Chiraka town=LOC born-CVB.3SG
また一人は Chiraka 村で生まれて

ni *əy* *vo=ux* *pant-ta*
I black town=LOC be.born-CVB.1SG
私は əy 村で生まれた。

jin *asq* *enta* *asq=ak* (*umo lu*)
we.EXCL younger.sibling other youngest.sibling=COMP
私たちの妹、ほかの妹より

r^hanq... *r^hanqexlɥ* *ek* *Milk* *vo=ux* *pant-r*
 woman girl there Milk town=LOC be.born-CVB.3SG
 女…女の子があそこ…Milk 村で生まれて

ɲabil=ux *Milk* *vo* *ɣau-f=ux* *pant-ra* *ha-nt.*
 ɲabil=LOC Milk town call-NMLZ=LOC be.born-CVB.3SG do.so-IND
 ɲabil で、Milk 村と呼ばれるところで生まれた。

ɲin *ətɕ* *c^ho* *ɲanyə-ra* *ɲa* *ɲanyə-ra* *ha-nt.*
 we.EXCL father fish look.for-CVB.3SG animal look.for-CVB.3SG do.so-IND
 私たちの父は魚を獲ったり、獣を獲ったりした。

pil-kar *ɲo* *r^hə* *r^həlyə-jo-bar-r* *tolɲa* *rur^h...*
 big-AUG shed door open-DIM-PFV-CVB.3SG marine.animal meat
 とても大きい蔵のドアを開けて、海獣の肉…

tur^h *ɲa=yir* *c^har-r* *hut* *r^hətu-fke* *hu* *r^hə=ri*
 meat animal-INS full-CVB.3SG that.thing close-CVB that door=even
 海獣の肉でいっぱいになったもの、それを閉めようとしてもそのドアさえ

r^həc-qavr-r *r^həc-rer-t.*
 close-NEG-CVB.3SG close-cannot-IND
 閉まらなくて、閉められなかった。

t^hulf=toχ *humci-t* *huci-t*
 winter=DAT like.that-CVB.3PL put-CVB.3PL
 冬にそのようにとっておいて

huci-t *hə* *t^hulf* *hat* *t^hulvaj-ɲa* *hun=x*
 put-IND yes winter then become.winter-cvb there=LOC
 冬になったときにそこから

civaj-f=ux *həmci-t* *huci-tot* *t^hulvaj-ŋa*
 become.fall-NMLZ=LOC like.that-CVB.3PL put-CVB.3PL become.winter-cvb
 秋からそのようにとっておいてから、冬のときに

hut *ir^hlə-t* *yuzi-t* *taf* *mi=roχ* *r^horuy-t*
 that.thing pull-CVB.3PL bring.out-CVB.3PL house inside=DAT bring-CVB.3PL
 それを持ち出して、家の中に持ってきて

soxo-t *iz-t* *qan=kun* *ar^h-ta* *p^hi* *ijⁿ-ta* *ha-t.*
 melt-CVB.3PL cut-CVB.3PL dog=PL feed-CVB.3pl oneself eat-CVB.3PL do.so-IND
 溶かして、切って、犬たちに食わせたり、自分たちで食べたりした。

tolŋa=yir.
 marine.animal=INS
 海獣で。

ətk *ətk* (*euĕ*) *k^heq* *ŋanyə-ra* *oχrof* *ŋanyə-ra*
 father father fox look.for-CVB.3SG sable look.for-CVB.3SG
 父はキツネをさがしたり、クロテンをさがしたり、

hu-ŋ *k^huzə^{r^h}=toxo* *ŋa=yun* *hut* *les* *jin*
 that-PTCP wolverine=TERM animal=PL that.one many we.EXCL
 そのクズリまで、動物たち、それをたくさん

jin *ətk* *ŋa* *ŋanyə-ŋa* *t^hac...* *r^həc...* *t^hat-nt.*
 we.EXCL father animal look.for-when close? close ?-IND
 私たちの父は動物をさがすときに

pajnr^hak *ŋa* *xu-r*
 always animal kill-CVB.3SG
 いつも動物を殺して

les les ŋa xu-r r^ho-r p^hrə-t.
 many many animal kill-CVB.3SG hold-CVB.3SG come-IND
 たくさんの動物を殺して持ってきた。

hatot ax uxmu-ful ləci=yun uxmu-ful
 then now fight-CVB Russian=PL fight-CVB
 それから、もうロシア人たちが戦争するときに

hu-ŋ həmci Luŋ er^hqŋ=ux
 that-PTCP like.that Luŋ direction=LOC
 その...そのような Luŋ の方から

ŋ=atk=yun=aχ p^hrə-t tuk=toχ p^hrə-ku-t.
 1SG=father=PL=CAUSEE come-CVB.3PL here=DAT come-CAUS-IND
 私の父たちを来てここに来させた。

ŋin sik luxtu-t p^hi nə=yun sik huci-t luxtu-t
 we.EXCL all move-CVB.3PL oneself thing=PL all put-CVB.3PL move-CVB.3PL
 私たちみんな引っ越して、自分たちのもの全部おいて引っ越して

p^hrə-t Nəj vo=roχ p^hrə-ŋa
 come-CVB.3PL Nəj town=DAT come-CVB
 来て、Nəj 村に来たときに

hu Nəj vo taf əki-ŋə hoβ-ra
 that Nəj town house bad-CVB cold-CVB.3SG
 その Nəj 村の家が悪かったので寒くて

ŋi hut hujvu-t hut.
 I that.thing remember-IND that.thing
 私はそれを覚えている。それを。

hu taf əki-hoko-t. məcika-lk taf haŋa
 that house bad-cold-IND small-? house then
 その家は寒かった。小さな家だったから

hoko-ra hut əki-qatŋ-nt. kʰər-ta ŋa ŋanyə-f əki-ra
 cold-CVB.3SG that.one bad-AUG-IND hungry-CVB.3PL animal look.for-NMLZ bad-CVB.3SG
 寒くて、それはとても悪かった。お腹がすいて、狩場も悪くて、

Nəi vo haŋa ɲ=ətk=aχ vi-n kalyoz=ux
 Nəj town then 1SG=father=CAUSEE go-CVB.3PL kolkhoz=LOC
 Nəj 村だから、私の父を行かせてコルホーズで

orpot-ku-jnə-ŋa ɲ=ətk ayu-r kalyoz=ux orpot-t ayu-r
 work-CAUS-INT-when 1SG=father refuse-CVB.3SG kolkhoz=LOC work-IND refuse-CVB.3SG
 働かせようとしたが、私の父はいやで、コルホーズで働くのがいやで、

həmci-r, pərʰk in-k nə-r
 like.that-CVB.3SG oneself eat-NMLZ make-CVB.3SG
 そのように、自分が食べるものを作るために、

in-k ŋa ŋanyə-r ɲin ar-ror aχ hajmə-ŋa
 eat-NMLZ animal look.for-CVB.3SG we.EXCL feed-CVB.3SG then get.old-CVB
 食べもの、動物をさがして、私たちが食べさせてから、もう年をとったので

ɲ=əmk ɲ=ətk mu-ŋa ɲ=əmk nəxukrʰ nəkrurʰk aɲi ha-nt.
 1SG=mother 1SG=father die-CVB 1sg=mother 40 4 age be.so-IND
 母は父が死んだときに、母は44才だった。

ɲ=ətk ɲ=əmk (a) ɲ=ətk mu-ful mu-t.
 1SG=father 1SG=mother 1SG=father die-CVB die-IND
 父…母…、父が死んでから死んだ。

ha-ŋə ŋax mχoqor^h caqrur^hk aŋi ha-ŋə ɲ=ət^k mu-t
 be.so-cvb 6 10 3 age be.so-cvb 1SG=father die-IND
 63才のときに私の父は死んだ。

(a) *ɲ=əm^k nəxukr^h nəkrur^hk aŋi ha-r*
 1SG=mother 40 4 age be.so-CVB.3SG
 私の母は44才だった。

p^hŋaβ r^haŋq həmci-r hunv-r
 young woman like.that-CVB.3SG live-CVB.3SG
 若い女性がそのように住んでいた。

nanaχ Palkuk eta nanaχ=aq Palguk χau-nt.
 older.sister Palkuk other older.sister=FOC Palguk call-IND
 姉…Palguk、ほかの姉はPalgukという名前だ。

k^hrejnovič əc^hx=kin ror^h orpot-ra ha-k.
 Krejnovič old.man=ASC together work-CVB.3SG be.so-NMLZ
 Krejnovičおじいさんと一緒に仕事したそのような人だ。

hu-ŋ r^haŋq jaŋ vi-r mχoqr^h ŋayur^hk aŋi ha-ŋa naf vi-r
 that-PTCP woman s/he go-CVB.3SG 10 6 age be.so-CVB now go-CVB.3SG
 その女性は、彼女は行って、16才の時に行って、

kalx... rəp zavot=ux p^hi-r aŋi
 kolkhoz... fish factory=LOC live-CVB.3SG age
 コルホーズ... 魚工場で暮らして、歳を

vəlkə-r p^he=βan mχoqr minrur^hk aŋi ha-vu-r it-r
 add-CVB.3SG REFL=FOC 10 8 age do.so-REP-CVB.3SG tell-CVB.3SG
 加えて、自分は18才だったと言って

(vot) *ha-r orpot-nt.*
do.so-CVB.3SG work-IND
そうして、働いた。

həmci-k nin (onu) ni e=kin
like.that-NMLZ we.EXCL I 3SG=ASC
そのように私たち、私は彼女と、

n=asq=yin=toχ škola=roχ noklik intinat=roχ
1SG=younger.sibling=ASC=DAT school=DAT Noglik boarding.school=DAT
私の妹に学校に、ノグリキの寄宿学校に

r^hor nin=aχ intinat fi-ku-ta.
together we.EXCL=CAUSEE internat live-CAUS-CVB.3PL
一緒に私たちを寄宿学校に住ませた。

ni noklik=ux ηamk k^hlas internat=ux
I Noglik=LOC 7 class internat=LOC
私はノグリキで、7クラス、寄宿学校で

sik hajo-t ηamk k^hlas sik hut paskəm-tot
all total-CVB.1SG 7 class all that study-CVB.1SG
全部合わせて7クラス全部、勉強してから

ha-tot mm vi-t orpot-t.
be.so-CVB.1SG INTJ go-CVB.1SG work-IND
それから、うん... 行って働いた。

tolf uci-κavr-vul c^ho sortirvaj-t c^ho
summer study-NEG-CVB fish arrange-CVB.1SG fish
夏は勉強しない時、魚の仕事をして

rəp zavot=roχ vi-t c^ho orpot-t.

fish factory=DAT go-CVB.1SG fish work-IND

魚の工場に行って魚の仕事をした。

ha-t sik p^he=rχ c^hχa zarabotaj-ŋə p^he=rχ lar^hq

be.so-CVB.1SG all REFL=DAT money earn-CVB REFL=DAT dress

そして全部自分のお金を稼いで自分に服を

ye-t lar^hq ye-ta ki ye-ta ha-nt.

buy-CVB.1SG dress buy-CVB.1SG shoes buy-CVB.1SG be.so-IND

買って、服を買ったり、靴を買ったりした。

(Aga) hut (nu) uxmu-t nana t^hvi-ŋa makazin=yun

that fight-CVB.3PL just over-CVB store=PL

それ、、、戦争をして終わった時に、店には

nut=ziŋ sik ɣavr-ɣar-r^h maŋ-la-t=yun=vər^hk ha-ŋa

what=even all no-PFTV-CVB.3SG expensive-PERM=PL=only be.so-CVB

何も全てが無く、高いものばかりだった。

ŋi həmci-r p^haskam-t tolf loŋ meqr^h

I like-CVB.? study-CVB.1SG summer month 2

私はそうやって勉強して、夏の2か月

c^ho orpot-tot hu c^hχa=yun=yir p^he=rχ ki ye-ta

fish work-CVB.1SG that money=PL=INS REFL=DAT shoes buy-CVB.1SG

魚の仕事をしてから、そのお金で自分に靴を買ったり、

lar^hq ye-ta ha-tot ŋkol=roχ cif civaj-ŋə

dress buy-CVB.1SG be.so-CVB.1SG school=DAT fall become.fall-CVB

服を買ったりしてから、学校へ秋... 秋になったとき

ʃkol=roχ vi-t caj p^haskam-t ha-t ʃi naf
school=DAT go-CVB.1SG again study-CVB.1SG do.so-CVB.1SG I now
学校へ行ってまた勉強して、私は今

nak-vul naf eʃlɣ=kun voci-Ɂavr-t.
free (?) -CVB now child=PL resemble-NEG-IND
自由で、今の子供たちのようではなかった。

ʃi aɣr^h=ciŋ urok urok propuskaj-Ɂavr-t.
I when=even lesson lesson absent-NEG-IND
私はいつも授業をサボらなかった。

aɣr^h=ciŋ kaskazi-t p^haskam-t eŋgun ʃur^hu-ʃnə-t
when=even serious-CVB.1SG study-CVB.1SG fast read-INT-CVB.1SG
いつもまじめに勉強して早く読もうとして

ʃajmə-ʃnə-t nut χawlus=kun nut raju-t
know-INT-CVB.1SG what paper=PL what write-IND
知ろうとして、何かの本、何か書いてあるもの、

hut ʃur^hu-n ʃajmə-ʃnə-t.
that read-cvb.1sg know-int-ind
それを読んで知ろうとした。

狩人の話

語り手：ヴァレンティナー サチグン

採録：2011年2月@ノグリキ

təŋank niv=kun ŋa ŋanyə-t Potχ=roχ qo-ŋa
long.time.ago people=pl animal look.for-cvb.3pl Potχ=dat move-when

昔、人たちは狩りをするために Potx に行くときに、

k^heq... osk ŋamac ŋinaq ye-t p^h=romsk p^hro-t
fox rabbit fur little take-CVB.3PL REFL=with carry(?) -CVB.3PL

キツネ…ウサギの毛皮を少しとって、一緒に持っていった。

Potχ-tux hunku-ŋa ə^hk awŋk=yun in=toχ p^hrə-t
Potχ=? stay-CVB night duck=PL they=DAT come-CVB.3PL

Potx で泊まる時、夜にカモたちが彼らのところに来て、

awŋk c^he-t q^hoju-t k^hikr=ux p^hir^hpir-t
duck cry-CVB.3PL be.annoying-CVB.3PL up=LOC fly.around-IND

カモが鳴いて騒いで、上で飛び回っていた。

in t^hu^hyr^h ici-t mirn ŋafq=xun t^hu^hyr^h ici-t hunv=ŋa
they fire light-CVB.3PL we.INCL friend=PL fire light-CVB.3PL be=CVB

彼らは火をおこして、私たちの友人たちが火をおこしているときに、

naf in k^hikr^h=ux p^hir^hpir-t awŋq=yun ha-fke p^hi
now they up=DAT fly.around-CVB.3PL duck=PL do.so-CVB oneself

彼らの上で飛び回っていて、カモたちはそのうちに

ηajrəx=kis may-t mif lur^h za-pa nivŋ mu-t
 wing=INS get.down-CVB.3PL ground ice hit-CVB people become-CVB.3PL
 翼で降りて、地面、氷をたたくと、人に変わった。

hut=yun nivŋ mu-t c^hχaror^h=kun
 that.one=PL people become-CVB.3PL C^hχaror^h=PL
 それが人に変わって、チハロシュたち

hut c^hχaror^h mu-t
 that.one C^hχaror^h become-CVB.3PL
 それがチハロシュに変わった。

haya naf hu-ŋ hu niv=kun tol niv=kun it-t
 then now that-PTCP that people=PL water people=PL say-IND
 それからその…その人たち、水の人たちが言った。

irn ηacx=kun kəl-ta ut paq-ta ha-t=yun=furu.
 they leg=PL long-CVB.3PL body short-CVB.3PL be.so-IND=PL=HS
 彼らは足が長く、体は短かったそうだ。

haya naf min ηafq=yun=toχ josot-t c^hin t^hamci-ŋ
 then now we.INCL friend=PL=DAT ask-IND you.PL what.kind.of-PTCP
 それから私たちの友人たちに訊いた。あなたたちはどんな…

p^h=vo=ux t^hamci-ŋ ηa tur^h=pə^rh^k ni-t ha-t=yun ha-t
 REFL=town=LOC what.kind.of-PTCP animal meat=only eat-CVB.3PL be.so-IND=PL so-CVB.3PL
 自分たちの村ではどんな動物の肉だけ食べているのかと

josot-ŋa min ηafq=yun it-t: nin t^həl-f=toχ
 ask-CVB we.INCL friend=PL say-IND we.EXCL far-NMLZ=DAT
 聞かれたときに、私たちの友人たちは言った。“私たちはふだん遠いところへ

ceqr-ŋ ŋa=ara tur^h=pə^hk ni-t ha-t=yun=ta'' ha-t it-t
 jump-PTCP animal=? meat=only eat-CVB.3PL be.so-IND=PL=FOC do.so-CVB.3PL say-CVB.3PL
 跳ねている動物のほとんど (?) を、肉だけを食べているのだと言って、

hu-ŋ osk ŋamac xici-t in-aχ itə-ku-t haŋa
 that-PTCP rabbit fur lift-CVB.3PL they-CAUSEE look-CAUS-IND then
 そのウサギの毛皮を持ち上げて、彼らに見せた。すると、

osk ŋamac nrə-pa hu-ŋ c^hχaror^h=kun sik tol=ux caqr-t
 rabbit fur look-CVB that-PTCP C^hχaror^h=PL all water=LOC jump-CVB.3PL
 ウサギの毛皮を見て、そのチハロシュたちの皆が水で跳ねて

p^hxə=toχ puŋa mu-t sik puŋ-t vi-ka^r-t ha-t.
 go.back=DAT bird change-CVB.3PL all fly-CVB.3PL jump-CVB.3PL do.so-IND
 戻るために鳥に変わったものがみんな飛んで行ってしまった。そうだった。

təŋank hu-ŋ osk C^hχaror^h=kun tol p^hi-qavr-t
 long.time.ago that-PTCP rabbit c^hχaror^h=PL water live-NEG-IND
 昔、そのウサギ…チハロシュたちは水辺に住んでいなかった。

min... mif... mif p^hi-t=yun=furu.
 we.INCL land land be-IND=PL=HS
 私たち…陸地…陸地に住んでいたそうさ。

haŋa naf osk=yun xu-t iŋi-ka^r-fke osk=yun vopu-tot
 then now rabbit=PL kill-CVB.3PL eat-PFTV-CVB rabbit=PL gather-CVB.3PL
 その時、ウサギたちを殺して食べてしまって、ウサギたちが集まって

hu c^hχaror^h=kun ŋay-t in tol=roχ in=aχ vi-ka^r-ku-t
 that C^hχaror^h=PL expel-CVB.3PL they water=DAT they=CAUSEE go-PFTV-CAUS-IND
 そのチハロシュたちを追い出して、水辺に彼らを追い出してしまった。

hat hāmci-t naf c^hχaror^h=kun tol osk rayrayu-t=yun
so like.that-CVB.3PL now C^hχaror^h=PL water rabbit hate-IND=PL
そして、そのようにチハロシュたちはウサギを嫌うのだ。

hu osk k^hlu-t ŋamac=ziŋ hu osk ŋamac
that rabbit scare-CVB.3PL fur=even that rabbit fur
そのウサギが怖くて、毛皮さえ、そのウサギの毛皮が

k^hlu-t=yun=furu. sik sik
scare-IND=PL=HS end end
怖いそうだ。終わり、終わり。

付録2 語彙集（ニヴフ語－日本語）

※配列は次に示すアルファベット順となっている。

a, c, e, ə, f, h, i, j, k, k^h, ɣ, l, m, n, ŋ, o, p, p^h, q, q^h, ʁ, r, r^h, s, t, t^h, u, v, w, x, ɣ, z

※動詞の場合は、直説法の形 (-t ~ -nt) で示す。

acim	祖母
af	ひげ
ajf	もし
ajyt	流れる
aki	兄
ayri	つば
alr ^h	ベリー
amamt	歩く
amtət	間に合う
amx	口
an	また
anko	どこ
anyɪ	かかと
antɣ	客
ap	年、歳
ap loŋ	12月
avavɾ ^h	服
avt	(犬が) 吠える
ara	ほとんど
arak	酒
ari	後ろ、裏
arit	後である
ar ^h pər ^h	ふた
ar ^h qi	キュウリウオ
ar ^h qi loŋ	5月

ask	間投詞 (熱いものに触れたとき)
askamt	教える
askask	蜘蛛
asq	弟、妹
atkəcx	祖父
atkut	閉める／閉まる
atkur ^h	蓋
aw	声
awt	あれ
aws	そこ
awŋk	コオリガモ
aχ	もう、すでに
azməc	男
azməcəŋlŋ	息子、男の子
azmur ^h	贈り物、プレゼント
caj	ふたたび、また
calqat	騙す
caŋr ^h	枝
caqo	小刀、ナイフ
caqrt	跳ねる、ジャンプする
caqr ^h	三つ
caqt	固い
cer ^h	枝 (?)
ciyt	踊る
ciw	音
coŋrŋamx	髪 (髪の毛)
coŋr ^h	頭
comt	向く、振り向く
comr ^h	葉
cosqt	壊れる、割れる
cozt	下痢をする

chaj	お茶
chalm	てのひら
chamŋ	鷺
chamŋ loŋ	2月
chart	いっぱいになる、満ちる
chas	時間 (<ロシア語)
chati	井戸
chax	水
chax tort	のどが渇く、水が飲みたい
chax tut	上げ潮である
chax qat	引き潮である
chet	鳴く
chi	あなた
chifc	椅子
chifchivt	湿っている
chin	あなたたち
chiŋert	苦しむ
chirt	新しい
chixchiyt	もがく
chmat	着く、訪ねる
chŋai	絵
chŋerh	草
cho	魚
choŋi	はえ (蠅)
choŋt	溶ける
choχ	血
choχt	酔う
chχa	お金
chχarh	木
chχazərh	財布
ee	間投詞

ek	あそこ
eγt	あれ
emla	耳
ems	齒
enak	他の物／人
enat	別である、違う、異なる
eɲiqart	盗む
eɲfk	花
ept	隠す
eqot	急ぐ (?)
eβɲ	子供
eβɲeβɲ	孫
eβrt	考える、思う
eβr ^h kit	汚い
eβt	速い、すばやい
erut	吐く
espət	刺す
esqat	嫌いである、~したくない
evt	持つ、つかむ、握る、捕まえる
evr ^h q	キノコ的一种 (和名: カバノアナタケ)
evr ^h q valat	黄色い
eχaɲ	牛
eχɲavt	笑う
ezmut	喜ぶ、好む、愛する
əcx	夫
əfk	早く
əkit	悪い、~しにくい
əγəγ alr ^h	ガンコウラン
əγr ^h	いつ
əγt	黒い
əγ vo	村の名前

əmk	母
əŋ	とき (時)
ər ^h k	夜
ət ^h k	父
əxmət	～したいと思う (?)
fer ^h qajt	(強く／激しく) 叩く、殴る
fet	採取する、摘む
fespezt	こする、拭く
fəskət	驚く
fətut	裂く、割る
fit	住む、いる、暮らす
fojut	(小雨が) 降る (?)
fulfult	這う
furt	言う、語る、物語る
fut	(息を) 吹く／かける、冷やす
hajmət	老いる
hamut	柔らかい
hana	間投詞 (さあ)
hapt	塩辛い、辛い
həavrt	そうしない、そうではない
hara	そして
haskut	少ない
hekaladoχ	とても、非常に
heljelt	舐める
hermaft	潜る
hə / hŋ / ŋ / hŋga	はい
həmcik	そのようなもの、同じもの
həpā	間投詞 (冷たいものに触れたとき)
həskit	低い (?)
hətkit	曲げる、かがむ (?)
həvt	(薪を) 割る (?)

hilx	舌
hiɣyit	軽い
hiskit	薄い
hivs	白樺
homo	いくつかの
hontq	袋
hoɣt	寒い
hort	美味しい
hujvut	覚える、思い出す
hunkut	とどまる、滞在する
hunvt	ある／いる、暮らす
hupt	座る、乗る
hurɣuɣtut	心配する、気づかう
hustox	そこに、あそこに
hut	それ、そいつ
i	川
icit	(火を) おこす
iyɣlut	恐れる
iyɣmət	与える
iyrt	後に続く
iyt	殺す
iyzt	着る
in	彼ら、彼女ら
ijnk	食べ物
ijnt	食べる
irlət	引く、引っ張る
irt	追う、追跡する
iskujt	蹴る
itə	あご
itəyut	見せる
itət	見る、気づく、見える、見つける

itrert	言えない
itt	言う、伝える、答える
ivt	ある／いる、存在する
izt	剥く
jajmt	知っている
jajt	作る、直す、する
jayzut	知らない
jalʏət	(窓、ふたを) 開ける
jamrat	味わう
janci rert	迷う、どうにもできない
janr ^h	なぜ
janj	彼、彼女
japlak	リンゴ (<ロシア語)
japrka	リンゴ (<ロシア語)
jaqt	切る
jaɣnit	ほっする、ほしい、～したい
jar ^h pət	ふたをする
jatot	(ふたを) 閉じる
jaxut	知っている、識別する (?)
jaytət	信じる
jazt	呼ぶ
jelelt	舐める
jet	煮る
jexot	覚める、目覚める
jitt	触る
jixtət	突く、押す (?)
jiyrt	真似る
joput	集める
jort	会う
josqot	渡る、超える
jotott	問う

jujvut	覚える、思い出す
juyt	入る
jupt	結ぶ
jurit	読む
keŋrat	楽しい、面白い
keŋralat	楽しい、面白い
kert	いやである、～したくない
ker ^h	垢
ker ^{hq}	海
kət	(雨が) 降る
kəlt	長い
kəmjot	ふれる、さわる
kəŋt	凍る
kəprt	立つ、止まる
ki	靴
kiy ^h	ひも (紐)
kofe	コーヒー
kuct	落ちる
kutli	外
kuzt	出る
k ^h awk	いいえ、違う
k ^{he}	網
k ^{heŋ}	太陽
k ^{heq}	キツネ[動物]
k ^{herajt}	話す
k ^{her^hqot}	(魚を) 釣る
k ^{het}	痩せている
k ^{həlmər^h}	へそ
k ^{həmlət}	考える、思う
k ^{hərt}	飢える、お腹がすく
k ^{hət}	強い

k ^h ət	勝つ
k ^h ikr ^h	上
k ^h lajt	話す、話し合う
k ^h lə	空
k ^h lojt	走る
k ^h lu loŋ	1月
k ^h lut	恐れる
k ^h ruŋŋara	しばしば
k ^h u	矢
k ^h urjod	漏れる
k ^h ur ^h	腸
k ^h utə	穴
k ^h uvuŋ	糸
k ^h uzər ^h	クズリ[動物]
ɣet	得る、取る、買う
la	風
layi	鮭
layi loŋ	9月
layi votə loŋ	9月 (鮭を干す月)
laŋərt	貸す
laŋərt ɣet	借りる
laqlaqt	平らな、滑らかな
lar ^h q	上着、ワンピース
laχ	雲
lef	隣、そば
lep	パン (<ロシア語)
lert	つるつるしている、滑る
lert	遊ぶ
les	たくさん
ləx	雨
loci	ロシア人

loŋ	月、暦
lu	歌
luŋ vo	ルン村
lur ^h	氷
lut	歌う
ma	干し魚
majmajt	切れない、鈍い
majit	崩れる
malʁot	多い
mam	妻
mamt	つかむ、握る
mamʁac	老婆
maŋqot	好きである
mart	のぼる、上がる
masqso	ラッド (コイ科の魚)
masqso loŋ	6月
mat	近い
maɣtur ^h	本当、真実
maɣtur ^h kir ^h	本当に
mæckət	小さい、幼い
mækr̄t	まっすぐである
məŋix	乳
mət	聞く
mi	内、中
mif	地球、土、地面
min	私たち (包)
minr ^h	八つ
mjaqr ^h	二つ
mjujot	(オオカミ／犬が) なく
momut	吸う
moŋt	(髪を) 切る

mor ^h qat	生きる
mos	モース (料理名)
mott	もたれる
mraŋit	無為に時間を過ごす
mu	船
muɣf	日、昼間
muɣvmuɣf	毎日
muɣvɲix	一日中
mumjot	急ぐ
murŋ	馬
mut	死ぬ
mu xici loŋ	11 月 (船を引き上げる月)
muzr ^h	棒、竿
mχoŋ	十
mχoŋ mjaqr ^h	二十
naɸ	今
namr ^h	昨日
nanχ	姉
napə	まだ
nar ^h	誰
nawx	今日
nəkr ^h	四つ
nət	する、仕事する
nonq	(動物の) 仔
noskt	細い、狭い
noχot	嗅ぐ
nr ^h aksk	みな、すべて
nr ^h ət	見る、会う
nuyi	前
nuyit	前である
nut	何

nux	針
ɲantroŋ	九つ
ɲaqr ^h	一つ
ɲax	目
ɲemχa	か (蚊)
ɲenit / ɲonut	甘い
ɲetf	顔
ɲevr ^h qi	まつ毛
ɲi	私
ɲiyvŋ, ɲivŋ	人
ɲiyzaχ	涙
ɲin	私たち (除)
ɲiɲeq / ɲonuk	少し
ɲixər ɲavr ^h ki	眉毛
ɲo	倉
ɲa	動物
ɲacx	足
ɲafq	友達
ɲajram	肋骨
ɲajrəx	翼
ɲaki	しっぽ
ɲayri	背中、肩 (?)
ɲayr ^h	壁
ɲayt	追う、追い出す
ɲamac	皮、毛皮
ɲamk	七つ
ɲamx	毛
ɲanyət	探す
ɲanyəf	骨
ɲaɲanyt	狩りをする (< 動物を探す)
ɲaryər ^h	胸

ɲarko lon	10月
ɲarkor ^h	罨
ɲarkot	罨を仕掛ける、罨
ɲar ^h mat	待つ
ɲar ^h qi	のみ (蚤)
ɲatt	(長さを) はかる
ɲawr ^h	腹
ɲawsor ^h kt	悲しむ
ɲax	六つ
ɲax	肝臓
ɲazl	足の裏
ɲəɲik	頬
ɲət	暗い
ɲif	心、心臓
ɲirɲoɲr ^h	コップ
ɲojq	卵
ɲoɲ	脂肪
olɲaɲ	豚
oɲsik	つんぼ、耳が聴こえない人
oɲtə	尻
oɲut	集める
oɲm	樹皮
oɲri	後頭部
oɲrof	クロテン
oɲpott	働く (<ロシア語)
osk	ウサギ
oɲt	薬
ozr ^h	あり (蟻)
ozt	起きる、起き上がる
paɲnr ^h ak	常に、いつも
pal	林、森、山

pantt	生まれる
paqt	短い
paɤlat	赤い
parf	夕方
paskm taf	学校
pasq	半分 (?)
pat	明日
paɤ	石
pazt	投げる、捨てる
pert	重い
pəkzt	無くなる
pərr ^h	机
pə ^h k	自分、～だけ
pilt	大きい
pitɤəŋ	本
pitul	小ぶりのキュウリウオ (?)
pitul loŋ	5月
piwt	(色が) 黒い
pixtə	ひざ
poci	顔
pocurt	きれい、美しい
pojkn	速く、急いで
polmæk	めくら、目が見えない人
polt	倒れる
potat	干し魚 (ma) を作る
potə	魚を干すときに頭にあける穴
Potɤ	地名
pozt	横になる
pujŋa	鳥
pujŋataf	巣 (鳥の家)
pujt	飛ぶ

pulk ɲanyəf	くるぶし
pulkvulkt	丸い、転がる
punt	弓
put	(果物などが) 熟する
pux	汗
p ^h askamt	学ぶ、勉強する
p ^h aχ	窓
p ^h eɲɲawt	動く
p ^h eq	ニワトリ
p ^h ert	疲れる
p ^h əɲt	膨れる、腫れる
p ^h ətt	裂ける、割れる、ひびが入る
p ^h iɲt	待つ
p ^h iɲt	隠れる
p ^h ir ^h kur ^h	ハナウドの一種
p ^h ir ^h kur ^h loŋ	7月
p ^h ir ^h pirt	回る
p ^h laqr ^h kir ^h	突然
p ^h lavlat	輝く、光る
p ^h ɲaɪt	若い
p ^h ɲar ^h mat	待つ
p ^h olayt	叫ぶ
p ^h oŋrukujt	わびる、謝る
p ^h ott	縫う
p ^h rawut	学ぶ、勉強する
p ^h rawuk	生徒
p ^h rət	来る
p ^h sarɔt	休む
p ^h ut	外に出る
p ^h χoŋiɔt	悲しい
qalɔalt	清潔である、汚れていない、明るい

qanŋ	犬
qar	カラス
qar loŋ	3月
qart	止まる、停止する
qavrt	無い、～しない
qaxjut	泣く
qat	(川のほうへ) 行く
qoq	赤ちゃん
qor ^h qor ^h	のど
qor ^h qort	沸く
qot	(水の上で) 移動する、行く
qot	痛い、病気である
q ^h a	名前 (苗字はない)、名称
q ^h atut	射る、撃つ
q ^h avi	雪
q ^h avt	熱い、暑い
q ^h awt	乾く、枯れる
q ^h aχ	槍
q ^h ojut	騒ぐ
q ^h omr ^h	砂
q ^h onət	白い
q ^h oqvelk	貝
q ^h oβl	心、気持ち
q ^h os	首
q ^h ot	眠る
q ^h var ^h	虫 (?)
βaqvət	洗濯する
βarut	止める
βocut	(下へ) 落とす、おろす
βorut	治す、救う
βor ^h qorut	沸かす

rajut	書く、描く
rayrayut	嫌う
rayvət	回る、回転する
raq	米
rat	飲む
rawut	教える
rawuk	教師
rəjt	振る
rənək	市場 (口)
rərut	ほどく
rot	手伝う、助ける
ror / rot / ron	一緒に
rorut	(火を) 消す
rozt	分ける
rujyut	沈める
rukt	噛む、噛みつく
ruyt	選ぶ
r ^h ak	~回
r ^h aŋq	女
r ^h aŋqəvɪŋ	娘、女の子
r ^h at	焼く
r ^h ə	ドア
r ^h əlyət	(ドアを) 開ける
r ^h əmt	泳ぐ
r ^h ər ^h kət	(ドアを) 閉める / 閉まる、ロックする
r ^h ər ^h kər ^h	鍵
r ^h ict	(ドアを) 閉める、閉じる (?)
r ^h mət	超える
r ^h ort	持っていく (?)
r ^h uvt	燃やす
sarut	いっぱいにする、満たす

seta	砂糖
sik	全部、終わり
sikm	みんな
sit	置く
siwut	脱ぐ
sizəm	日本人
soŋot	折る
soɾt	溶ける
soɾut	溶かす
taf	家
tafcij	塩
taj	平野、平原
takət	暖かい
takɲi	爪
talqat	生である、乾燥していない
talɣtalɾt	弱い (?)
tamk	手
tamx	タバコ
tatat	全部／すべてである
taurt	(時間が) 長い
teɲi	カラフトマス
teɲi loŋ	8月
teɾt	(風が) 吹く
ter ^h tert	遅い
təŋank	昔
təvla loŋ	12月
tif	道
tivt / təvt	涼しい
tol	水、水辺
tort	(火が) 消える
toru	そよ風

tot	腕
tot	太い
tu	湖
tujyt	沈む (?)
tujut	ほこりっぽい
tukrukt	吐き気がする
tuys	言葉、単語
tunx	ここで
tujnim	指
tur ^h	肉
tus	ここ
tut	これ、こいつ
tut	(川のほうから) 戻る
tuvɲkun	兄弟、姉妹
tuzt	冷たい
t ^h amat	安心する、落ち着く
t ^h amcikur	どのようにして
t ^h amcir	どうして
t ^h anx	どこで
t ^h aŋs	いくら、いくつ
t ^h aŋs c ^h as	何時 (< いくら時間)
t ^h ara	前 (?)
t ^h as	どこ
t ^h at	どれ
t ^h at	呼吸する
t ^h atɲ	朝、朝ご飯
t ^h ax	額
t ^h əjfk	だいぶ前、昔
t ^h əjit	青い／緑色の
t ^h əlf	遠いところ (?)
t ^h ərt	見る

t ^h ət	遠い
t ^h om	油
t ^h oqr̥t	動く
t ^h oqr ^h	五つ
t ^h oʁzŋ	実
t ^h r ^h at	セキレイ (鳥)
t ^h r ^h at loŋ	4月
t ^h u	関節
t ^h uf	煙
t ^h uɣr ^h	火
t ^h uɲit	よく切れる、鋭い
t ^h uŋ	背中 (?)
t ^h ut	灰
t ^h vajt	唾を吐く
t ^h vit	終わる
t ^h xə	上
t ^h ɣar ^h pət	忘れる
ulaŋ	丘
ult	高い
umt	怒る
uɲɣər ^h	影、星
urkun hunve!	さようなら (「よくして居てください」という意味)
urt	良い
urtut	数える
ur ^h	島
ut	体、身長
ut	燃える
ux	鼻
uxmut	戦う、戦争する
uɣrut	ともに、一緒に
vaj	下

val	色
vantut	育てる
vapt	担ぐ
vaqvaqt	苦い
vat	戦う、殴り合う
vavut / wavut	咀嚼する、噛む
vavutyun	結婚する
vert	広い
ver ^h kit	買う
ver ^h pət	売る
vesqart	固い
vetat	着る
vetaut	着せる
vəkzt	落とす、無くす
vəyr ^h k	のう、膿
vəyr ^h kt	腐る
vəlkət	混ぜる
vikut	放す、行かせる
vit	行く
vizləx	根 (?)
vo	村、集落
vocik	同じもの、似ているもの
vocit	同じである、～しそうだ (助動詞)
vot	つかむ
volut	倒す
vopot	集まる
vozut	横にする
vujut	砕く
vukvukt	暗い
vulvult	黒い
vulkvulkt	転がす

walwalt	犬がワンワンと吠える
wamq	手袋
waj	鍋、釜
wajt	押す、押しつける
wax	は (刃)
waxcud	裂く、破る
xevaj	綱、ロープ
xəzt	掘る
xicit	持ち上げる
ximi	上
xir ^h k	しらみ (虱)
xizt	履く
xrot	掛ける
χar ^h qavt	引っ掻く
χaut	～という名である、～と呼ばれる
χaut / χawut	乾かす
χawlus	紙、新聞、雑誌
χotoŋ	町、都市
zat	打つ、殴る
zalqa(u)t	騙す
zicvut	踏む
zosqot	壊す、割る
zut	洗う

参考文献

- Andrews, A. D. (2007) Relative clauses. In Shopen, Timothy (ed.), *Language Typology and Syntactic Description Second edition, Volume 2: Complex constructions*. New York: Cambridge University Press.
- アウステルリッツ, ロバート (1990)「類型から見たギリヤーク語」崎山理 (編)『日本語の形成』169-184. 三省堂.
- Austerlitz R. P. (1956) Gilyak Nursery Words. *Word* 12: 2. 260-279.
- _____ (1990) Typology in the service of internal reconstruction: Saxalin Nivx. In: Lehman, Winfred P. (ed.), *Language Typology 1987: Systematic Balance in Language*, 17-33. Amsterdam: Benjamins.
- Bhat, D. N. S. (2004) *Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic linguistic theory, Volume 2, Grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- _____ (2012) *Basic linguistic theory, Volume 3, Further grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Dryer, M. S. (1986) Primary objects, secondary objects, and antitativity. *Language* 62. 4: 808-845.
- Fortescue, M. (2011) The relationship of Nivkh to Chukotko-Kamchatkan revisited. *Lingua* 121 (8): 1359-1376.
- _____ (2016) *Comparative Nivkh Dictionary*. Muenchen: LINCOM GmbH.
- Gruzdeva, E. (1998) *Nivkh*. München: Lincom Europa.
- Haspelmath, M. (1993) *A Grammar of Lezgian*. (Mouton Grammar Library, 9.) Berlin: Mouton de Gruyter.
- 服部健 (1944)『ギリヤーク』東亜民族要誌資料第一輯. 帝國學士院東亞諸民族調査室.
- _____ (1955)「ギリヤーク語」市河三喜・服部四郎 (編)『世界言語概説』2: 751-775. 研究社.
- _____ (1988)「ギリヤーク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第1巻』1408-1414. 東京: 三省堂
- _____ (2000)『服部健著作集: ギリヤーク研究論集』札幌: 北海道出版企画センター.
- Jakobson, R. (1942) The Paleo-Siberian Languages. *American Anthropologist* 44 (4), 602-620.

- _____ (1971) Notes on Gilyak. In *Selected Writings II. Word and Language*, pp. 72-97. The Hague and Paris: Mouton.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典第6巻 (術語編)』東京: 三省堂.
- 金子亨 (2010) 「ニヴフ語動詞の語形成」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第12号, 41-59. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の3グループ (チュルク, モンゴル, ツングース) 及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのかー対照文法の試みー」『日本語系統論の現在』日文研叢書 31, アレキサンダー・ボビン/長田俊樹共編. 国際日本文化研究センター. 249-340.
- _____ (2009) 「ニヴフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について」北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター (編) 『サハリンの言語世界』127-144. 北大文学研究科公開シンポジウム報告書.
- Keenan, E. L. (1985) Relative clauses. In Shopen, Timothy (ed.), *Language typology and syntactic description: Complex constructions*. Volume 2. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Keenan, E. L. and B. Comrie (1977) Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8. 63-99.
- Kim, B. H. (1979) Killiyakhu (Gilyak) eey kwanhaye. *Hankul* 163, 419-441. Sewul: Hankulhakhoy
- Krejnovič, E. A. (1934) Nivkhsij (giljackij). In *Jazyki i pis'mennost' narodov Severa III*, E. A. Krejnovič (ed.), 181-222. Leningrad: Institut narodov Severa, Uchpedgiz.
- _____ (1937) *Fonetika nivkhsckogo iazyka*. Moscow and Leningrad: Uchpedgiz.
- _____ (1955) Giljacko-tunguso-man' čžurskie jazykovye paralleli. *Doklady i soobščeniya Instituta Jazykoznanija AN SSSR* 8. 135-167.
- _____ (1958) Ob inkorporirovanii v nivxskom jazyke. *Voprosy Jazykoznanija* 7 (6): 21-33.
- _____ (1979) Nivxskij jazyk. *Jazyki Azii i Afriki III*. Moskva: Izdatel'stvo Nauka. 295-329.
- Malchukov, A., M. Haspelmath and B. Comrie (2010) Ditransitive constructions: a typological overview. In Andrej Malchukov, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (eds.), *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*, 1-64. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Mattissen, J. (2003) *Dependent-Head Synthesis in Nivkh: A Contribution to A Typology of Polysynthesis*. Amsterdam: John Benjamins.

- _____ (2008) *Converbs in Nivkh*. In Karen H. Ebert, Johanna Mattissen, Rafael Suter, *From Siberia to Ethiopia : converbs from a cross-linguistic perspective*. Zürich : Universität Zürich.
- 中川裕・佐藤知己・斎藤君子 (1993) 「サハリンにおけるニヴフ語基礎語彙の地域差」『サハリンの少数民族 (国際学術研究報告書)』 209-254.
- Nedjalkov, V. P. (1995) Some typological parameters of converb. In Haspelmath, Martin, and Ekkhard König, (eds.), *Converbs in crosslinguistic perspective*, pp. 97-136, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nedjalkov, V. P. and G. A. Otaina (1981) Nivkhskie reflektivnye glagoly i tipologija smyslovykh reflektivov. In *Zalogovye konstrukcii v raznostrukturykh jazykakh*, V.S. Khrakovskij (ed.), 185-220. Leningrad: Nauka.
- _____ (2013) *A Syntax of the Nivkh Language: The Amur Dialect*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Nedjalkov, V. P., G. A. Otaina, and A. A. Xolodovič (1995[1969]) Morphological and lexical causatives in Nivkh [translated by Judith M. Knott]. In: Bennett, Bynon and Hewitt (eds.). *Subject, Voice and Ergativity Selected Essays*, pp. 60-81. London: University of London.
- Nikolaev, S. L. (2015a) Toward the reconstruction of Proto-Algonquian-Wakashan. Part 1: Proof of the Algonquian-Wakashan relationship. *Journal of Language Relationship*. 13/1. Moscow, 23-61.
- _____ (2015b) Toward the reconstruction of Proto-Algonquian-Wakashan. Part 2: Algonquian-Wakashan sound correspondences. *Journal of Language Relationship*. 13/4. Moscow, 289-328.
- Noonan, M (2007) Complementation. In Shopen, Timothy (ed.), *Language Typology and Syntactic Description Second edition, Volume 2: Complex constructions*. New York: Cambridge University Press.
- Otaina, G. A. (1978) *Kačestvennye glagoly v nivxskom jazyke*. Moskow: Nauka.
- Panfilov, V. Z. (1954) K voprosu ob inkorporirovanii – na materialax nivxskogo (giljaskogo) jazyka. *Voprosy jazykoznanija* 3 (6): 6-27.
- _____ (1962) *Grammatika nivkhskogo iazyka* 1. Moscow and Leningrad: Nauka.
- _____ (1965) *Grammatika nivkhskogo iazyka* 2. Moscow and Leningrad: Nauka.
- _____ (1968) Nivxskij jazyk. *Jazyki narodov SSSR V*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka. 408-434.
- _____ (1974) O proisxoždenii sklonenija v nivxskom jazyke (k probleme proisxoždenija affiksov i stanovlenija grammatičeskix kategorij v aggljutinativnyx jazykax). Skorik, P. Ja. (ed.). *Sklonenie v paleoaziatskix i samodijskix jazykax*. Leningrad: Nauka. 78-94.

- _____ (1976) Tipologija grammatičeskoj kategorii čisla i nekotorye voprosy ee istoričeskogo razvitija. *Voprosy jazykoznanija* 4. 18-38.
- Payne, T. E. (1997) *Describing morphosyntax A guide for field linguistics*. Cambridge University Press.
- Sangi, V. M. (2012) *Syn Ryby Tjagmak*. Sakhalinskaja obl. tipografija.
- Savel'eva, V. N. and Ch. M. Taksami. (1970) *nivxsko-russkij slovar'*. Moskva: Sovetskaja enciklopedija.
- Shagal, K (2016) Relative clauses in the languages of Sakhalin as an areal feature. In E. Gruzdeva and J. Janhunen (eds), *Linguistic crossings and crosslinguistics in Northeast Asia: Papers on the Languages of Sakhalin and Adjacent Regions*. Studia Orientalia, vol. 117, Finnish Oriental Society, 153–170.
- Shimoji, M (2008) *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Doctoral dissertation, ANU.
- Shiraishi, H. (2009) On the Alternation between CVCVC and CVCC Forms in Nivkh. 『サハリンの言語世界』津曲敏郎編, 北海道大学大学院文学研究科, 85-94.
- _____ (2010) *Topics in Nivkh Phonology*. Dissertation at GroningCVBniversity. Saarbrücken: VDM Publishing.
- Stassen, L. (2000) AND-languages and WITH-languages. *Linguistic Typology* 4.1: 1-54.
- _____ (2013) Comparative constructions. In: Dryer, Matthew S. & Martin Haspelmath (eds.). *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. Available online at: <http://wals.info/chapter/121>.
- 高橋盛孝 (1942) 『樺太ギリヤク語』大阪朝日新聞社.
- 丹菊逸治 (2008) 『アジア・アフリカ基礎語彙集 51 ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集 (ノグリキ周辺地域)』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- _____ (2012) 「ニヴフ語の複数表示 : ポロナイスク方言の-gun の特殊用法」『北方人文研究』5, 113-122.
- _____ (2014) 『ニヴフ言語文化資料集 2 ニヴフ語サハリン方言語彙集』札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 丹菊逸治・パクリナ (2008) 『V・サンギ採録ニヴフ語サハリン方言音声資料集 (1) ーフトククさんの昔話と体験談-』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- _____ (2014) 『ニヴフ言語文化資料集 1 タチャナ・ウリタ伝承集』札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 寺村秀夫 (1984) 『シンタクスと意味 第II巻』東京: くろしお出版.

山田祥子 (2013)『ウイльта語北方言の文法と言語接触に関する研究』博士論文, 北海道大学.

謝辞

本論文を完成させるに当たり、多くの方々にご指導とご助言をいただきました。

東京外国語大学大学院総合国際学研究院の風間伸次郎先生、並びに渡辺己先生、箕浦信勝先生には、長年にわたってご指導とご鞭撻を賜りました。特に指導教員の風間伸次郎先生には本論文の根幹に関わる問題、および通言語学的な観点からのご意見などご丁寧にご指導いただき、心より感謝いたします。

何より、ニヴフ語のコンサルタントであるパクリナ氏と故サチグン氏にはニヴフ語を教えていただいただけでなく、さまざまな形での支援をいただきました。心より御礼を申し上げますとともに、サチグン氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

北海道立北方民族博物館の山田祥子先生、ビビコワ氏には現地での滞在に関して様々な便宜を図っていただきました。心より御礼申し上げます。

さらに、千葉大学の故金子亨先生、札幌学院大学の白石英才先生、アイヌ先住民研究センターの丹菊逸治先生にはニヴフ語の専門家というお立場から貴重な資料を送ってくださり、またご意見やご助言をいただきましたこと、心より御礼申し上げますとともに、金子先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

また、東京外国語大学風間伸次郎研究室の先輩・同期・後輩の皆さんには学内の記述言語学研究会などでのご指摘やコメントをはじめ、様々な面で支えていただきました。誠にありがとうございました。

2012 年度から 2014 年度にかけては日本学術振興会特別研究員として科学研究費を賜りました。本論文はその成果でもあります。この場を借りて厚く御礼申し上げます。